大宰府史跡

昭和54年度発掘調査概報

昭和55年3月

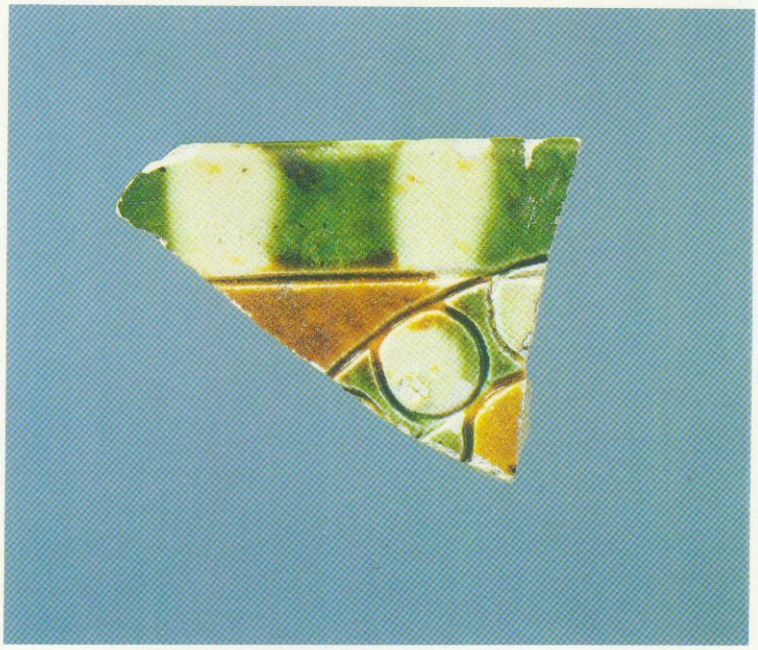
九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和54年度発掘調査概報

昭和55年3月

九州歴史資料館



唐三彩陶枕片（蔵司跡出土）

序

今年度は、昭和52年度に計画した新5カ年計画の3年目にあたる。この計画では、観世音寺ならびに同子院跡、条坊地区を対象に調査を進めている。ここに報告する本年度の調査内容は、昭和52年度から進めてきた蔵司地区の調査結果が中心となっている。この地区における遺構の保存状況は、必ずしも良好といえるものではなかったが、二条の築地を検出することができた。この築地の性格については、ここでは一応の見通しを述べるにとどめた。調査を終ったばかりの報告であるから、今後の検討に俟つことがらも少くなく、また、さらに周辺の地域の調査を行う必要があろう。また緊急調査として行った般若寺跡の報告については、今後のことを考慮して別途に報告書を刊行することとした。

新年度は、いよいよ観世音寺地区区画整理事業に関する発掘調査が本格的に実施される。発掘調査を実施するにあたっては、まず地元の理解と協力が必要である。今後とも一層の援助をお願いする次第である。

つぎに直接九州歴史資料館の報告事項ではないが、太宰府町に文化財専任担当者をおく事になり、長らく大宰府史跡の調査に従事していた山本信夫氏が着任された。そのあとで町では買地券その他が出土し新聞紙上をにぎわした。調査の概報は町の教育委員会から刊行される事と聞く。また遺構展示施設（覆屋）が政庁跡月山のふもとに新築され、3月のオープンを目指して工事が急がれている。太宰府町の文化財行政の発展を祈念し、末尾に付言する事にした。

昭和55年3月31日

九州歴史資料館長　鏡山　猛

例　　言

1．本概報は昭和54年度に実施した大宰府史跡の発掘調査概要の報告である。ただし、第60次調査は53年度からの継続調査であり、未報告であるので併せて報告する。第66、68、69次調査については顕著な遺構・遺物が検出されなかったので報告は省略した。また第67次調査は現在調査継続中であるので報告は次回にゆずる。

2．検出遺構については九州芸術工科大学沢村仁教授の指導を得た。

3．本報告の執筆、編集については調査課の石松好雄、倉住靖彦、高倉洋彰、横田賢次郎、森田勉、高橋章が行なった。遺物の整理については井上トシ子、松浦敏子、田崎道子の協力を得た。

4．遺構、遺物の写真については学芸第一課石丸洋の撮影による。

目　　次

序
Ⅰ　調査計画……1
Ⅱ　調査経過……2
1　概　　要……2
2　第60次調査……4
検出遺構……4
出土遺物……7
小　　結……21
3　第63次調査……22
検出遺構……22
出土遺物……22
小　　結……25
4　第64次調査……26
検出遺構……26
出土遺物……27
小　　結……29
5　第65－1次調査……30
検出遺構……30
出土遺物……32
小　　結……40
6　第65－2次調査……41
検出遺構……41
出土遺物……47
小　　結……62
Ⅲ　ま と め……63
1　各期の設定と遺構……63
2　出土遺物からみた各期の年代……65
3　築地の方位とその設置時期……66

挿 図 目 次

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図……折り込み
第２図　第60次調査土層模式図……4
第３図　第60次調査遺構配置図……折り込み
第４図　ＳＸ1515実測図……5
第５図　ＳＸ1501実測図……6
第６図　整地層中・下出土土器実測図(1)……8
第７図　整地層中・下出土土器実測図(2)……折り込み
第８図　暗灰色粘土層出土陶器実測図……10
第９図　ＳＫ1510出土土器実測図(1)……11
第10図　ＳＫ1510出土土器・陶器実測図(2)……12
第11図　ＳＤ1506・1507・1508、炭層Ⅰ・Ⅱ、黄灰色土層出土土器・陶磁器実測図……14
第12図　墨書土器、硯実測図……15
第13図　黄灰色砂層出土動物形須恵製品実測図……15
第14図　第60次調査出土軒丸瓦実測図・拓影……16
第15図　第60次調査出土軒平瓦実測図・拓影……17
第16図　第60次調査出土丸・平瓦実測図・拓影……18
第17図　第60次調査出土面戸瓦実測図・拓影……19
第18図　腐植土層出土木製品実測図……20
第19図　腐植土層出土杵実測図……21
第20図　第63次調査土層模式図……22
第21図　第63次調査遺構配置図……22
第22図　ＳＥ1545実測図……23
第23図　ＳＥ1545、腐植土層、炭層、黒色粘土層、暗灰色粘土層出土土器・陶器実測図……24
第24図　暗灰色粘土層出土土器実測図……25
第25図　第64次調査地周辺図……26
第26図　第64次調査遺構配置図……26
第27図　ＳＸ1546内大甕実測図……27
第28図　第64次調査出土土器・陶器実測図……27
第29図　ＳＸ1546出土大甕実測図……28
第30図　第64次調査出土軒平瓦実測図・拓影……29

第31図　第65-1次調査土層模式図 ……30
第32図　第65-1次調査遺構配置図 ……折り込み
第33図　ＳＡ1410・ＳＤ1550土層実測図……31
第34図　整地層出土土器実測図(1)……33
第35図　整地層出土ミニチュア土器・模造鏡実測図(2)……34
第36図　整地層出土土器実測図(3)……折り込み
第37図　ＳＤ1555Ａ、茶灰色土層、灰茶色土層出土土器・陶磁器実測図……35
第38図　第65-1次調査丸・平瓦実測図・拓影 ……37
第39図　第65-1次調査出土平瓦実測図・拓影 ……38
第40図　第65-1次調査出土熨斗瓦実測図・拓影 ……39
第41図　第65-2次調査土層模式図 ……41
第42図　ＳＢ1560Ａ・Ｂ柱穴・根石実測図……42
第43図　第65-2次調査遺構配置図 ……折り込み
第44図　ＳＢ1565Ａ・Ｂ実測図……43
第45図　ＳＥ1558・1559実測図……45
第46図　ＳＢ1570、ＳＫ1567・1568、ＳＤ1569、ＳＸ1571実測図……46
第47図　ＳＸ1573実測図……47
第48図　ＳＸ1556出土土器実測図……47
第49図　ＳＢ1560Ａ出土土器実測図……48
第50図　ＳＥ1558出土土器実測図(1)……49
第51図　ＳＥ1558出土土器実測図(2)……50
第52図　ＳＥ1558出土土器実測図(3)……51
第53図　ＳＥ1558出土土器・陶磁器実測図(4)……52
第54図　ＳＥ1559出土土器実測図……52
第55図　ＳＫ1567出土土器実測図……53
第56図　ＳＫ1574出土土器実測図……54
第57図　ＳＸ1561出土土器実測図(1)……56
第58図　ＳＸ1561出土・陶器・陶磁器実測図(2)……57
第59図　ＳＸ1561出土石鍋実測図……58
第60図　第65—2次調査出土軒丸瓦実測図・拓影 ……59
第61図　帯金具・石帯実測図……60
第62図　ＳＫ1567・1558、ＳＤ1569出土鋳型・鞴羽口実測図……61
第63図　蔵司前面地域遺構配置図……折り込み

表　目　次

第１表　主要遺構編年表……64

図　版　目　次

巻首図版　第60次調査　出土唐三彩
図版１　第60次調査区全景
図版２　下層遺構ＳＸ1406
図版３　礎石建物ＳＢ1500
図版４　（上）築地ＳＡ1410・（下）階段ＳＸ1520
図版５　（上）暗渠ＳＸ1515・（下）ダム状遺構ＳＸ1501
図版６　（上）唐三彩陶枕出土状態・（下）木製品杵出土状態
図版７　第63次調査区全景
図版８　（上）竪穴状遺構ＳＸ1546・（下）大甕出土状態
図版９　（上）第65-１次調査区全景・（下）築地ＳＡ1410、溝ＳＤ1550
図版10　築地ＳＡ1410Ａ・Ｂ瓦落下状態
図版11　（上）築地ＳＡ1410Ｂ瓦落下状態・（下）溝ＳＤ1401・1555
図版12　第65-２次調査区全景
図版13　建物ＳＢ1560Ａ・Ｂ
図版14　掘立柱建物ＳＢ1560Ａ柱根
図版15　掘立柱建物ＳＢ1560Ａ根がらみ
図版16　礎石建物ＳＢ1565Ａ・Ｂ
図版17　（上）掘立柱建物ＳＢ1570、保土穴ＳＸ1571・（下）保土穴ＳＸ1571
図版18　（上）井戸ＳＥ1558・（中）井戸ＳＥ1559・（下）瓦組遺構ＳＸ1573
図版19　第60次調査　整地層中・下出土土器(1)
図版20　第60次調査　整地層中・下出土土器(2)
図版21　第60次調査　ＳＫ1510出土土器
図版22　第60次調査　ＳＤ1508、炭層Ⅰ・Ⅱ、黄灰色土層、動物形須恵製品
図版23　第60次調査　出土墨書土器、硯
図版24　第60次調査　出土軒先瓦
図版25　第60次調査　出土軒丸瓦

図版26　第60次調査　出土丸・平瓦
図版27　第60・65-2次調査　出土木製品、ＳＢ1560Ａ柱根
図版28　第63次調査　出土土器
図版29　第64次調査　出土土器
図版30　第65-1次調査　整地層一括出土土器(1)
図版31　第65-1次調査　整地層一括出土土器(2)
図版32　第65-1次調査　整地層一括出土土器(3)
図版33　第65-1次調査　出土丸・平瓦
図版34　第65-1次調査　出土平瓦
図版35　第65-2次調査　ＳＥ1558出土土器(1)
図版36　第65-2次調査　ＳＥ1558出土土器(2)
図版37　第65-2次調査　ＳＥ1558出土土器(3)
図版38　第65-2次調査　ＳＫ1567出土土器、出土帯金具、石帯
図版39　第65-2次調査　ＳＫ1574出土土器
図版40　第65-2次調査　ＳＸ1561出土土器(1)
図版41　第65-2次調査　ＳＸ1561出土土器(2)
図版42　第65-2次調査　鋳造関係出土遺物
図版43　第60・64・65-1・65-2次調査　出土軒先瓦・道具瓦

第1図　大宰府史跡発掘調査地域図

I　調査計画

昭和54年度の発掘調査は、昭和52年度に立案した5カ年計画の第3年次にあたる。この5カ年計画では、調査の対象を観世音寺および同子院跡ならびに条坊地区の遺構確認においている。したがって今年度の調査も基本的には、この計画に沿って、次の地域について調査を行うこととした。

調査次数	調査地区	調査面積(㎡)	調査期間	備　考
63	6 ZGK	35	4月	学校院跡（現状変更）
64		50	5月	御笠団印出土地周辺（発掘届）
65	6 AYT－A	2,000	6月～9月	蔵司跡
66	9 KKK	1,150	9月～12月	金光寺跡
67	6 KKZ	1,050	1月～3月	観世音寺僧房跡

まず第63次調査および第64次調査は住宅建設にともなう事前調査である。第65次調査は蔵司地域で、現在その遺構が、まったく判明していない条坊地区と密接な関連性を有していると判断されるところから昭和52年度に、まず第54次調査を行い、さらに53年度から今年度当初にかけて第60次調査を行ったが、その隣接地である。2次にわたる調査の結果東西へのびる2条の築地を検出しており、この築地の西延長部および築地内側の遺構の把握を目的としたものである。第66次調査は観世音寺子院である金光寺跡推定地の調査である。

観世音寺子院については『筑前国続風土記』に49の子院名があげられている。しかしながら、この子院については、これまで、ほとんど研究はなされておらず、その位置すら不明のものが多い。この金光寺跡については昭和28年九州大学総合文化研究所によって一部の発掘調査が行われており、5間×7間の礎石建物が検出されている。昭和53年度には第57次調査として、この建物遺構の再調査および、その周辺の遺構状況把握のため発掘調査を実施したところ広範囲にわたって、きわめて良好な状況で遺構が遺存していることが確認されるとともに、さらに北方へひろがっていることが判明した。このため今年度は第57次調査地の北部地域について発掘調査を実施することとした。次に第67次調査は観世音寺伽藍配置解明のための調査の一環である。観世音寺については、現在講堂礎石および塔心礎などが残っている。昭和32年に福山敏男氏らによって発掘調査が行われたが、講堂と回廊の取付き状況が明らかにされたほかは、塔跡を含む伽藍の東南部分については旧地表が後世に削平されているため遺構は、ほとんど残されていないことが判明した。また昭和51年度には第43次調査として僧房推定地の調査を行った。この調査でも遺構の保存状況は必ずしも良好ではなかったが、かろうじて残っている根石

から大房に比定される建物を明らかにすることができた。『延喜五年観世音寺資財帳』には、小子房、客僧房などの名称も見えており、今年度は第43次調査地の北側について発掘調査を行うこととした。

以上の計画については昭和54年5月22、23日に開催した大宰府史跡発掘調査指導委員会議において了承されたので計画どおり調査を実施することとした。

Ⅱ　調査経過

1．概　　要

昭和54年度の調査は昨年度からの継続調査として蔵司地区の第60次調査を続行するとともに、住宅建設にともなう事前調査である第63、64次調査を当初に実施した。この両次の調査では、調査面積が狭少なこともあり、顕著な遺構は検出されなかった。

第65次調査は調査地域が二カ所に分散したため、まず第54、60次調査で検出した築地の西延長部について調査を行った。調査の結果、約35mにわたって築地を検出するとともに修築の行われていることが確認され、築地は2期に分かれることが明らかになった。

この蔵司台地の南端については従来から築地の存在が想定されてきていたが、昭和52年度から行ってきた発掘調査によって、最終的に延長160mにわたって築地遺構を確認することができた。この築地は、さらに西へ延びていることは明らかであり、これまで方四町と考えられてきた政庁域をはるかに越えている。また、この築地の北側には、さらにもう一条の築地が平行して存在しており、これらの築地の性格究明については、今後の調査が期待される。ことに外側の築地については、政庁域を区画する大垣的な施設の可能性が、きわめて強いが、これを確定するためには、さらに広範囲にわたる調査が必要であろう。

この第65－1次調査の終了とともに9月20日より築地内側の地域について、これを第65－2次調査として着手した。この地域は蔵司台地のなかでも一段高くなっており、調査の結果、掘立柱建物4棟、礎石建物3棟、井戸2基、青銅工房跡などを検出し、遺構の保存状況は、他の地域よりも良好であった。なお蔵司台地については、この第65次調査をもって、すべて終了したことになる。

第65次調査終了にともない12月17日より金光寺跡の調査に着手した。この調査は3月末日現在調査継続中であるが、これまでに礎石建物、玉石組溝などを検出している。

今年度事業としては、このほかに観世音寺僧房跡について調査を行う計画であったが、第65次調査が2カ所に分散し、調査期間が予想よりも長期にわたったため、これについては来年度に繰り越さざるを得なかった。

以上のほか住宅建設にともなう事前調査として第66、68、69次の調査を行ったが顕著な遺構は検出されなかった。

昭和54年度の発掘調査地を地区別に記すと下記のとおりである。

調査次数	調査地区	調査面積(㎡)	調査期間	備考
60	6 AYT-A	2000	78. 11. 2～79. 7. 26	蔵司跡
63	6 ZGK	33	79. 4. 16～79. 4. 24	学校院跡
64		63	79. 5. 9～79. 5. 15	御笠団印出土地周辺
65-1	6 AYT-A	680	79. 6. 5～79. 9. 27	蔵司跡
65-2	6 AYT-A	920	79. 9. 20～79. 12. 22	〃
66	6 KKZ-B	50	80. 1. 8～80. 1. 11	観世音寺
67	9 KKK	(1050)	79. 12. 17～	金光寺跡
68	6 KKZ-A	10	80. 2. 12～80. 2. 13	観世音寺
69		60	80. 2. 26～80. 3. 6	字来木

2．第60次調査

本次調査は、昭和53年度に実施した第54次調査の東側に接した地域で、約2,000m²について調査を実施した。この第54次調査で検出した東西方向の2条の築地が東側地域にどのように延びていくのかを主たる目的とすると共に、蔵司前面地域に配されたであろう建物群の検出を目的として調査を開始した。地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字蔵司489番地である。

発掘調査は昭和53年11月2日に開始した。発掘面積が広いため2本の畦を南北方向に残し、東・西・中央部の三地域に分けて調査を進めていった。その結果、発掘区南半域は北東域からの深い流れになっており、極めて多量の土砂が堆積していた。そこで、南半域全体の完掘を止め、東部域だけを完掘し、中央部域は中位、西部域は上位まで調査し、北半域の遺構検出に主眼を置いた。昭和54年7月26日に補足調査を含め全て調査を終了した。

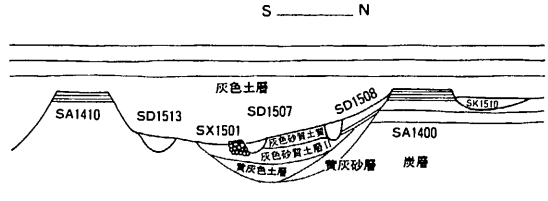
検出遺構

調査の結果、検出した主要な遺構は、礎石建物1、築地2条、土壙1、溝数本である。それらの遺構は大略3期に分かれる。第Ⅰ期は前面地域に諸施設を造営するために広範囲に整地する以前の時期、第Ⅱ期はこの整地面に建物1棟と築地2条を造営した時期、第Ⅲ期は洪水と考えられる大きな流れにより調査区南半域の大部分を破壊し、その後この地域が蔵司の役割を放棄するまでの時期である。以下各期毎に遺構を説明する。

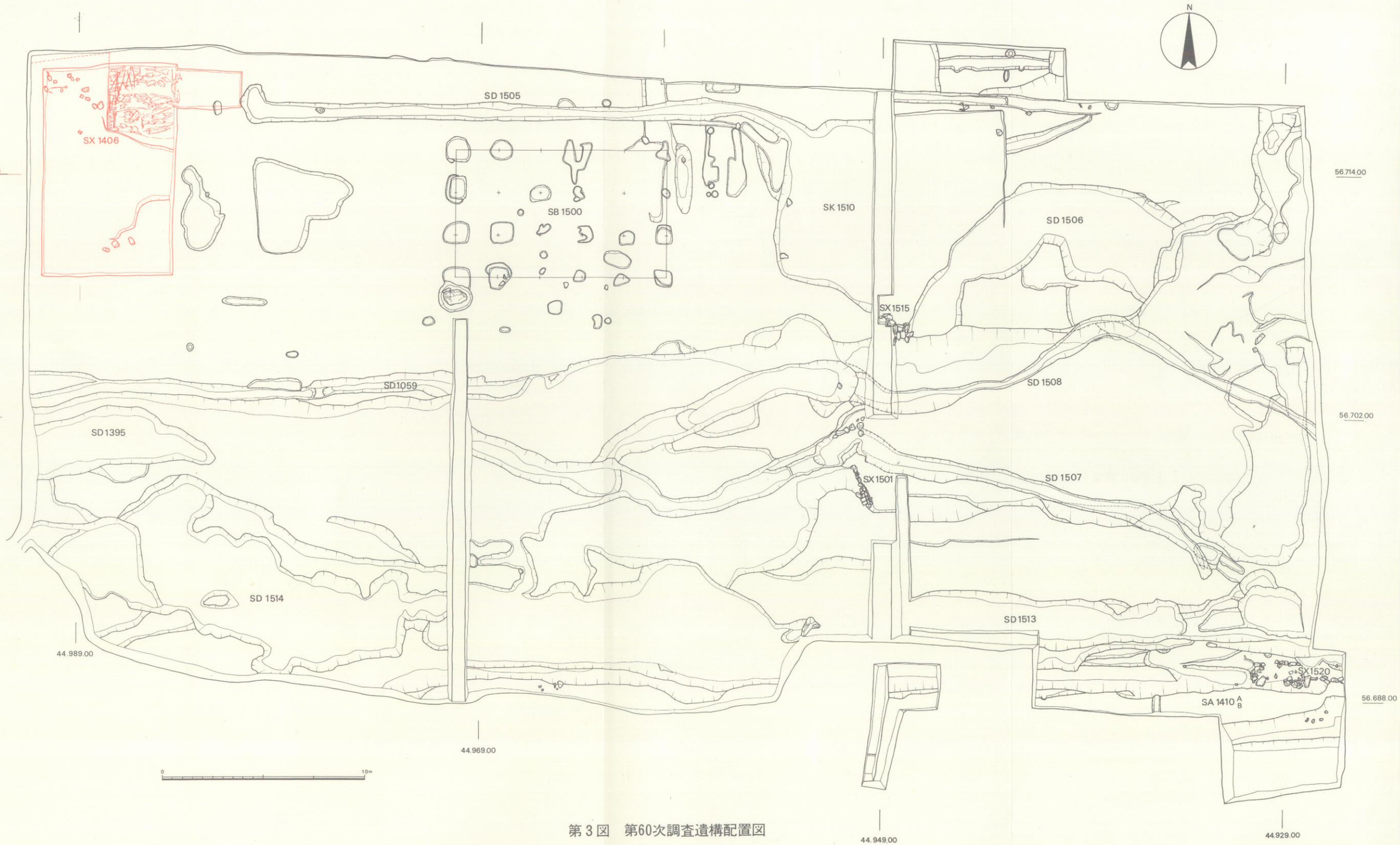
土層の関係（第2図）

遺構面を覆う灰色土層を除去すると発掘区北半域では、礎石建物ＳＢ1500、石組暗渠ＳＸ1515、溝ＳＤ1505・1506、土壙ＳＫ1510が検出され、南半域では灰色砂質土層が堆積していた。この灰色砂質土層を切って、溝ＳＤ1507・1508・1513が流れている。灰色砂質土層を除去すると灰色砂質土層Ⅱの上面に、北から南へ投棄されたような状態で炭層が発見された。また灰色砂質土層Ⅱ上にはダム状遺構ＳＸ1501がつくられていた。

第54次調査で検出したＳＸ1406の東側部分を調査するために、調査区西北隅部の一部を掘り下げた所、第54次調査と同様に暗灰色粘土層の下から黄色粘土層があらわれ、それを除去するとＳＸ1406が検出された。この黄色粘土層は東に向って薄くなり、褐色系の粘質土層に接続する。この褐色土系の下位に炭層および、腐植土層が形成されており、この両者からまとまって土器や木製品が出土した。



第2図　第60次調査土層模式図



第 3 図　第60次調査遺構配置図

第Ⅰ期

第Ⅰ期に属する遺構は、第54次調査で検出したＳＸ1406の東側部分のみである。

ＳＸ1406　黄色粘土層直下から発見された。方位を若干東に振って、細い自然木を置きその東側に木皮ないし草葉状の植物を敷きつめ、この間に細枝を縫うように配していた。第54次調査の結果と照合すると、両側部分の自然木は西に振り、東側部分は東へ若干振っていることから北側が広く、南側は狭くなる。南端を欠失しているが残存部南北長約4.9m、北端部の東西幅約6.85mの「コ」字状を呈するものとなる。湿地帯の上に直接配されていることから湿気抜きとも考えられるが、規則正しく配され、また南側部分になんら造作が認められないことから、別の性格を有したものかも知れない。

このＳＸ1406の下層に炭層と腐植土層があり、この両層から鞴の羽口、坩堝等工房関係の遺物と共に、漆が付着した木製の篦および漆容器に使用された平瓶、壺、甕、大鉢等がまとまって多数発見された。

第Ⅱ期

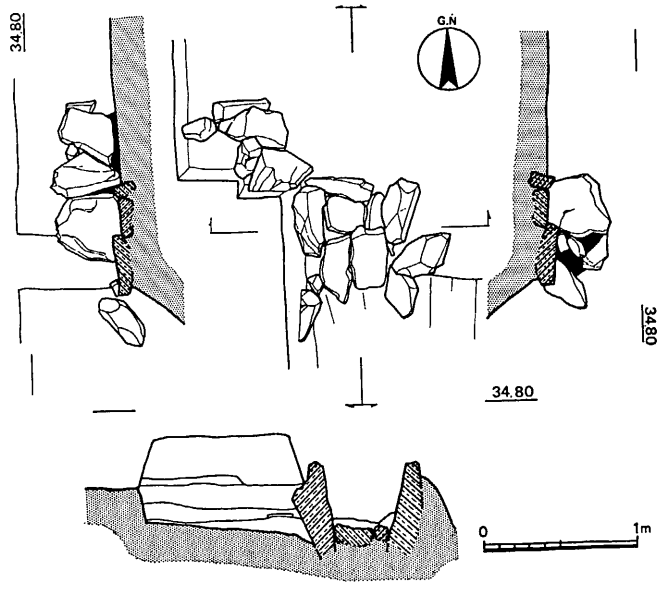
この期の主たる遺構は礎石建物1棟、築地2条、土壙1、溝1である。

建物

ＳＢ1500　発掘区北半中央部附近で検出した3間×5間の総柱礎石建物で、柱間は7尺等間を測る。遺存状態が非常に悪くわずかに礎石掘り方と根石の一部を残すのみである。建物西南隅の礎石は南側の穴に落とし込められていた。この礎石には柱座の造出しはなかった。

築地

ＳＡ1400　第54次調査区東端まで延びていた築地は、本次調査ではその基壇の痕跡を全く残さず、かろうじて東部域西端で築地に伴うと考えられる石組暗渠ＳＸ1515を検出したにとどまった。ＳＸ1515は流れにより南側を欠失し、わずかに北端部を残すだけである。花崗岩で構築し、内法約40cmを測る。北端部西側には不規則ではあるが、自然石を横に並べていることから、この部分が取水口付近であることが判る。



第4図　ＳＸ1515実測図

ＳＡ1410　発掘区の東部域南端部がもっとも残存状態が良好で階段と共に検出したが、中央部では基壇下部がわずかに残るのみであり、西部域では流れによって完全に破壊されその痕跡すら残っていなかった。基壇版築は灰色砂層（堆積層）の上に粘土層を主体としながら間に砂質土を入れて突き固めていた。また基壇上に暗紫色粘土のブロックの入った粘土層が東西一直線に走っているのを検出したので、基壇の一部を切断したところ深さ約10cmの掘り込み層であることが判明した。このラインが東西方向に一直線に延びることから築地本体の北側ラインである可能性が生じて来た。このことは第65－1次調査で検出した築地本体とその方向がみごとに一致する結果となった。

階段ＳＸ1520は崩壊が著しく一段目を残すだけであった。またこの石組みの階段は、瓦片を多く含んでいたことから当初のものではなく、階段東側の乱石積の基壇化粧と共に後に設置されたものと判明した。

土壙

ＳＫ1510　発掘区中央部域西側から東部域にかけて浅く掘り込まれ、多量の瓦を含んだ不定形な土壙である。掘り込みはＳＸ1515の北端近くまでおよび、またＳＡ1400の基壇位置に一部かかることから、ＳＡ1400廃絶後まもなく瓦を整理するためにつくられたものと推察される。また東側はＳＤ1506によって切られている。

溝

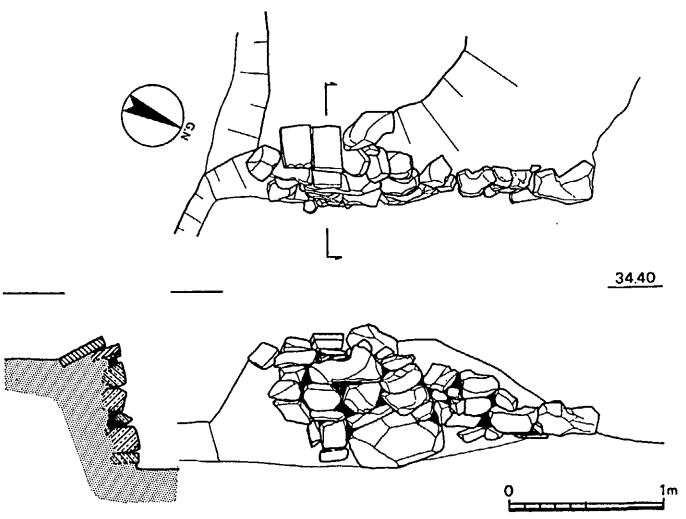
ＳＤ1505　幅約70cm、深さ約30cmを測り、東から西へ流れる溝で、長さ約28mにわたって検出した。東端部はＳＫ1510と重複するが、その新旧については明らかにしえなかった。

第Ⅲ期

洪水跡と考えられる大きな流れにより、調査地域南半部を破壊した時期であるため、ダム状遺構ＳＸ1501の外は砂礫の堆積層と自然流路のみである。

溝

ＳＤ1506　発掘区東北部から東に流れＳＫ1510を切り、ＳＸ1515の東側で南へ抜ける。出土した土器は11世紀前後のものであり、溝の堆積は砂であることまた溝の方向等から最初の洪水の際の溝と考えられる。



第5図　ＳＸ1501実測図

ＳＤ1507・1508・1513　灰色砂質土を切って東から西へ蛇行しながら流れる自然の流路である。ＳＤ1507はＳＸ1501が障害物となり、流れを若干変えている。全てこの期の最後に流れる溝である。

ダム状遺構

ＳＸ1501　高さ約0.9m、幅約2.3mを測る。一部塼を使用しているが、大部分は花崗岩の自然石を使用し流れの方向に対して略直交するように築かれている。北側部分は流れによって崩壊しているが、南側部分は残存状態が良好である。遺構は灰色砂質土層Ⅱの下層から背後の砂質土にもたせかけるようにしている。このことから、破壊を伴う大きな流れがあった後に、次の洪水による遺構の破壊を未然に防ぐ目的のために造られたダム的な性格を有した遺構と考えられる。

出土遺物

出土した遺物は土器、瓦、輸入陶磁器、木製品および鉄滓、銅滓、鞴の羽口、坩堝等である。これ等の中で少数であるがまとまって出土したのは、ＳＫ1510および整地層中・下からで、他の大部分は洪水によって削り取られた南半域の流路および堆積層から出土したものである。

土器

整地層中・下出土土器（第６、７図、別表１、図版19・20）

下層遺構を確認するため、発掘区西北隅部を6.50×10mの範囲で掘り下げた。褐色粘土層はＳＡ1400・ＳＢ1500のための整地層で、暗灰色粘土層はこれより新しい。下層は上から炭層、黒色粘土層、青色粘土層の層序をなす。

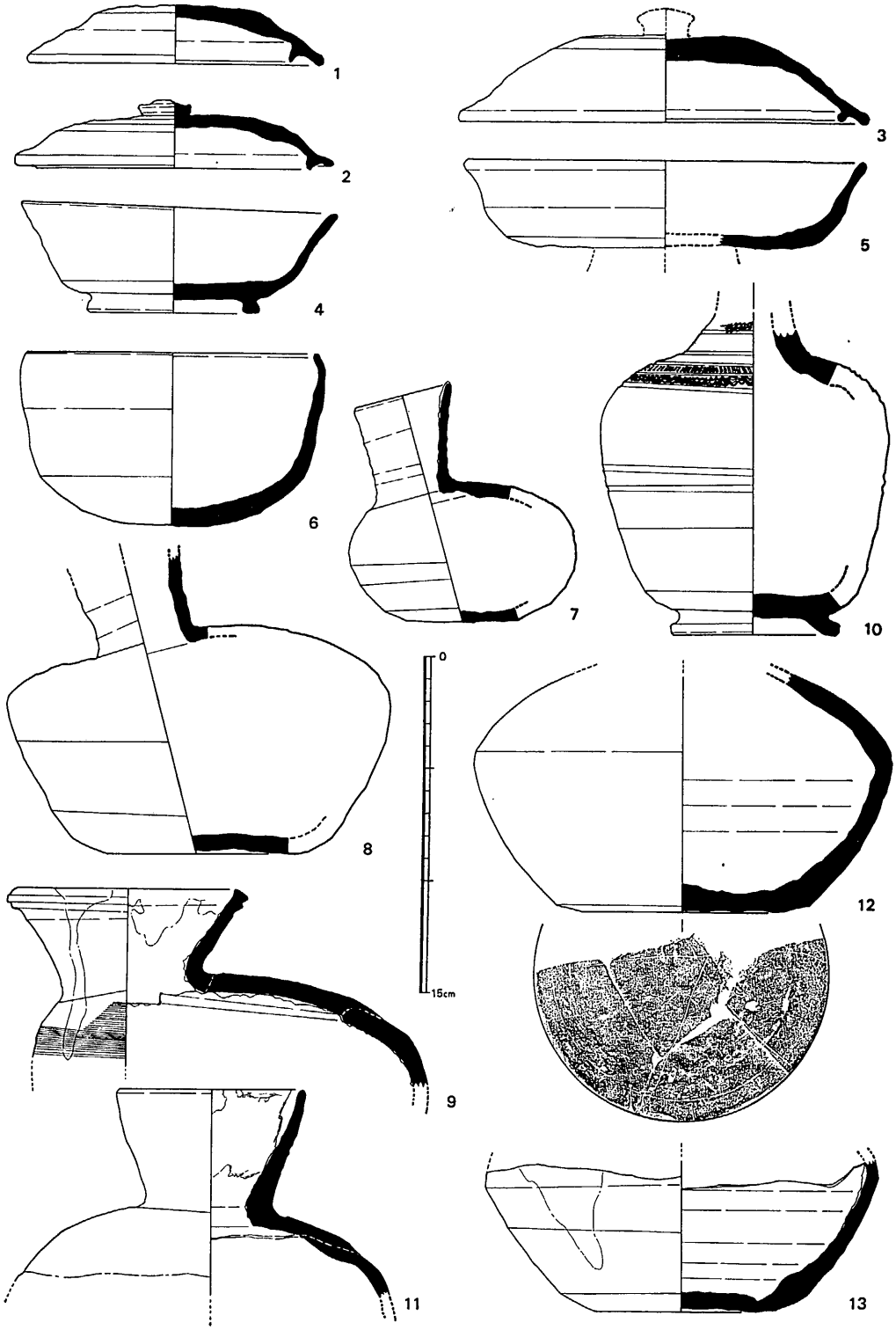
出土した土器は須恵器の杯蓋・杯・椀・皿・平瓶・壷・甕・鉢があり、土師器では杯・皿・甕がある。出土量を比較すると須恵器が圧倒的に多い。14・22は褐色粘土層、１・３・４・５・６・15・18・20は炭層、８・12は黒色粘土層、２・７・９・10・11・13・15・16・19・21・23は腐植土層、17・24は青色粘土層出土のものである。また、主に腐植土層出土の須恵器の平瓶・壷に漆の付着がみられ、これらは漆容器として使用されたことがわかる。

須恵器

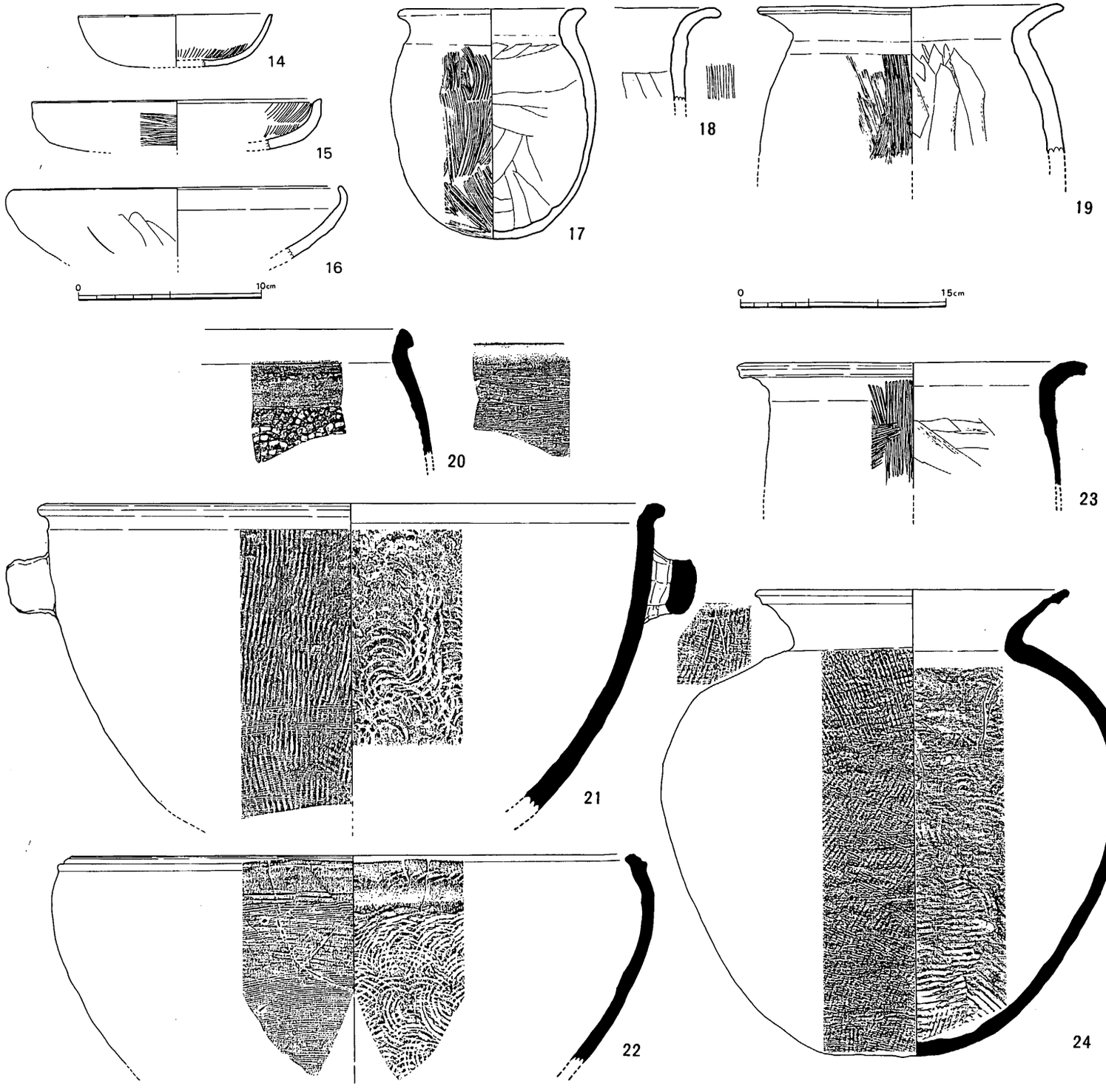
杯蓋（１～３）　いずれも返りを有するもので、１は外面に灰を被り、調整については明確でないが、天井部は一部ヘラナデの痕跡がみられる。ツマミは有しない。２は天井部をヘラケズリし、縁部は屈曲する。３は大形のもので、１と同様に体部から縁部まで直線的な形状を示す。天井部をヘラケズリし、ツマミを欠失する。

杯（４）　高台を有し、体部の下位はヘラケズリによって丸味をおび、口縁部は外反する。

高台付皿（５）　底部は回転ヘラケズリした後に底部端より内側に入った部分に高台を貼付した痕跡がみられる。ここでは脚付皿として復原した。内面に煤の付着がみられる。



第6図　整地層中・下出土土器実測図(1)



第７図　整地層中・下出土土器実測図（２）

椀（6）　底部は回転ヘラケズリによって丸味をおび、その為体部との境は明瞭でない。体部は直線的であるが、口縁上部は内彎する。内底はナデ調整する。

平瓶（7～9）　7は小形のもので、完形である。底部から体部中位までヘラケズリし、底部は平らにする。内面は口縁端部に至るまで全面に漆が付着している。8は口縁上部を欠失している。底部から体部中位までヘラケズリしている。9は口縁部が大きく開き、口縁部と体部との接続は三段階の接続方法によるものである。

壷（10～13）　10は体部下半を回転ヘラケズリし、体部中位には2条の沈線をめぐらしている。また体部上位と口縁部下位にも沈線をめぐらし、その間に櫛目を施している。11～13は同形状の壷片である。11は口縁部と体部の一部が知れるもので、口縁部と体部の接合方法は三段構成である。12・13は口縁部を欠失しているが、体部下半および底部はヘラケズリし、12は体部中位に最大径を有している。底部にヘラ記号を有する。12・13にはいずれも漆の付着がみられる。

鉢（20～22）　20は少片のため全形を知り得ないが、内面は格子の叩き目があり、外面は刷毛目調整している。21は復原口径45.2cmで、内面には円弧状の叩き目があり、外面は縦方向に平行の叩き目がある。体部下半は叩きの後刷毛目調整し、体部の上位には取手を貼付する。内面に漆が付着している。22は復原口径40.6cmのものである。底部は欠失しているため形状は不明であるが、口縁部は内彎し、平坦にしたその端部は内傾する。内面には口縁端部近くまで円弧状の叩き目があり、外面には横方向の平行の叩きの後、横方向に刷毛目調整を施している。

甕（23・24）　23は土師器の器形および手法による甕である。体部下位で若干ふくらみ、丸味をもった底部になるものと考えられる。口縁部は「く」字状に外反させ、端部には強いヨコナデで凹線をめぐらしている。体部の内面は斜め上方に粘土をケズリ取っており、外面は口縁部近くまで刷毛目調整している。口縁部はヨコナデ後、一部刷毛目調整している。胎土には砂粒の混入が目立ち、器面は荒れている。24は完形のもので、口径22.8cm、器高34cmのものである。「く」の字状に外反させた口縁部は端部を肥厚させる。口縁部はヨコナデで体部内面の下位は平行の叩き目、中位と上位は円弧状の叩き目がみられる。外面には格子の叩き目があるが、内面の叩きの位置と同位置で叩きの方向が変わる。一部刷毛目調整し、体部上端部にはヘラ記号がある。

土師器

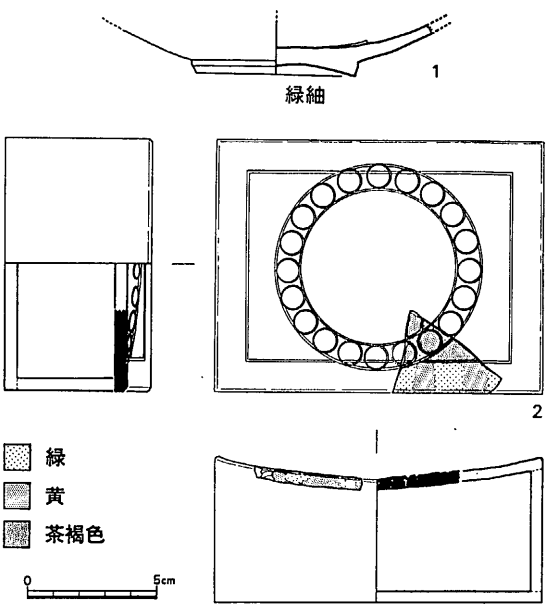
土師器の出土量は須恵器に比べると量的にはきわめて少ない。杯・皿・甕が出土しているが、17を除けばいずれも小片である。また暗文を有するものが3点ある。

杯（14）　小片であるため形状は不明であるが、底部と体部には明瞭な稜がなく丸味をもっている。内面はヨコナデ後、底部には放射状の暗文を施す。薄手のきわめて精良なものである。

皿（15）　口縁端部が内傾し、面をなす。内面には二段の暗文がみられ、外面にはヘラミガキを施している。精良なものである。

鉢（16）　丸味をもった底部で、口縁部を内彎させる。内面、および口縁部はヨコナデで底部は不定方向のケズリを行っている。

甕（17～19）　17は小形のもので完形である。口径13.4cm、器高17.0cm、体部最大径14.5cmを測る。体部中位よりやや上に最大径を有する。やや長めの体部で、底部を丸くしている。内面は粗いヘラケズリ、外面は底部を横方向、体部を縦方向に刷毛目調整している。19は体部の下半以下を欠失している。復原口径は22.0cmのもので、内面はヘラケズリ、外面は刷毛目調整している。外面には煤の付着がみられる。



第8図　暗灰色粘土層出土陶器実測図

暗灰色粘土層出土陶器（第8図、巻首図版）

無釉陶器

椀（1）　体部上半と口縁部を欠失しているが、体部は斜め外方に大きく開いている。円盤状の高台は上げ底風にヘラ削りしている。内外面の全面にヘラミガキを施し、見込みには輪状に重ね焼きの痕跡がみられる。胎土は精製され、きわめて良質のもので、緑釉の窯で発見される釉のかからない須恵質の陶器である。

唐三彩

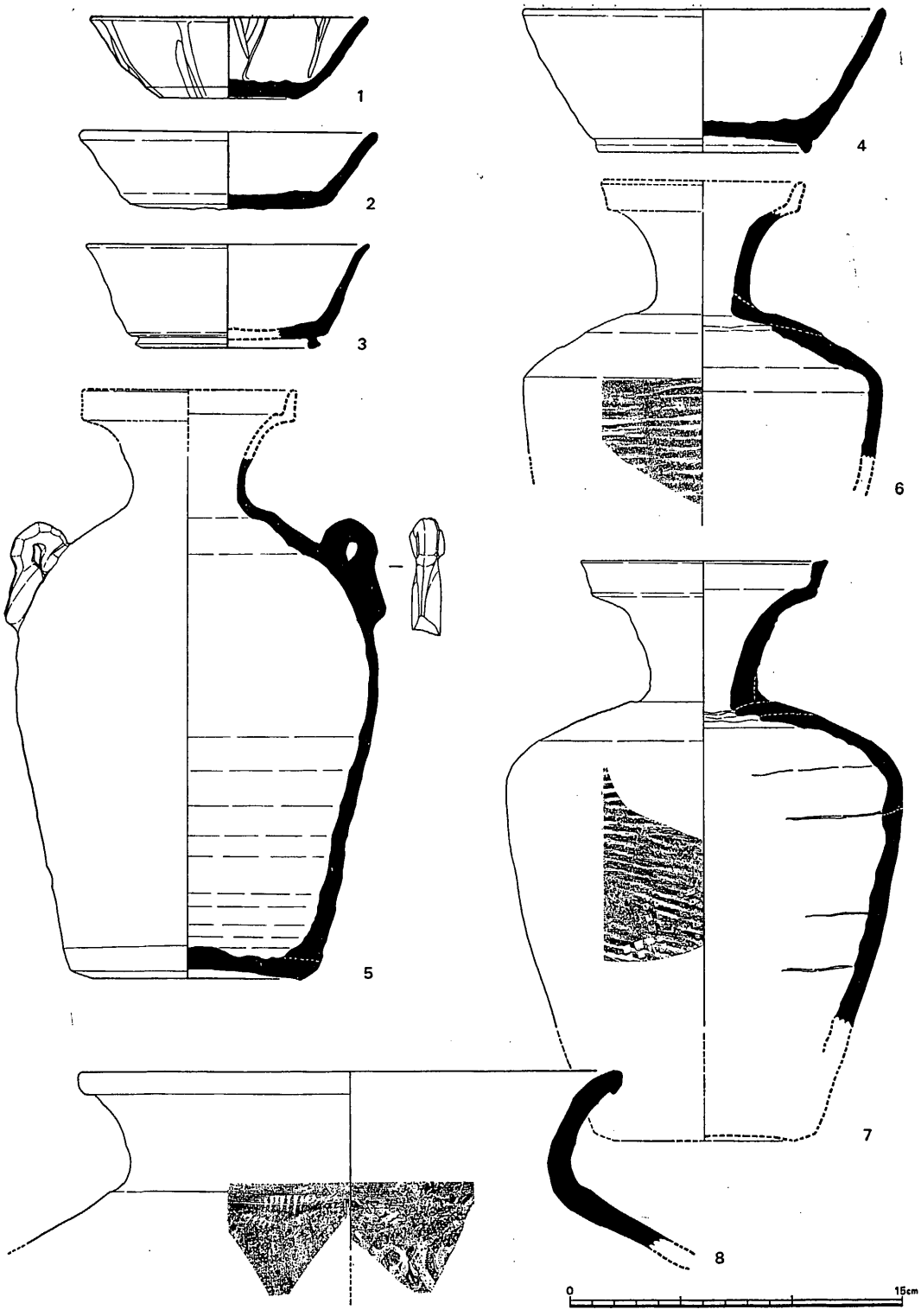
陶枕（2）　陶枕の破片で、縦3.0cm、横4.2cm、厚さ0.4cmの小片である。胎土はきわめて良質の白色の陶土を使用している。上面には連珠円文と円文の内側には唐草文の一部と思われる型捺しがみられる。緑・茶褐色・白色の釉が鮮明に残っている。ここでは円文等の径から陶枕の上面として復原した。共伴した土器は8世紀後半から9世紀前半代にかけてのもので、整地の際偶然に混入したものと思われる。円文の径を復原すると約4.8cmとなり、器壁の厚さを考慮すると、奈良県大安寺跡出土の小型のものに類する。

ＳＫ1510出土土器（第9・10図、別表1、図版21）

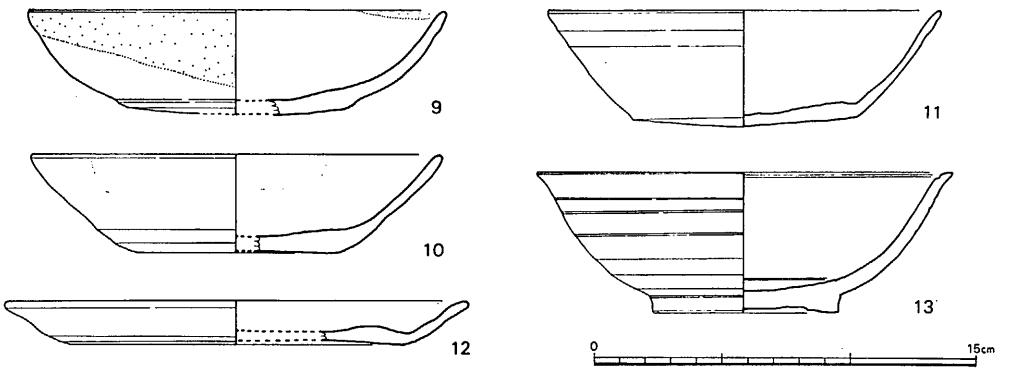
須恵器・土師器・緑釉陶器・越州窯系青磁が出土している。

須恵器

杯（1～4）　1・2は無高台のもので、体部は直線的にのびている。1は内底および体部をヨコナデし、底部および体部下位を回転ヘラケズリし、内外面に火ダスキがみられる。2は



第９図　ＳＫ1510出土土器実測図(1)



第10図　ＳＫ1510出土土器・陶器実測図(2)

体部をヨコナデし、内底をナデ調整している。3は高台を底部端からやや内側には入った位置に貼付している。4は高台を底部端に貼付する。墨が付着し、硯に転用している。

壷（6～7）　5は双耳壷である。口縁の一部を欠失するが、上部が直立するものである。体部中位から上位にかけて丸味をもち、体部中位に最大径がある。内外面ヨコナデであるが、外面体部下半は回転ヘラケズリしている。6は口縁部と体部下半を欠失する。胴部と肩部との境は明瞭である。肩部と頸部の接合は3段構成である。肩部は回転ヘラケズりし、外面体部には平行の叩き目がある。7は体部下位と底部を欠失する。口縁部は直立し端部は平坦にしている。内面はナデで外面は平行の叩き後格子の叩き目がある。3段構成である。

甕（8）　口縁部の小片で、口縁部は端部を丸く肥厚させる。内面は円孤状の叩き目があり外面は格子の叩き目がある。一部を刷毛目調整している。内面に漆が付着している。

土師器

杯（9～11）　口径15.2～16.2cm、器高3.9～4.5cmのものである。9の体部は内彎気味で丸味をもっている。全体に磨滅が著しいため明確でないが、内底はナデ、底部はヘラ切りである。外面の口縁部と体部上半は黒変している。10は器面が荒れているため調整は明瞭でないがヘラミガキを施しているようである。体部の下位は回転ヘラケズリしている。11は先の2例よりも口径が若干小さくなり、器高はやや高くなる。磨滅が著しいため大部分の調整は不明であるが外底は回転ヘラケズリを行っている。

皿（12）　器面調整しているが、大部分は器面が剝離しているため詳細は不明である。底部と体部下位は回転ヘラケズリを施している。

緑釉陶器

椀（13）　体部の下位は丸味をもち、口縁部は外反させる。内面の見込みと口縁部近くに沈線を巡らす。内外面はヨコナデであるが、外面体部下半および高台部は回転ヘラケズリである。釉の残りは余り良好でないが、全面施釉のものである。胎土は須恵質のもので、灰白色を

呈し精製されている。

ＳＤ1506出土土器（第11図、別表１）

土師器

皿ａ（７）　口径11.4cm、器高2.0cmを測る。

皿ｃ（８・９）　口径13.0・13.3cm、器高2.1・2.9cmを測る。

椀（10・11）　口径12.2・13.7cm、器高5.0・4.6cmを測る。11の体部下半には指頭圧痕が認められる。

無釉陶器

椀（12）　底部を糸切り離しした須恵質の椀である。内面はヘラミガキにより器面を滑かに仕上げている。緑釉陶器窯から出土する無釉陶器の一種であろう。

ＳＤ1507出土土器（第11図、別表１）

皿ａ（１）　口径10.4cm、器高1.4cmを測る。

ＳＤ1508出土土器（第11図、別表１、図版22）

土師器

皿ａ（２～４）　口径9.1～10.3cm、器高1.3～1.7cmを測る。

皿ｃ（５）　口径12.8cm、器高2.8cmを測り、細くて高い高台を有している。

椀（６）　丸い体部と若干外反する口縁部を特徴とする椀で、口径14.1cm、器高5.3cmを測る。

炭層Ⅰ出土土器（第11図、別表１、図版22）

土師器

皿ａ（13～15）　口径10.4～10.9cm、器高1.8～2.0cmを測る。

杯（16・17）　口径12.4・12.9cm、器高3.5・3.8cmを測る。

椀（18）　口径14.8cm、器高5.6cmを測る。体部中位で屈曲する。

輸入陶磁器

白磁椀が１点出土した。

椀（19）　いわゆる青白磁と呼ばれているもので青白色の釉が高台部を除いて全面に施釉されている。胎土は白色を呈し、高台部より内側に円形の焼台跡が残っている。景徳鎮窯系のものであろう。

炭層Ⅱ出土土器（第11図別表１、図版22）

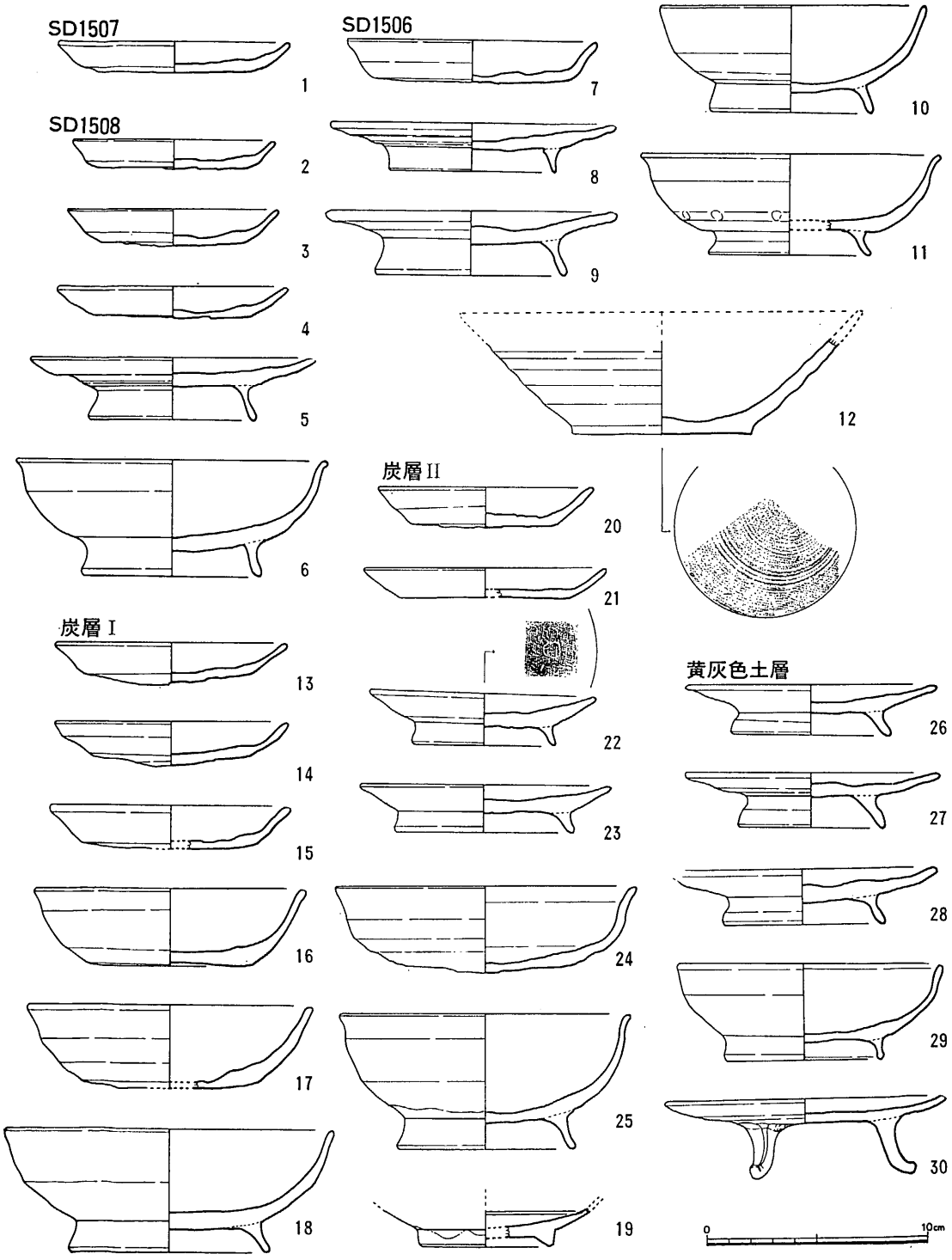
土師器

皿ａ（20・21）　口径9.8・11.0cm、器高1.9・1.4cmを測る。

皿ｃ（22・23）　口径10.3・11.4cm、器高2.3・2.2cmを測る。22の内面にはヘラ文様が刻まれている。

椀（24・25）　無高台、有高台のものが出土している。24は口径に対して器高が低く、丸底の杯に近似した器形をなしている。

黄灰色土層出土土器（第11図、別表１、図版22）



第11図　ＳＤ1506・1507・1508、炭層Ⅰ・Ⅱ、黄灰色土層出土土器・陶磁器実測図

皿ｃ（26～28）　口径11.4～12.0cm、器高2.4～2.5cmを測る。

椀（29）　口径12.1cm、器高5.3cmを測る小形の椀である。

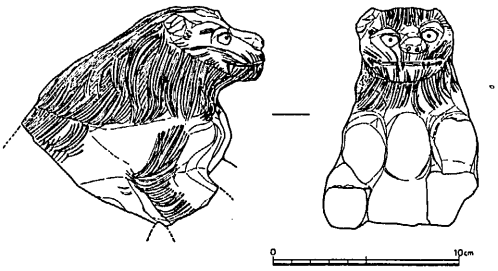
脚付皿（30）　1脚しか残っていないが、残存部から3脚になるものと考えられる。面取り成形された脚は下部で外反する特徴を有している。

墨書土器と硯（第12図、図版23）

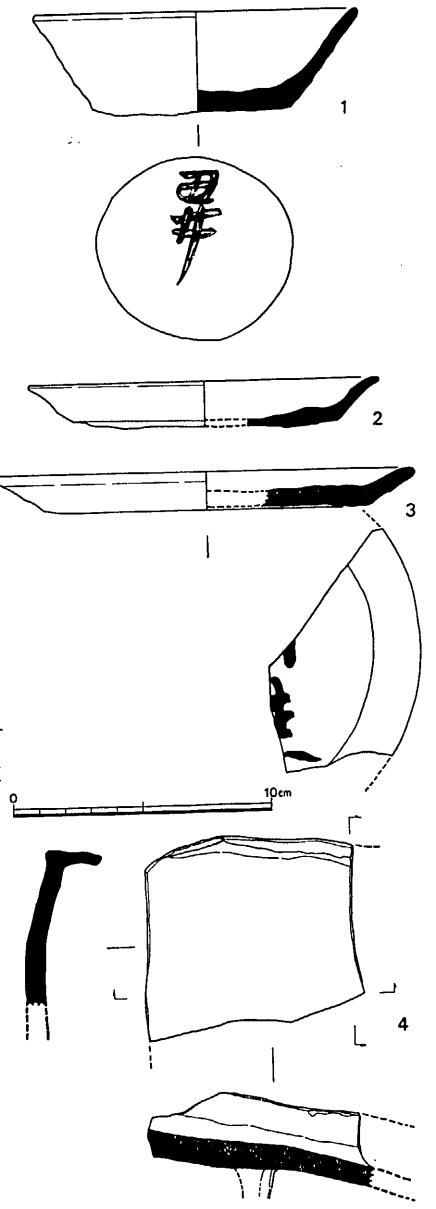
墨書土器（1～3）　墨書土器は瓦溜ＳＫ1510・炭層Ⅰ・暗灰色粘土層から出土している。1はＳＫ1510出土の須恵器の杯で、体部と口縁部の一部を欠する。墨書は外底のほぼ中央部にあり、鮮明さを欠いている。「田井」と読めるが意味不詳である。口径12.6cm、器高4.0cmのものである。2は暗灰色粘土層出土の須恵器の皿である。底部は三分の一残存し、墨書は外底部にあるが、不鮮明で判読できない。習書らしく字の重なりがみられる。復原口径13.8cm、器高1.8cm。この層からは他に須恵器の底部に墨痕のあるものが1点ある。3はＳＫ1510出土の須恵器の皿である。墨書は外底にあり、比較的鮮明であるが、割れのため判読できない。復原口径16.2cm、器高1.5cm。これら4点の他に炭層Ⅰから出土した土師器の底部片に「松品」と判読できるものと他に意味不明のものが1点ある。

硯（4）　須恵器の風字硯で、灰色土から出土した。全体に雑な作りで、指およびヘラナデされている。脚は一部が残存しナデて稜をつけている。縁部は1.5cmの高さに折り曲げただけのものである。

動物形須恵製品（第13図、図版22）

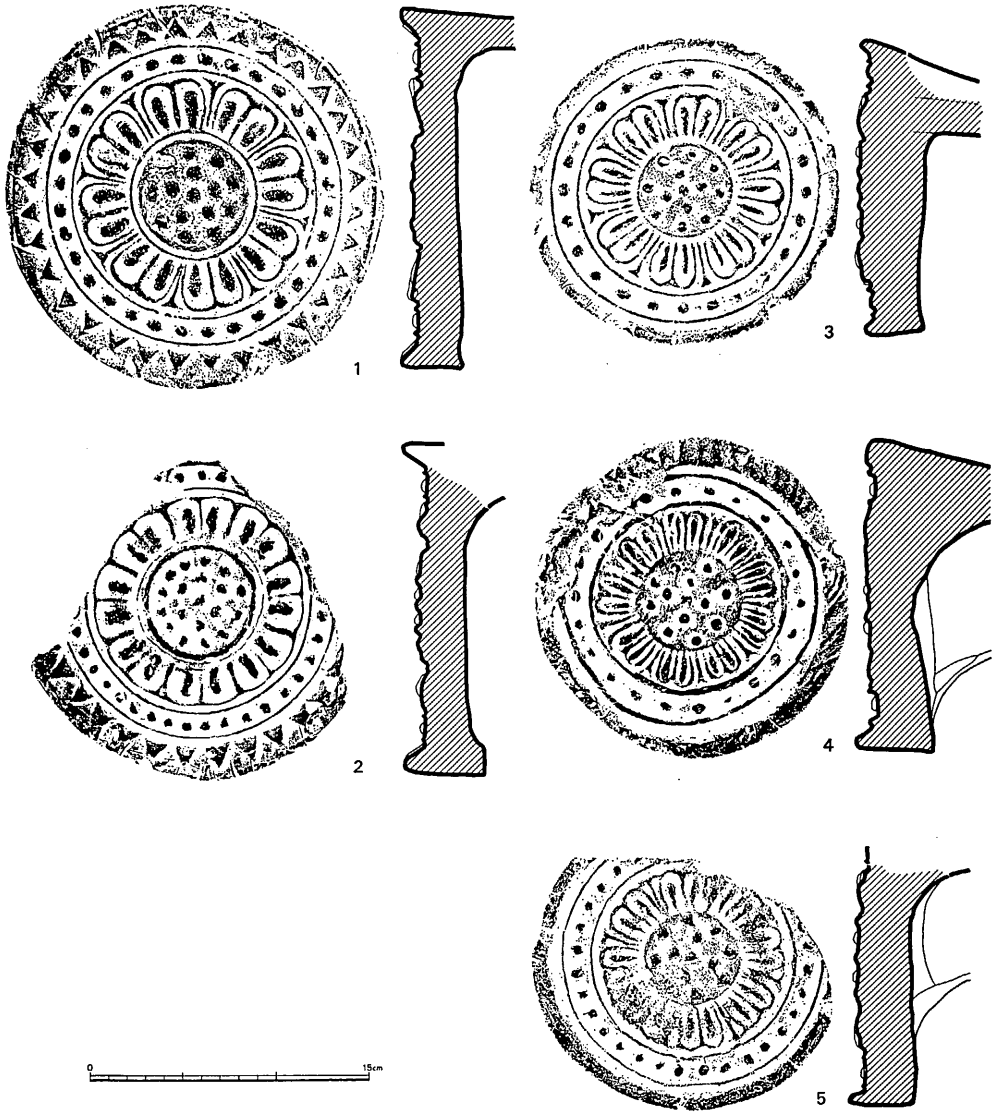


第13図　黄灰色砂層出土動物形須恵製品実測図



第12図　墨書土器、硯実測図

体部の下半と脚部および耳を欠失するが、胎土は砂粒を含んだ粗い須恵質のものである。全体はナデおよびケズリによって成形ないし調整している。目・鼻・口および牙はヘラで切り込みを入れる。真一文字に結んだ口からは鋭い牙をむいている。口の周囲、頭、首、背、足の部分には体毛が櫛状のもので表現されており、とくに鬣（たてがみ）は厚く盛り上がっている。胸部と脚部は筋肉が隆起し、その表現には力強さが感じられる。体毛の毛並、筋肉などの繊細なタッチは



第14図　第60次調査出土軒丸瓦実測図・拓影

いかにも写実的である。蜑（たてがみ）の盛り上がりなどの風貌からすると獅子に似た獣のようである。年代としては明確でないが、出土した層位は黄灰色砂層であり、それから出土した土器は古墳時代～平安時代のものを含む。

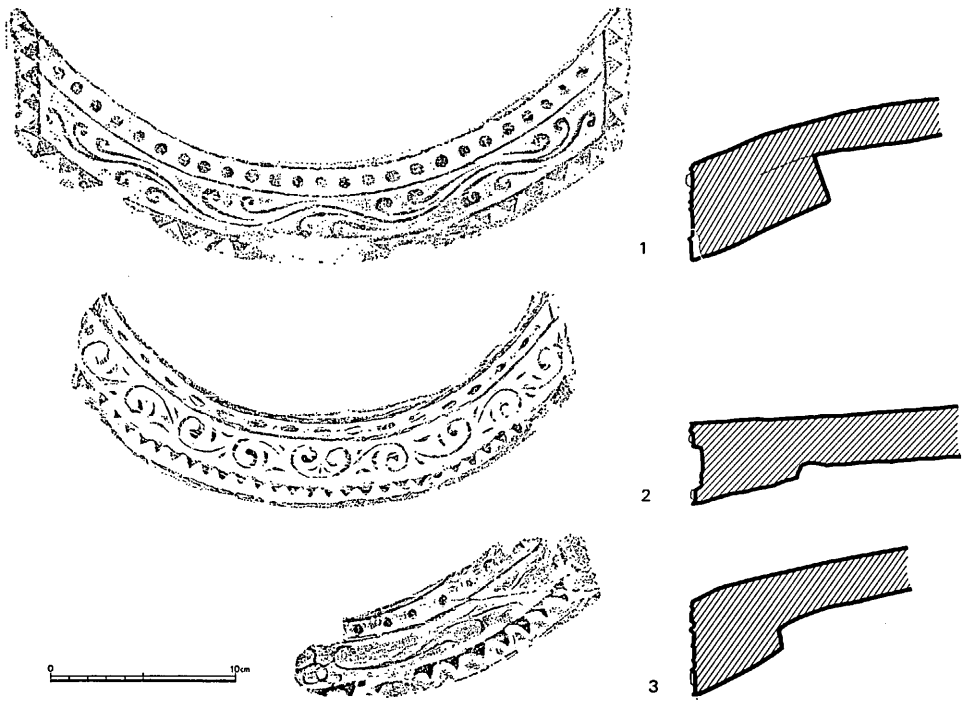
瓦類

第60次調査地は、すでに述べたごとく平安時代頃の大洪水と考えられる流れによって遺構がかなり破壊されており、したがって出土瓦類についても、きわだった特徴は認められない。

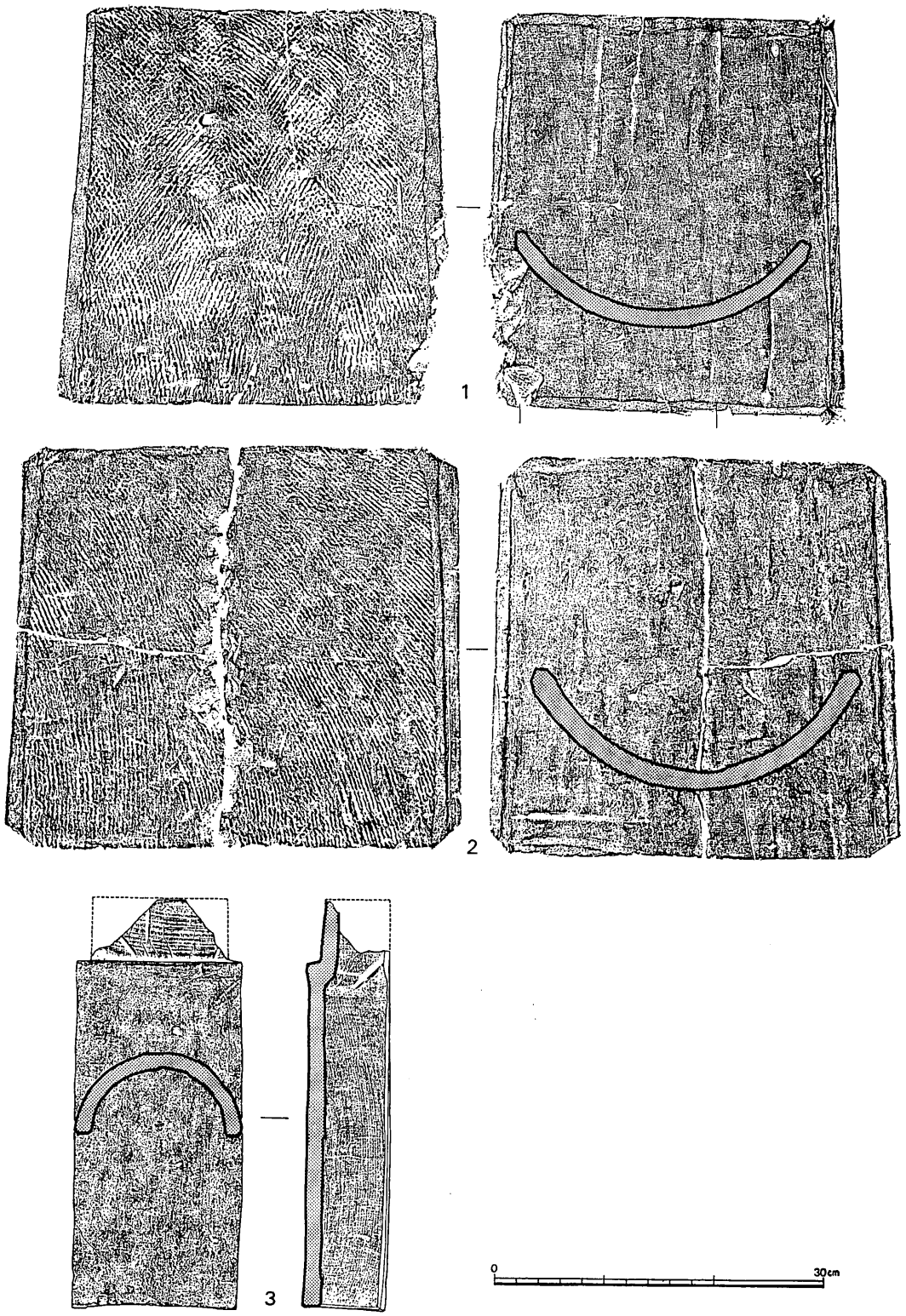
今回の調査で出土した瓦類は軒丸瓦、軒平瓦のほか多量の丸・平瓦である。これらは平安時代後半の大きな流れによって堆積した灰色砂質土層、灰色砂質土Ⅱ層、黄灰色土層などから主に出土した。

軒丸瓦（第14図、別表２、図版24・25）

出土点数194点で、20型式24種類に分類できる。その内訳については別表２に示したとおりである。このうち第14図に示したものが量的に多い。１、２は老司式で、１は中房の蓮子が１＋５＋９で老司Ⅱ式とよばれているものである。２は蓮子数が多くなるとともに弁が、かなり変化しており、子葉の盛上りが大きい。瓦当裏面の下半部は、周縁に沿って一段高くなるもの



第15図　第60次調査出土軒平瓦実測図・拓影



第16図　第60次調査出土丸・平瓦実測図・拓影

がある。3、4、5は鴻臚館式で、3が祖型になるものである。4は弁がやや平坦になるとともに割付けが粗雑になる。5は3と比較してほとんど変化はないが、外区内縁の珠文数が33個で9個多くなっている。

軒平瓦（第15図、別表3、図版24）

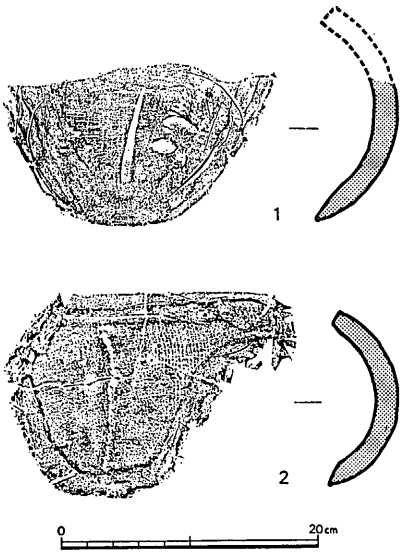
出土点数186点で21型式22種類に分類できる。内訳は別表3に示した。このうち第15図に示したものが出土量が多く全体の63%を占めている。1は老司Ⅱ式で軒丸瓦の第14図－1とセットになる。2は鴻臚館式で軒丸瓦の第14図－3とセットになる。3は交差する曲線文を中心飾とし、その左右に唐草文を配した均正唐草文で、蔓草の巻きがほとんどなく、細い線で表現されている。下外区の鋸歯文が凸鋸歯文になるものと匙面をなすものとがある。顎は段顎で、顎面はヘラケズリによって調整したものと、縄目の叩き痕を残すものとがある。類例は北九州市八幡区所在の北浦廃寺および遠賀郡芦屋町所在の浜口廃寺にある。

丸・平瓦（第16図、図版26）

丸瓦は玉縁を有するもので、円筒形のものを2分割している。粘土紐巻上げによるもので、作りはきわめて丁寧である。凸面は縄目叩きを横方向のナデによって丁寧にすり消し、玉縁部はヘラ状工具によって横方向に調整している。凹面は布目のままである。両側縁は、分割截面および破面をヘラケズリによって完全に調整している。胎土は比較的砂粒が多く、焼成は堅緻である。

平瓦は桶巻作りによるもので、粘土紐巻上げによる可能性が強いが、ほとんど痕跡を残していないため断言はできない。凸面は、縄目叩き痕のままで、1のように襷掛けに叩くものと円弧をえがくものとがある。凹面は布目を部分的にすり消して調整している。狭端部および広端部の凹面は面取りを行っている。また四隅は、わずかではあるが切り落している。

分割角度は、1は約118°で3分割である。2は約140°で、かなり中途半端な数字になる。もし仮りに、これを3分割とすると三枚のうち一枚は、分割角度が他の半分強の80°となり、平瓦を半截したものより、やや幅が広くなる程度で、平瓦としての形態はとり得ない。したがってこれを熨斗瓦として使用したことも考えられるが現在の段階では、資料も乏しく、また積極的な根拠もない。ここでは熨斗瓦の可能性のあることを指摘するにとどめておきたい。



第17図　第60次調査出土面戸瓦実測図・拓影

道具瓦（第17図、図版43）

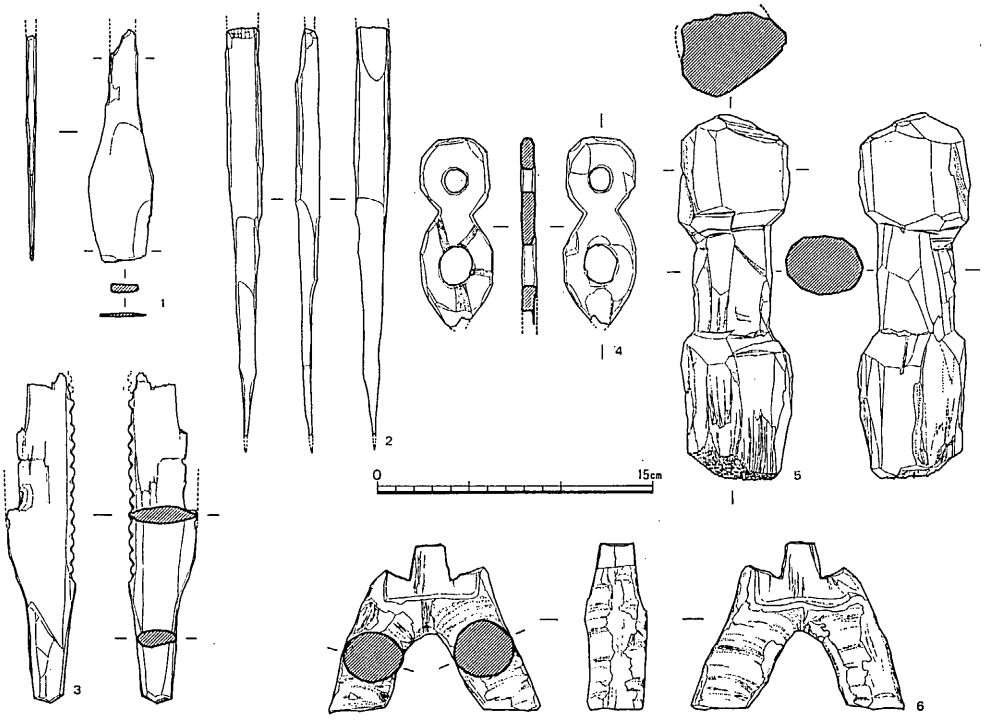
道具瓦には、面戸瓦13点、鬼瓦６点がある。面戸瓦は、いずれも丸瓦製作後、生乾きの段階で面戸瓦にしたもので、いわゆる蟹面戸である。凸面の縄目叩きは、丁寧にすり消し、凹面縁部は、すべてヘラケズリによって面取りしている。

鬼瓦は鬼面鬼瓦で２種類ある。鬼面の表現は、ほとんど変化ないが、周縁の珠文帯が異りな、珠文が小さく密に配するもの（ａ）と、大きな珠文をやや間隔をおいて配するもの（ｂ）とがある。ａは全長約42cm、下底部幅32cmで、下底部には半円形の刳り込みがあり、上端部には鳥衾取付けの刳り込みがある。また層間には釘穴があけられている。ｂは大きく欠失しているが、これまでに出土したものから復元するとａよりも、やや小形である。形状は、まったく同一である。いずれも表面が黒灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

木製品（第18・19図、図版27）

篦（１）　柄の一部を欠失している。柄先は平面的には匙状を呈するが、両面は先端に向って平坦に削り、端部は薄くなる。柄部は平らたく、側面を面取りしている。現存長は12.6cmである。

槌の子（５）　両端に球状のものを作り出している。削られた面には粗く、打ち削られた痕跡がみられ、全面は鑿のようなもので成形されたようである。端部の一部は腐植しているが、

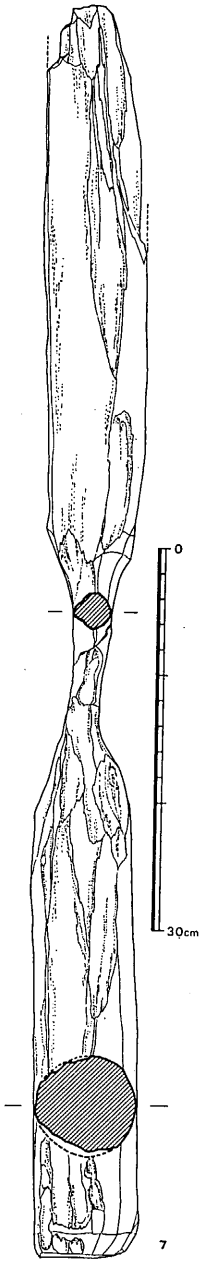


第18図　腐植土層出土木製品実測図

ほぼ完形に近いもので、現存長20cm、球形部分は径10cm、中央の細くなった部分の断面は楕円形になり、最大径4cmである。

杵（7）　立て杵である。全体に腐植が著しく握りと撞部に一部製作痕をとどめる。撞部の端部は平坦で、刃物で縦方向に面取りしている。先端部は柾目となっている。撞部は丸く削り、径は8cm前後のものである。握り中央部から折り返えすと、全長100cmのものになる。現存長98.5cmである。握り部分の径については不明。

不明木製品（2～4・6）　2は削り掛け状の木製品であるが、用途については不明である。上部は欠失しているが、下部は削って先端を尖がらしている。3は片側面に鋸歯状の切り込みを入れたものである。上部は欠失するが、下部は細く面取りし、柄部を作っている。鋸歯状の切り込み部分は両面を面取りする形で薄く刃状にしている。現存長13.0cm、最大幅3.6cmである。4は両端に二つの穴を穿ち、眼鏡状の形態を呈する。長さ10.5cm、最大幅3.9cm、厚さ0.8cmのものである。一方の穴には紐をかけた痕跡がみられる。6は琴柱形を呈するもので、二又になった桜の自然木の枝をそのまま利用している。上部は両面を削り、また両側面から切り込みを入れ差し込み状にしている。二又になった部分は加工しておらず樹皮がそのまま残っている。径はほぼ同じで3.3cm、高さ9cmを測る。



第19図　腐植土層出土杵実測図

小　結

調査の結果、第54次調査で検出した築地2条と下層の性格不明遺構1を再確認したほかに、礎石建物1棟を新たに検出した。築地2条のうちＳＡ1400は後の削平により、またＳＡ1410はさらに東へ延び、遂に隅を検出することはできなかった。前述したようにこの地区の遺構は大きく3期に分かれる。

第Ⅰ期は、この地域が湿地帯であった時期で、ＳＸ1406を検出したに留った。その時期はＳＸ1406下層の炭層および腐植土層出土の土器および第65－2次調査検出のＳＸ1556出土の土器から考えると7世紀後半から8世紀初頭頃までと推知された。

第Ⅱ期は調査区南端が破壊されるまでの時期で、これはＳＡ1400廃絶以前・以後によって1・2小期に分けられ、主たる遺構として第Ⅱ－1期はＳＡ1400・1410、第Ⅱ－2期はＳＡ1410・ＳＢ1500がある。

第Ⅲ期の初期を示す遺構は最初の洪水の際の溝ＳＤ1506であり、その時期は11世紀前後と考えられる。この洪水に関連してＳＸ1501がつくられた他は顕著な遺構は存在しなかった。この期の終焉はＳＤ1507・1508・1513出土の遺物から11世紀末から12世紀初頃と考えられる。

3．第63次調査

公民館の一部建替えに伴い、事前の発掘調査を実施した。対象地域は学校院地区の北東隅部に位置し、また南接した地域を昭和49年度に第36次調査として発掘調査を実施し、掘立柱建物や井戸等を検出していたことから、学校院関係の遺構の有無を目的とした。地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字学業772—3番地である。

3×11mの東西トレンチを設定して、昭和54年4月16日から調査を開始し、同年4月24日終了した。

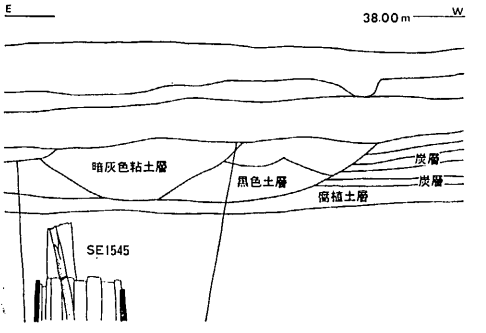
検出遺構

対象地が四王寺山系から延びる支脈に挟まれた谷尻に位置しているため、中世に氾濫原となり古代に属する遺構はかつて存したとしても流失し、確認しようがなかった。

検出した主要な遺構は鎌倉・室町時代に属する井戸、土壙、溝等である。

土層の関係

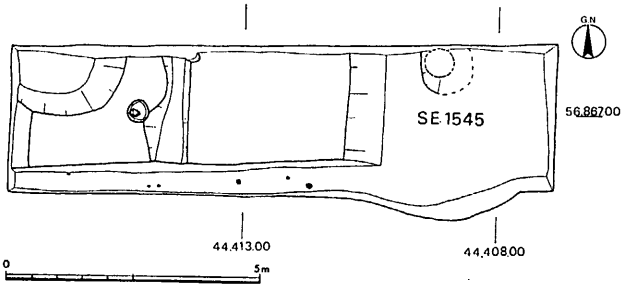
現地表から下約30cmは公民館建設時の盛土で、その下に旧表土が残されていた。この旧表土から約30cm掘り下げると中世の遺構面があらわれ、この面は西から東へ傾斜していた。この遺構面は調査最下層である腐植土層の上に約50cm版築状に整地されてつくられていた。また、調査区東側では、この版築状整地層を切って黒色粘土層や暗灰色粘土層が形成されていた。検出したSE1545は黒色粘土層・暗灰色粘土層を切り込んで構築されていた。



第20図　第63次調査土層模式図

井戸

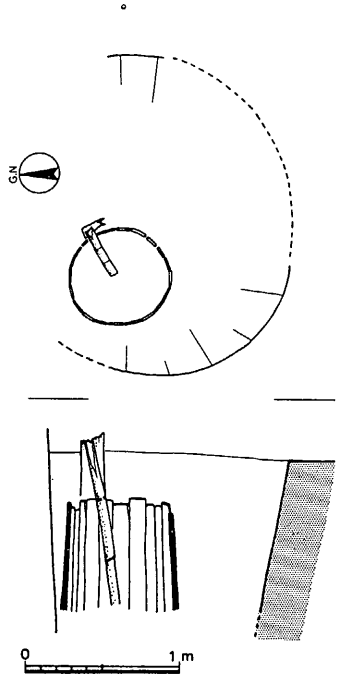
SE1545　内法径62cmを測る桶様の井戸である。廃絶時に竹を入れ祭りを行っている。大宰府史跡第45次調査検出の2例についで、3例目の検出例である。地盤が軟弱であったため土砂崩壊の危険があり、井戸上部を調査したのみで完掘しなかった。



第21図　第63次調査遺構配置図

出土遺物

本次調査で出土した遺物は、



第22図　ＳＥ1545実測図

土師器、緑釉陶器、陶器、輸入陶磁器および瓦類である。

ＳＥ1545出土土器（第23図、別表１）

完掘しなかったため、出土した遺物は全て上層出土のもので、また、出土数は少い。出土した土器は全て糸切り離しである。

土師器

皿ａ（１・２）　口径8.3・8.2cm、器高1.0・1.3cmである。

皿ｃ（３）　口径9.6cm、器高2.1cmを測る。この種高台付皿としては高くしっかりした高台を有している。

杯ａ（４・５）口径11.7・13.4cm、器高2 0・3.2cmを測る。４は内面に炭化物の付着が認められる。

腐植土層出土土器（第23図、別表１、図版28）

土師器

皿ａ（６・７）　口径8.4・9.0cm、器高1.3・1.4cmを測る。

杯ａ（８～10）　口径12.9～13.9cm、器高2.3～2.6cmを測る。10は灯火器に使用されたと考えられ、内底部に油、口縁部に油煙の付着が認められる。体部側面には「男□□」三文字が墨書され、外底部には男子の坐像が描かれている。しかし、体部側面の文字も底部の坐像も、反対方向から文字様の墨書によって一部が消され、墨書文字はわずかに一字判読できるだけであり、また坐像も器肉をとおしてしみ出した油と共にその観察を困難にしている。

炭層出土土器（第23図、別表１）

炭化物と共に発見された土器群で、層位は腐植土層の上位に位置する。

土師器

皿ａ（11～16）　口径8.6～9.0cm、器高0.9～1.3cmを測る。

杯ａ（17～25）　口径12.5～14.2cm、器高2.2～3.3cmを測る。24は口縁部周辺に油煙が付着していることから灯火器に用いられたものと考えられる。

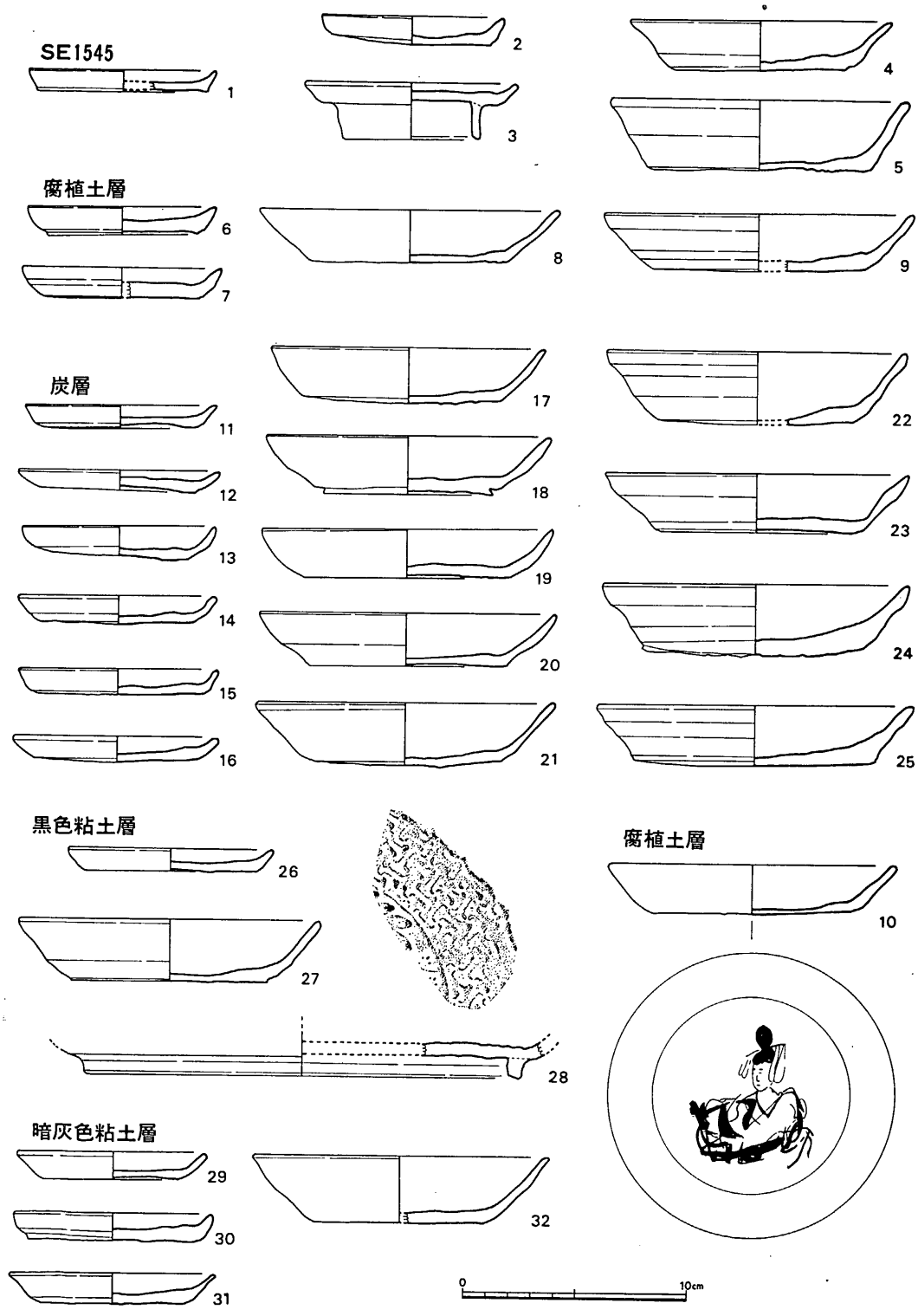
黒色粘土層出土土器（第23図、別表１）

土師器

皿ａ（26）　口径9.2cm、器高1.0cmを測る。

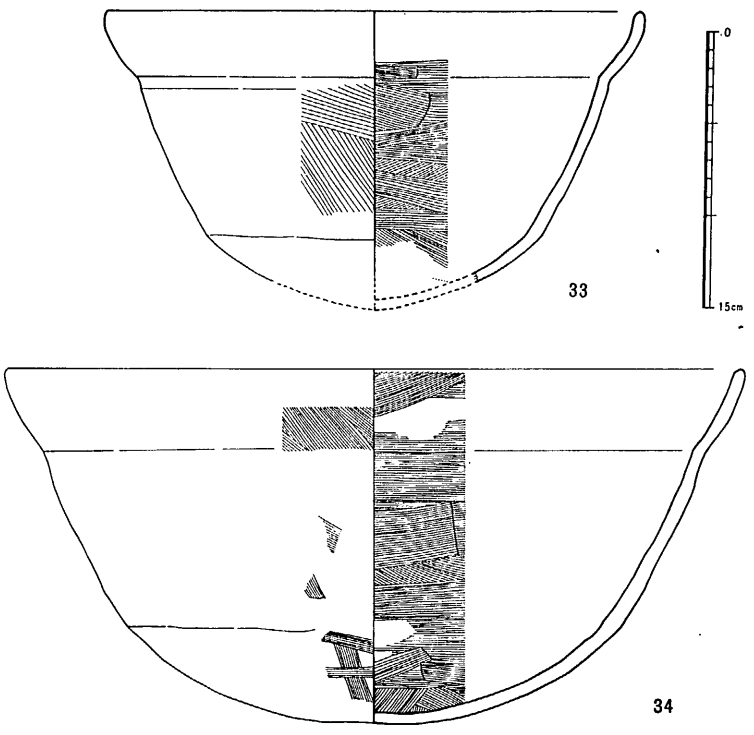
杯ａ（27）　口径13.4cm、器高2.8cmを測る。

緑釉陶器



第23図　ＳＥ1545、腐植土層、炭層、黒色粘土層、暗灰色粘土層出土土器・陶器実測図

盤（28）　小片であるが、復原すると高台径19.7cmになる。残存部内面は銀色の光沢を放つ釉が施釉され、その釉下は内区外区に別れた文様が型捺されている。内区は花文、外区は幾何文様である。外底部は丁寧な回転ヘラ削りが施されている。精緻なつくりの緑釉陶器である。



第24図　暗灰色粘土層出土土器実測図

暗灰色粘土層出土土器（第23・24図、別表1）

土師器

皿a（29～31）　口径8.5～9.2cm、器高1.2～1.4cmを測る。

杯a（32）　口径13.2cm、器高3.0cmを測る。

土鍋（33・34）大小2種類が出土した。両者とも口縁部は若干内彎し、体部下位に屈曲部を有するが33の方が明瞭である。外面には煤が濃密に付着し、また体部下半は二次的火熱により器面剝離が著るしい。

小　結

主たる目的とした学校院関係の遺構は存しなかった。また、対象面積が狭かったため主たる遺構は井戸1基発見しただけである。しかし出土した土器の中で、墨書坐像を検出したことは往時の服飾を考える上で貴重な発見であった。また、大宰府からは多くの緑釉陶器が出土しているが、中世のものは数少なく、また花文や幾何学文が型捺された例はなく、中世緑釉陶器研究に一資料を得たことになる。今後の類例を俟ちたい。

4．第64次調査

本調査は住宅建築にともなう事前調査である。この地域は大宰府条坊の北郭外にあたり、昭和2年4月に銅製の「御笠団印」が発見されている。(註1)しかしながら農作業中の偶然の発見のため出土状況・遺構の有無などまったく手懸りをつかむにはいたっていない。律令制下の地方軍制解明の一助としてその出土地の発掘調査がまたれていた。昭和50年、団印出土地のすぐ北隣りに住宅建築が計画されたためその事前調査を実施したが、この時には遺構遺物ともに確認されなかった。今回、出土地の西側、丘陵の頂部平坦地に住宅建築の申請が出され、そのめぐまれた立地から遺構の存在する可能性が残されていたため調査を実施した。地番は筑紫郡太宰府町大字国分字堀田754—4・5番地である。

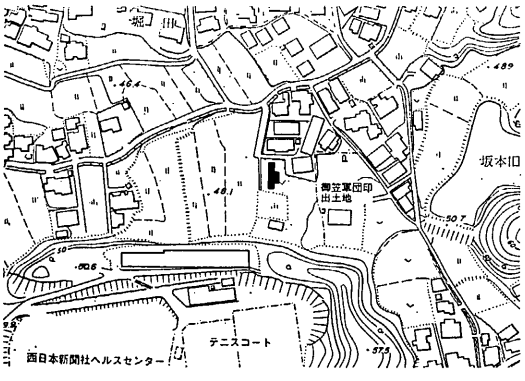
調査は昭和54年5月9日に開始し、同月15日に終了した。

検出遺構

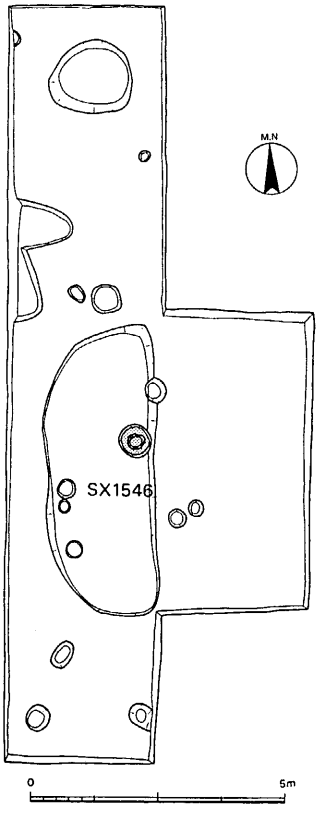
調査対象地に南北方向のトレンチ（3×15m）1カ所を設定し、後に一部を拡張した。表土（耕作土）を除去すると遺物を包含する暗灰茶色土層が薄く層をなし、その下に地山が認められた。遺構は地山に掘り込まれており、竪穴状遺構1、ピットが検出された。

竪穴状遺構

SX1546　トレンチの中央付近で検出した遺構で、半円形の竪穴をなしていた。5.7×2.1mほどの南北に細長い竪穴で、6～20cmほどの深さをはかる。上屋を構成するための柱穴は検出できず、配されていなかったものと判断される。

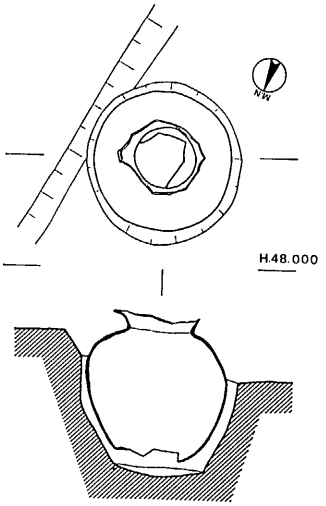


第25図　第64次調査地周辺図



第26図　第64次調査遺構配置図

興味のあることに、東壁沿いの北側寄りの部分に円形土壙が掘られ、その中に大甕が正立して据えられていた（第27図）。この土壙が竪穴遺構に付属することは、その掘り込み面からみて疑いない。大甕は肩部から上約20cmを残して埋め込まれており、その底部は打ち欠かれていた。竪穴状遺構・大甕ともに性格・用途を明らかにしえない。



第27図　ＳＸ1546内大甕実測図

出土遺物

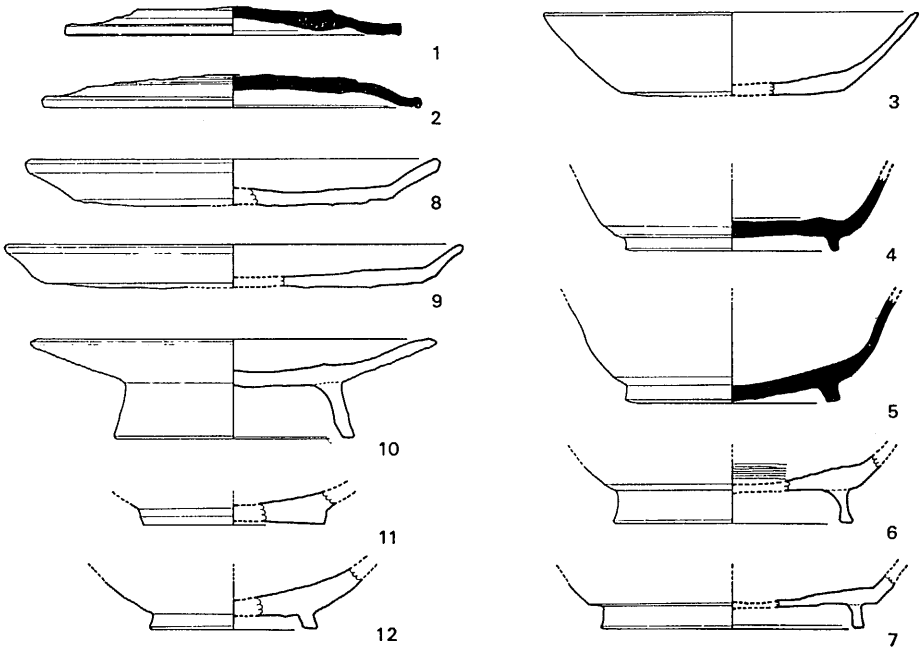
ＳＸ1546にともなう出土遺物はほとんどなく、大半はそれを覆う暗灰茶色土層出土のものである。

土器（第28・29図、別表１、図版29）

須恵器

杯蓋（１・２）　２は暗灰茶色土層からの出土。いずれもヘラ切りされた天井部にはつまみを有さない。口縁端部は体部先端を小さく断面三角形状につまみ出してつくっている。

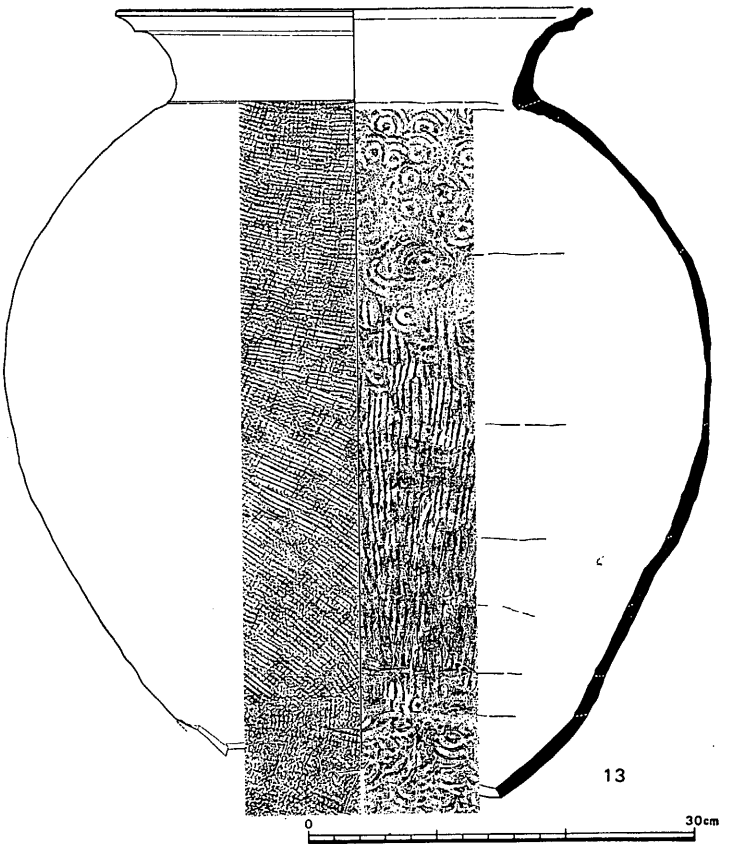
杯身（４・５）　いずれも体部下半の破片で、底部に断面四角の高台を有する。体部は上部に向かうにつれ、外反しつつ開いていく。体部外面の下半にわずかにヘラ削り痕を残す。４・



第28図　第64次調査出土土器・陶器実測図

5ともに底径8.2cm。

甕（13）　SX1546内の土壙に埋められていた甕で、口径37.1cm、胴径54.6cm、残存高61.9cmをはるか大形品である。口縁部の⅔、および打ち欠かれた底部を除けば完存している。頸部から大きく外反しつつ外開きして立ち上がる口縁は端部下約2cmほどで再び立ち上がり大きく外反して端部にいたり、二重口縁をなしている。内外とも横ナデでていねいに調整を加えている。胴部は内外ともに粗く明瞭にタタいており、そのため器表に凹凸がいちじるしい。胴部外面には正格子目のタタキを用いているが、肩・底部付近は胴中央部にくらべ、若干目がこまかい。内面のタタキも外面に対応して三種認められる。頸部から肩部にかけての上半は同心円文のタタキをほどこす。胴中央部は4～5mmの間隔で目の粗い平行タタキを縦方向にほどこす。底部付近には青海波タタキが残されている。このように内外ともにタタキの特徴が3区分されるが、ことに胴部と底部付近とでは単にタタキの違いにとどまらず、胎土の色調まで明瞭に異なっており、注目される。



第29図　SX1546出土大甕実測図

土師器

杯（3・6・7）　3は無高台の杯で、外底部を除きナデ調整をほどこす。6・7は細身の比較的高い高台を有する杯の下半部で、外面をヘラ削りし、6は内面をヘラみがきしている。6はSX1546内に据えられた大甕内からの出土である。

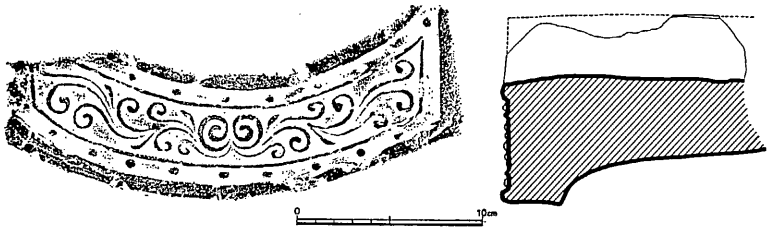
皿（8・9）　底部はヘラ切り離しされ平底をなす。体部はわずかに外反しつつ立ち上がり大きく外に開く。器高1.7～1.8cm。体部・内底はナデ調整されている。

皿c（10）　口径15.6cmをはる大形の高台付皿で、ヘラ切りされた底部に約2.1cmの高さ

の高台をつけている。器高3.9cm。

陶器

緑釉陶器（11）灰釉陶器（12）の椀底部付近の小破片で、いずれも内外面ともに施釉がみられるが、12の外底にはおよんでいない。11は土師質の例であるが、他に表土から須恵質で蛇の目高台を有する例の椀底部小破片が2点出土している。



第30図　第64次調査出土軒平瓦実測図・拓影

瓦類（第30図、図版43）

今回の調査では若干の瓦が出土したが、軒先瓦は1点のみである。

第30図は瓦当面のほぼ完存する軒平瓦で、凸面顎部に赤色顔料が塗布されている。内区主文は均正唐草文で、中心飾はC字形の上端から内側に大きく巻き込んだ文様を向かい合わせており、そこからやはり頭部を巻き込む2葉単位の唐草を左右に3回転して流し、4回転目を単葉にしてとめる。外区には珠文が上下に各11個、脇区に各1個、計24個配されている。

平瓦部の厚さ約4.1cmをはかる分厚い造りの瓦で、砂粒を混じえた胎土を軟質に焼成しており淡灰色を呈する。平瓦部の凸面は縄目叩きされるが、曲線顎の周囲をナデ消している。凹面には布目を残すが、瓦当近くではヘラ削りされる。瓦当厚6.6cm、上弦幅約23.5cm、下弦幅24.7cm、弦深約3.2cm。暗灰茶色土層からの出土。

この瓦当文を有する古瓦の例は、これまで太宰府町般若寺跡から1点知られていたのみであったが、ここに初めて類例を追加することができた。九州には他に例のない瓦当文であり、類例は平安京にみられる。たとえば京都市西賀茂角社瓦窯跡焼土壙中層出土のＮＳ209型式軒平瓦[註2]は本例あるいは般若寺例と酷似しており、畿内色の強い古瓦といえる。なおＮＳ209型式は9世紀中頃に比定されており、本例の年代推定の参考となる。

小　結

目的とした御笠軍団に関する遺構を確認することはできなかった。東壁に大甕を埋めたＳＸ1546が検出された中では顕著な遺構であるが、その性格・用途を明らかにするにはいたらなかった。しかし遺構を覆う暗灰茶色土層、あるいは表土層から出土した遺物の多くは奈良時代後半頃に考えられるもので、一部平安時代に降るものがあり、緑釉・灰釉陶器も含まれていた。その点、これらの時期にこの地域に何らかの官衙施設が設けられていた可能性は残されており今後の調査に期待したい。

註1　武谷水城「基肄軍団と御笠軍団」（筑紫史談41）　1927

註2　近藤喬一編『西賀茂瓦窯跡』（平安京跡研究調査報告4）　1978

5．第65―1次調査

本次調査域は第54次調査の西側に接した地域で、蔵司の台地がもっとも南へ張り出しているため前面地域の南北幅がもっとも狭くなる。またＳＡ1400の南側部分にあたるため、ＳＡ1410が西へどのように延びるかを主たる目的として約680m²の発掘調査を実施した。地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字蔵司489番地である。

発掘調査は昭和54年６月５日に草木の伐採焼却を行い、翌日から開始した。下層遺構の有無や補足調査を含め同年９月27日に終了した。

検出遺構

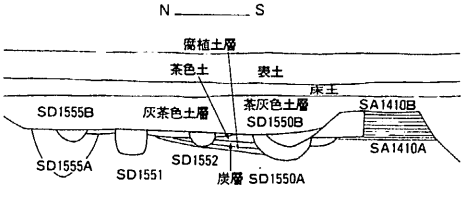
調査の結果、検出した主要な遺構は、築地１条、溝４本、土壙およびピット列である。これらの遺構の中で、築地ＳＡ1410は修築が行われ大別して２期になることが判明したと共に築地本体下部がそのまま遺存しており、それを検出したことは貴重な成果であった。

土層の関係

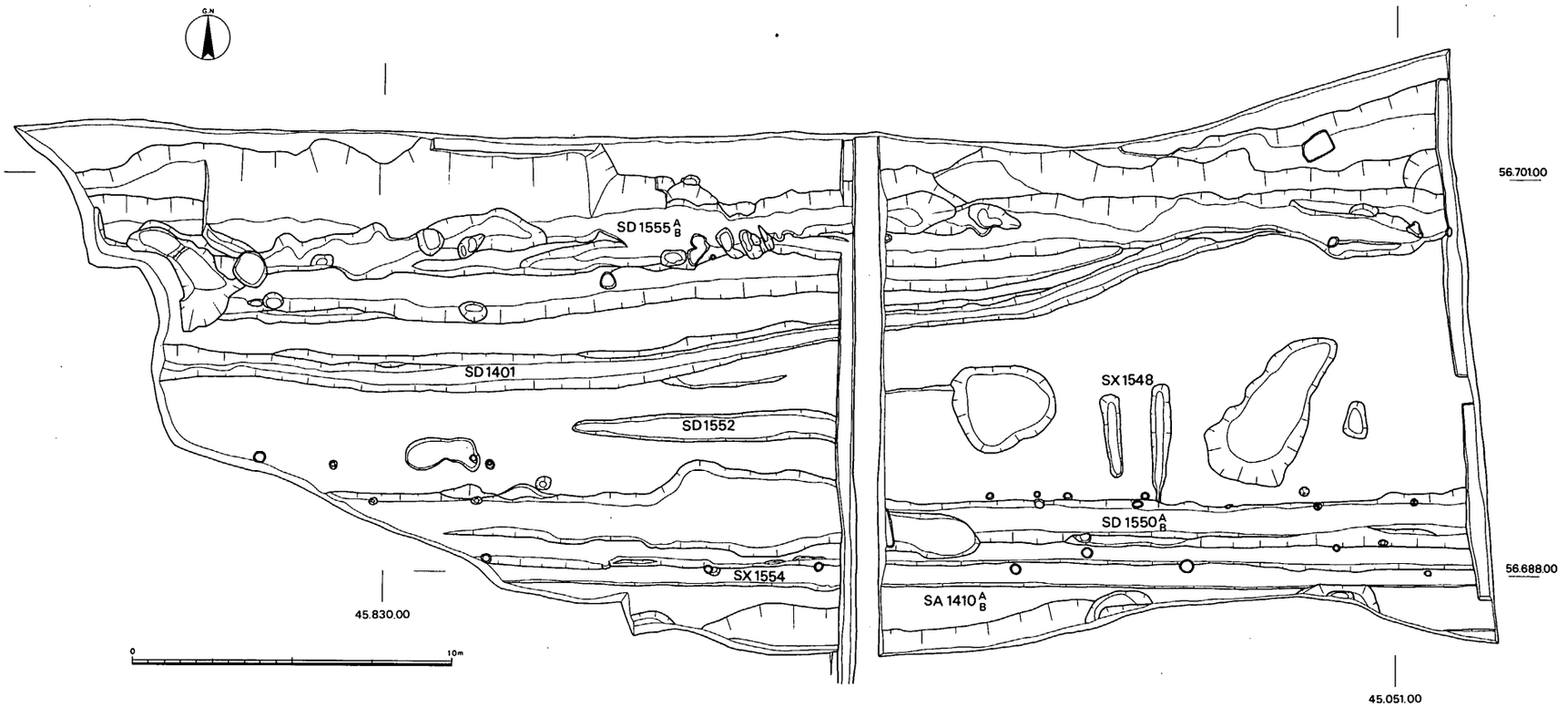
表土、床土を除去すると瓦を含んだ茶灰色土層に達した。この茶灰色土層は最終遺構面全体を覆う層で、これを除去するとＳＡ1410Ｂ、ＳＤ1401・1550Ｂ・1552・1555Ｂが検出された。またＳＡ1410Ｂの北側では屋根から自然に落下したような状態で、多量の瓦が堆積していた。この瓦堆積層および灰茶色土層を取り除くと蔵司前面域の第Ⅱ―１期に造営されたＳＡ1410Ａ、ＳＤ1550Ａ・1555Ａを検出することができた。またＳＡ1410Ａは築地基壇を一部改修していたことが明らかになり、ＳＡ1410Ａはさらにさ１４１０Ａａ・ｂの２小期に区分できた。最後に下層遺構の有無を調査するために西半部の一部を掘り下げたところ炭化物を多量に含む層および腐植土層が検出され、その中に６世紀後半から末にかけての土器が一括して多量に発見された。これは台地上にかつて存在した古墳時代の遺構を破壊し、整地層中に投棄したものと考えられる。

築地

ＳＡ1410Ａ　基壇幅3.5m以上、本体幅1.95m以上を測るもので、基壇犬走りの部分が２段になっていた時期と段をなくした時期とに小区分でき、前者をａ、後者をｂとして表記する。ＳＡ1410Ａａは基壇犬走りが２段になる特異なもので、幅は下段が約60cm、上段が約50cm、総幅約140cmを測る。基壇および本体築成方法は、先ず整地層上に約50cm（黄色砂質土層）版築を行い、次に本体部分を築成し、その後犬走り上段上に淡



第31図　第65-１次調査土層模式図



第32図　第65－1次調査遺構配置図

茶灰色土層を積み、その後上段端を斜に切って面を造り、上・下二段の築地犬走りとしている。ＳＡ1410Ａｂでは下段の犬走りを上段の面に合うように土を積み上げ、その幅を約100cmとしている。またｂ期に犬走り上に不定間隔であるが、築地方向にあう柱穴列ＳＸ1554を検出したが、その性格は明らかでない。ＳＡ1410Ａｂの最後は屋根から瓦が滑り落ちたような状態で、犬走りの肩からＳＤ1550Ａｂ底に堆積していた。この落下した瓦の叩目は全て縄目であった。

ＳＡ1410Ｂ　ＳＡ1410Ａｂの屋根が崩壊した後に犬走り上に淡茶色土層を積み犬走りをかさあげしている。この築地は自然崩壊したとみられ、基壇北側部分に落下した瓦が累々として堆積していた。

溝

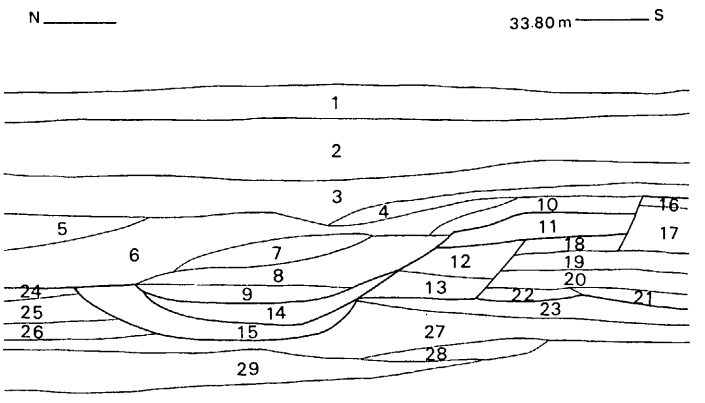
ＳＤ1550Ａ　ＳＡ1410Ａ期の排水溝で、ＳＡ1410と同じように変遷している。ＳＤ1550Ａａは幅約150cm、ＳＤ1550Ａｂは140cmを測り、また溝底は緩やかに東へ傾斜している。

ＳＤ1550Ｂ　ＳＡ1410Ｂに伴う溝で、幅約160cmを測り、ＳＡ1410Ｂから落下した瓦が多量に堆積していた。

ＳＤ1552　ＳＫ1549に接する浅い溝で、幅100cm弱、深さ20cmを測る。西側は削平により消失している。暗灰色粘質土の埋土中に相当量の瓦が含まれていた。

ＳＤ1555Ａ　発掘区北側に流れる大溝で、幅約310cm、深さ約100cmを測り、溝底は東から西へ傾斜している。往時には相当な流れがあったと考えられ、溝底はいたる所で凹凸が著しい。溝の東端部分付近を除き、他は全て台地先端部分の崩壊により埋没したと考えられ、溝底の灰色砂層以外は花崗岩バイラン土の塊であった。また、発掘区西側中央部以西では溝の肩も崩壊していた。

ＳＤ1555Ｂ　ＳＤ1555Ａが埋没した後、同位置に幅約215cm、深さ60cmの溝を造



第33図　第65-1次調査ＳＡ1410・ＳＤ1550土層実測図

1 表土
2 床土
3 茶灰色土層
4 黄褐色土層
5 濁茶灰色砂質土層
6 暗灰色粘土層
7 暗茶色土層
8 濁茶色土層
9 明茶色土層
（瓦の出土量多し）
10 暗茶色土層
11 淡茶色土層
12 茶赤色砂質土層
13 黄茶色土層
14 暗赤茶色土層
15 暗赤茶色粘質土層
16 黒茶色粘土層
17 淡黒茶色砂質土層
18 淡茶灰色土層
19 黄色砂質土層
20 茶黒色砂質土層
21 黄茶色砂質土層
22 茶灰色砂質土層
23 灰色砂層
24 黄褐色土層
25 茶灰色粘質土層
26 茶灰色砂質土層
27 黄灰色粘質土層
28 黄灰色砂質土層
29 黒色粘土層

っている。埋土は砂および砂質土であることから、溝は自然に埋没したものと考えられる。

SD1401　SD1555の埋没後に新たにつくられた溝である。第54次調査ではSA1400の南側に平行して走っていたが、本次調査域では、一部SD1555と重複するが、SD1555を避けるように南へ曲がり、若干彎曲しながら西へ流れる。幅約60cm、深さ約40cmを測り、溝底は西へ傾斜している。

出土遺物

本次調査で出土した遺物の大部分はSA1410の北側に落下した状態で堆積していた瓦類で、土器は他地域に比して比較的少かった。また少数であるが、鉄製品をつくる前のものかとも考えられる鉄塊や鉄を取った後の滓が、茶灰色土層からまとまって出土した。この鉄塊や鉄滓の出土は本次調査域の北に接した丘稜部が匠司と俗称されていたことを考えると注目される。

また、整地層から6世紀末頃の土器が炭化物と共に一括して出土したが、これは台地上にこの時代の住居跡が存在し、後に官衙域になった時整理されたものと考えられ台地上の調査が期待される。

整地層一括出土土器（第34～36図、別表1、図版30～32）

発掘区東半中央部付近を2.6m×2.6mの範囲を掘り下げたところ古墳時代の土器が炭化物と共に投げ棄てられたような状態で一括して出土した。これは、恐らく蔵司前面地域を整地する際北側の台地にあった焼失家屋を削平し、この地域に炭化物と共に投棄したものと考えられる。

炭化物と共に出土した土器は須恵器（杯、高杯、坩、壺、甕）、土師器（壺、甕、甑、鉢）、ミニチュア土器（鉢、模造鏡）である。

須恵器

杯蓋（1～8）　口径13.2～14.3cm、器高3.9～4.5cmを測る。口縁端部は全て丸く仕上げ天井部の回転ヘラ削りは⅓前後のものがほとんどである。7、8には円弧状の叩目があり、それをヨコナデおよびナデにより若干消している。1・7の天井部にはヘラ記号が施されている。

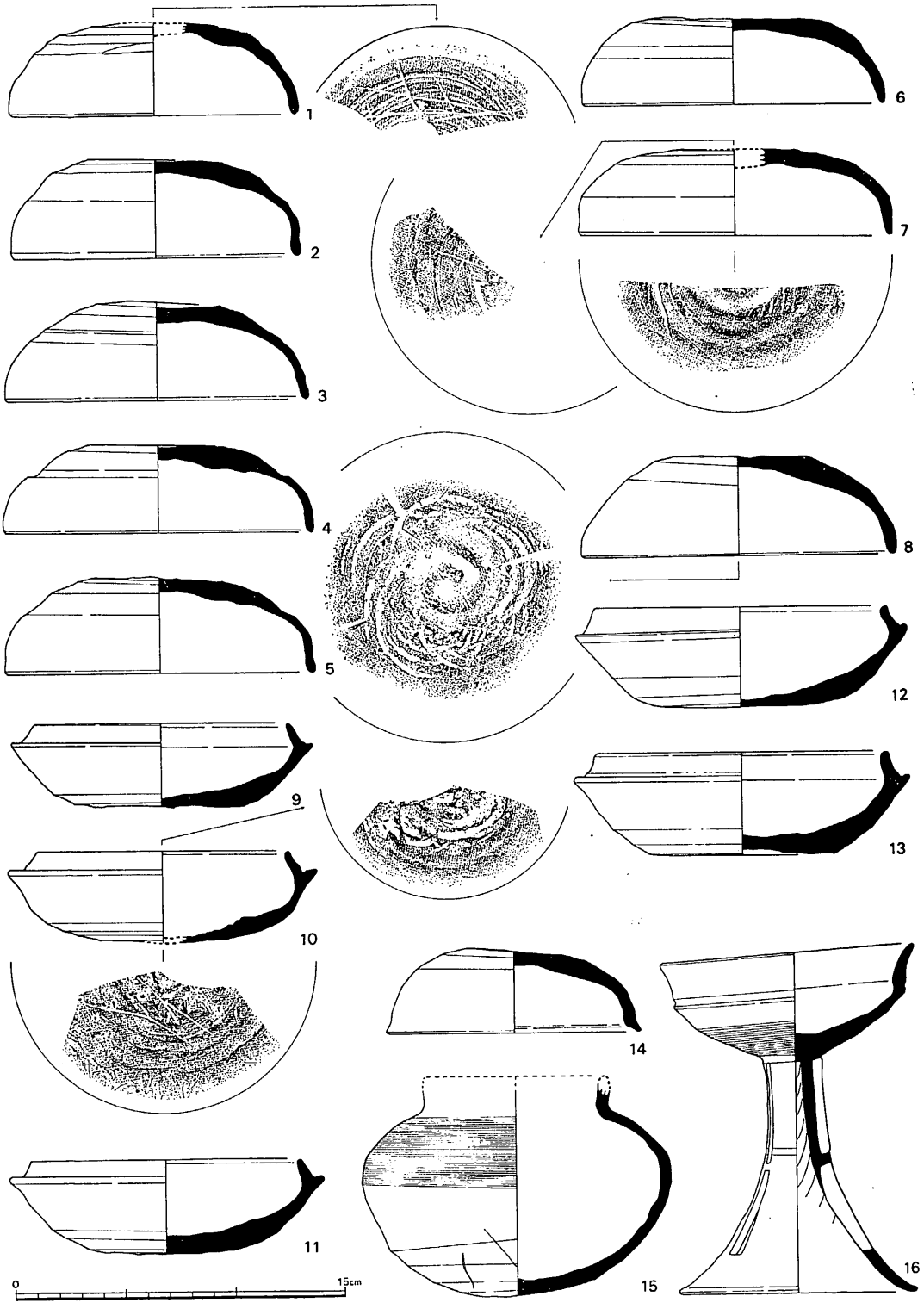
杯身（9～13）　口径11.6～13.4cm、受部径13.8～15.3cm、器高3.8～4.6cmを測る。底部は回転ヘラ削り調整を施している。10は内底に円弧状の叩目、外底にはヘラ記号が見られる。

坩蓋（14）　口径11.6cm、器高3.7cmを測る。口縁端部は内傾し、凹線が巡る。

坩（15）　口縁部と胴部の一部を欠失しているが、復原すると比較的大きな坩になる。体部下位は回転ヘラ削り、上半はカキ目調整を施している。

高杯（16）　長脚二段の高杯で、口径11.5cm、脚端径10.8cm、器高15.5cmを測る。脚部内面上半には左方向の強いシボリ目が残り、杯部下半にはカキ目調整が施されている。杯部内底には「一」のヘラ記号がある。

甕（27）　口縁部片と体部片が出土した。27の口縁部は上位で屈曲し、また端部は若干下方



第34図　整地層出土土器実測図(1)

に垂下する。端部近くに三角突帯を巡らしている。残存部は全てヨコナデ調整である。

壷（28）　口縁部の一部と脚部を欠失しているのみで他は完存している脚付直口壷である。脚部は完全に欠失しているが、体部最下部に残るヘラによる穿孔痕から4個所に透しを有することが判る。口縁部中位に2条の沈線、体部上位に3条の沈線を入れ、上段に刺突文を施している。体部内面全体に同心円状の叩目を有するが、体部⅓以上はヨコナデによりその叩目を若干消している。

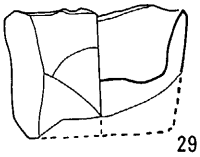
土師器

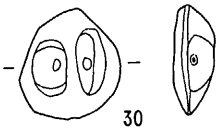
壷（17～20）　体部は略球形を呈する壷である。口縁部の形状は若干外傾するが直立ぎみの17・18と、中位で外反する20の2種類がある。後者はまた下ぶくれ状の体部を成している。体部内面のヘラ削りは底部付近とそれ以上の2段階になるもの（19・20）と、底部付近と体部上端、それにその中間部分の3段階に分けて削るもの（18）とがある。19は器面の剝離が著しいため刷毛目調整は一部残っているのみである。20の体部外面には二次的に火熱を受け、また濃密に煤が付着していることから煮沸用器として使用されたことが判る。

甕（21）　平底様の底部を有し、口縁部は中位で屈曲する。体部内面のヘラ削りは底部付近で止まるものもあるが、大方は一気に体部上面まで削り上げている。体部外面の刷毛目調整は底部付近では細く、他は荒い。

鉢（22・23）　22は把手付の鉢形土器で、体部外面はヘラ削り調整、内面はヘラ削り調整を行っている。内面下半は使用時の磨滅のためヘラ削りは消えている。23は片口の鉢で、内面はヘラ削り調整、外面は刷毛目調整を2段にわたって施している。

甑（24～26）　24・25は円筒形の土器に一対の把手を貼付したもので、内面はヘラ削りを施している。24の外面は刷毛目調整をした後にヘラナデ仕上げを行い、刷毛目調整の一部を残して消し去っている。26は鉢形を呈する甑で、把手は付けられていない。内外面ともにヘラ削り調整を施している。


29


30

第35図　整地層出土ミニチュア土器・模造鏡実測図(2)

ミニチュア土器

鉢（29）　ミニチュアの鉢は2個出土した。全て指による成形である。

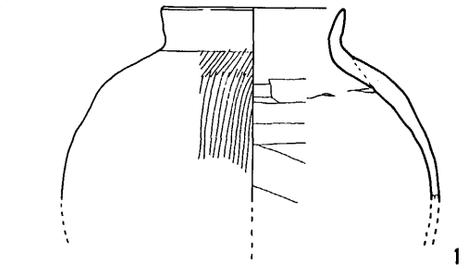
模造鏡（30）　凸面鏡をなすもので、鈕孔は両方から穿っている。

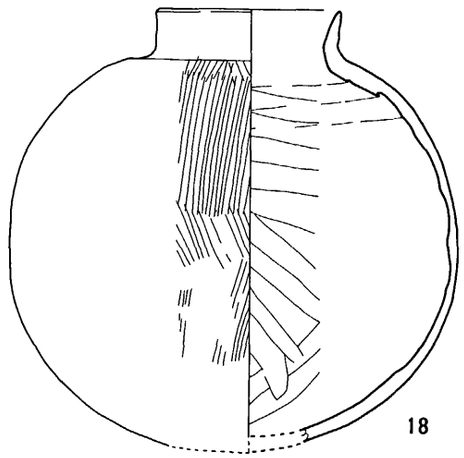
SD1555A出土土器（第37図、別表1）

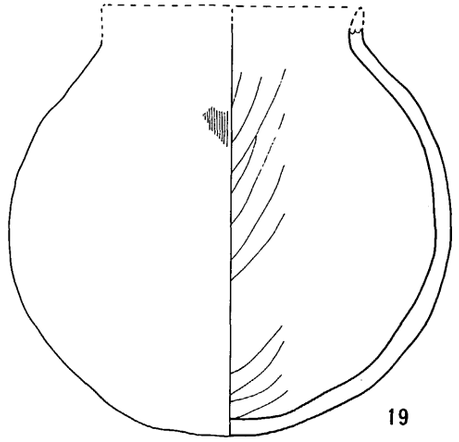
須恵器・土師器が出土している。

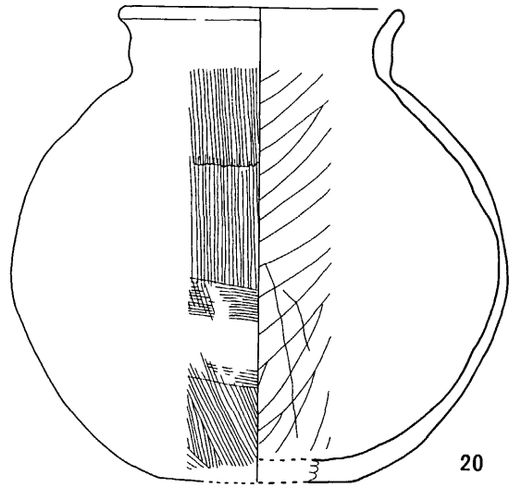
須恵器

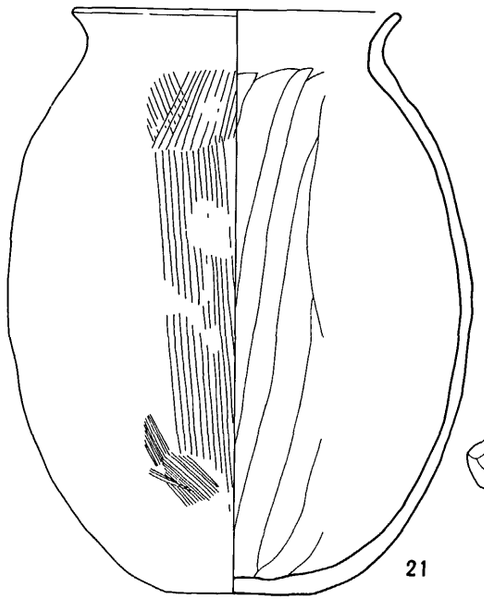
杯（1・2）　1は無高台のもので、底部はヘラ切り後ヘラナデ調整を施している。2は大形のもので、体部および口縁部はヨコナデで、内底はナデ調整している。外面の体部下半はヘ

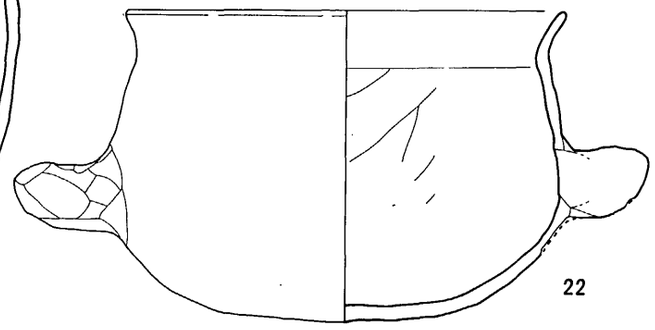

17

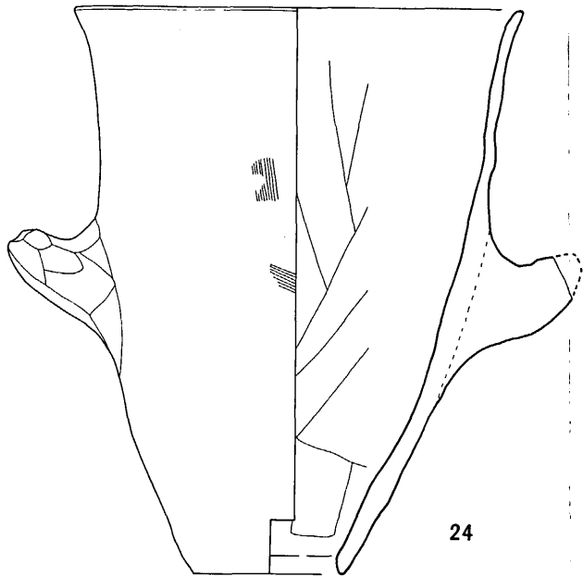

18

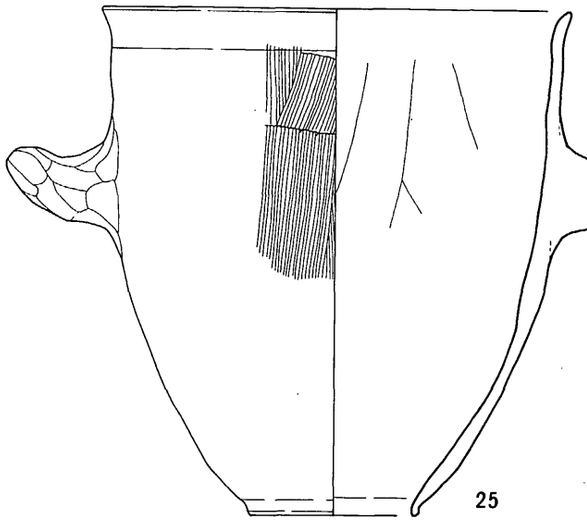

19

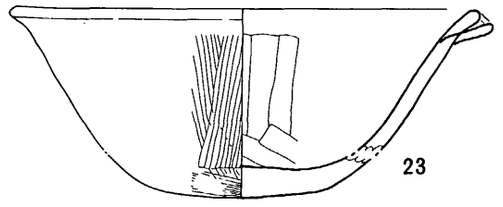

20

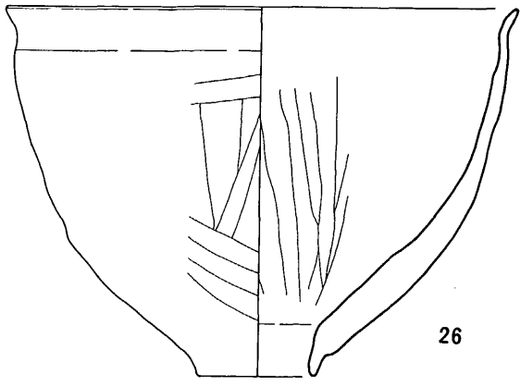

21

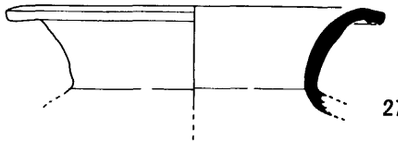

22

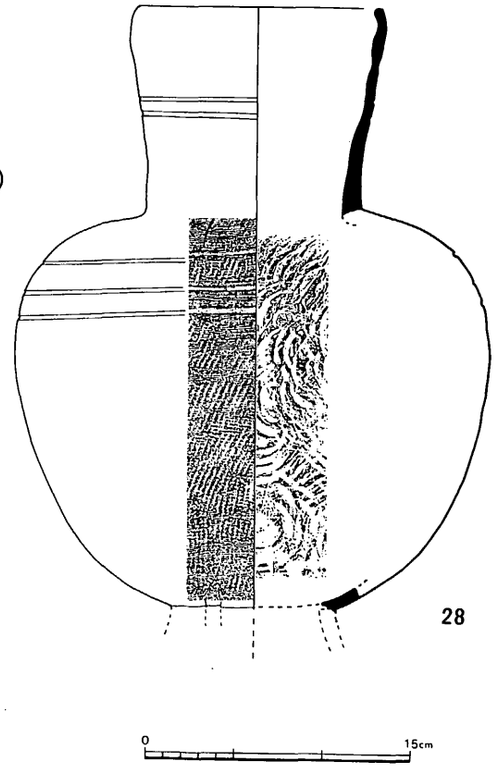

24


25


23

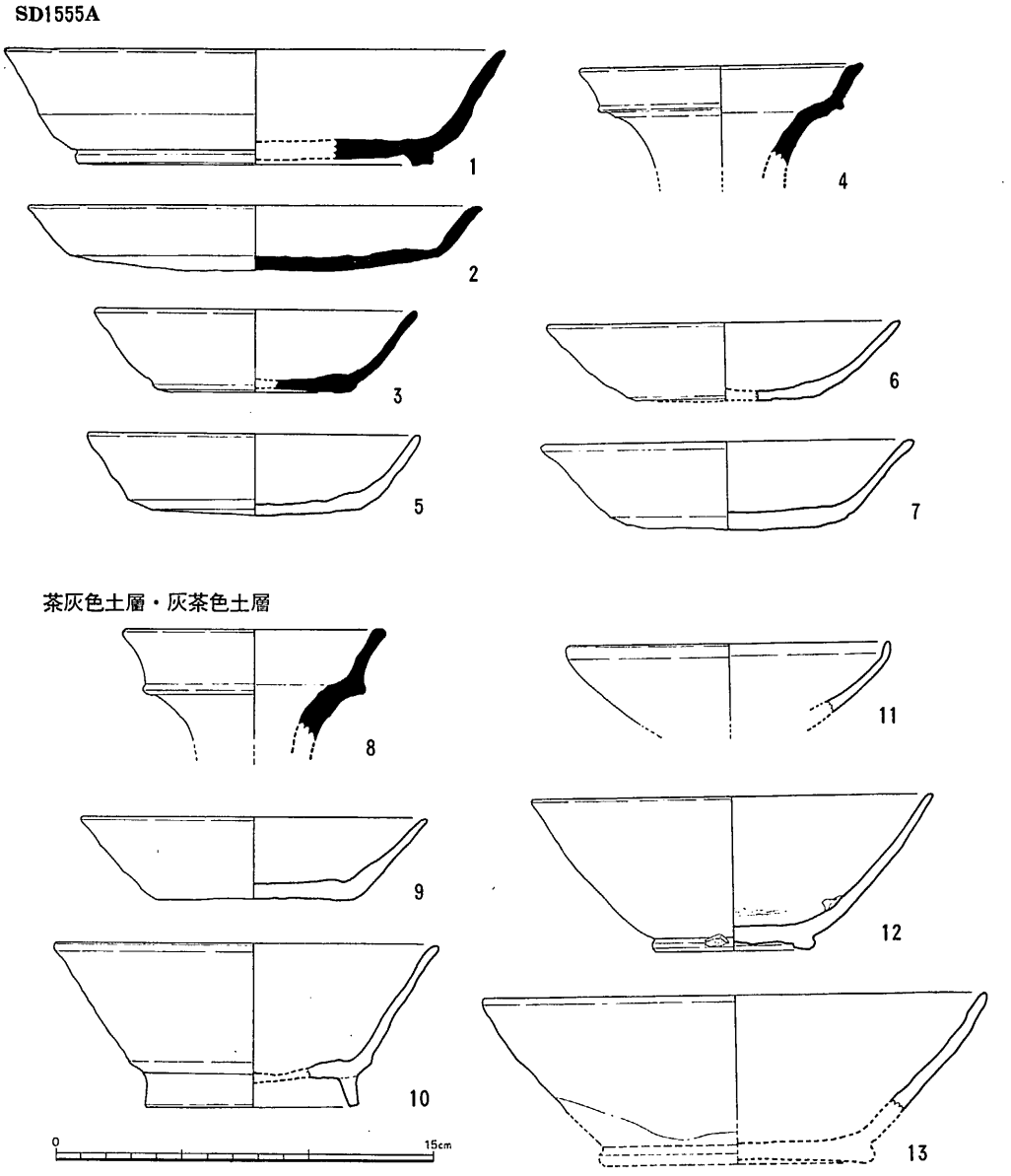

26


27


28

0 15cm

第36図　整地層出土土器実測図(３)



第37図　ＳＤ1555Ａ、茶灰色土層、灰茶色土層出土土器・陶磁器実測図

ラケズリを行い、高台は底部端に貼付する。

皿（３）　内外面ヨコナデであるが、内底の一部はナデ調整し、外底は回転ヘラケズリを行っている。

壷（４）　口縁部のみの小片で、復原口径11.4cmを測る。口縁上部は「く」字状に屈曲し、

外面の屈曲部は強いヨコナデで凸帯状となっている。端部は平坦にしている。

土師器

杯（5～7）　口径13.2～14.9cm、器高3.1～3.5cmのものである。いずれも底部はヘラ切りで、体部は外上方へ直線的にのびる。体部の内外面はヨコナデ、内底はナデ調整している。5はヘラ切り後回転ヘラケズリし、6は一部ナデ調整を行っている。

茶灰色・灰茶色土出土土器（第37図、別表1）

須恵器・土師器・緑釉陶器・越州窯系青磁が出土している。10は灰茶色土出土で、他は茶灰色土出土のものである。

須恵器

壷（8）　口縁部の小片で復原口径10.6cmのもので、前記した3と類似している。

土師器

杯（9）　口径23.6cm、器高3.3cmのもので、体部はヨコナデで、内底はナデている。底部はヘラ切りのものである。

椀（10）　口径15.7cm、器高6.5cmのもので、体部は直線的で、高台は底部端に貼付する。内外面はヨコナデである。胎土は精選され、内面には黒色のものが付着している。

陶磁器

青磁

椀（11～13）　いずれも越州窯系のものである。11は口縁部が直上にのび、胎土は淡灰色を呈し、茶色の釉がうす目に施釉されている。12はほぼ直線的な体部で、低い高台を削り出している。釉色は黄色味をおびた緑色で、体部下位と底部は無釉である。内底と高台の外面には6個の目跡がある。13は体部下半と底部を欠失する。釉色は黄緑色を呈し、外面の体部下半は露胎となっている。

瓦類

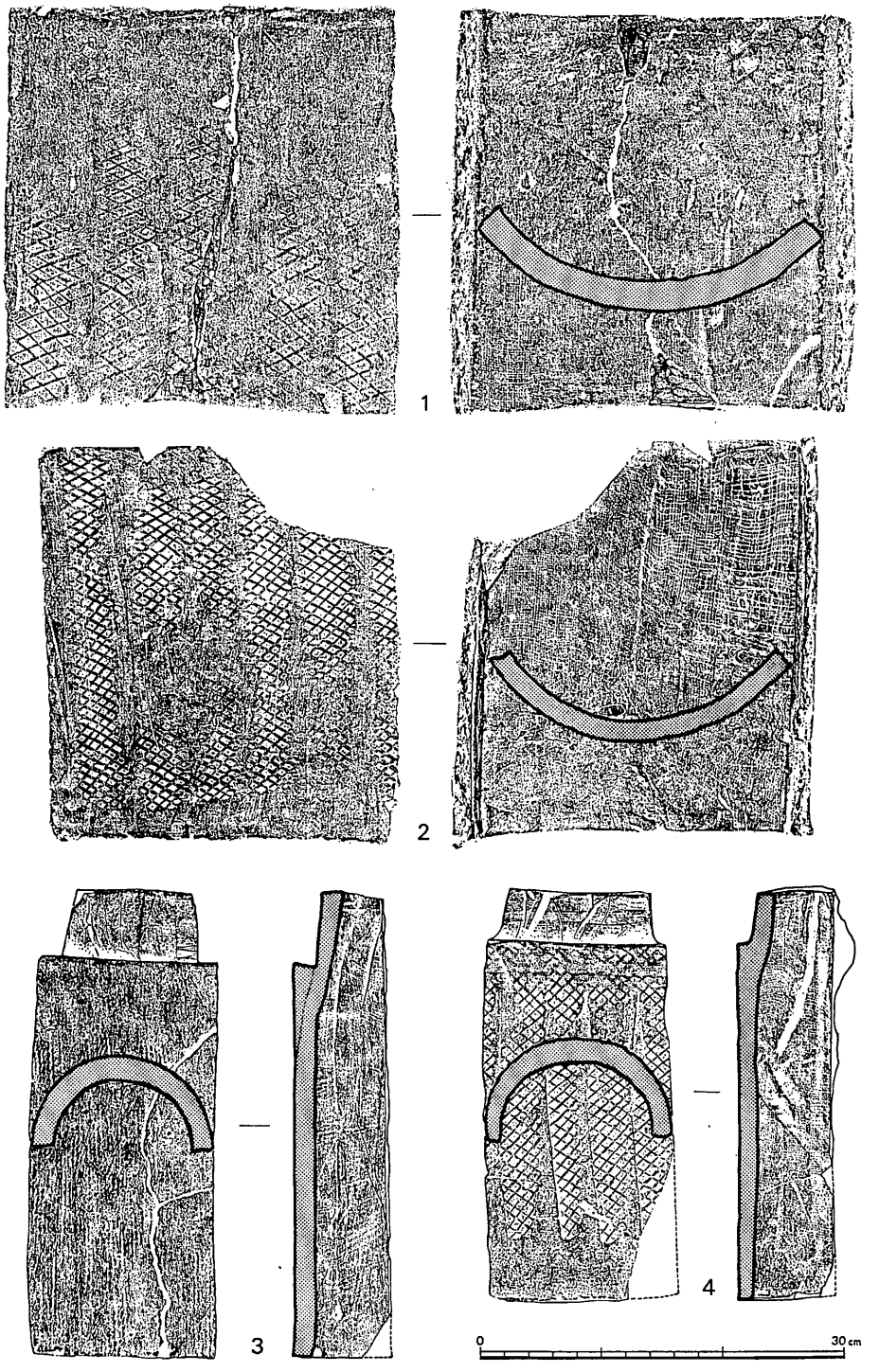
今回の調査で出土した瓦類は少い。ただ築地ＳＡ1410から滑り落ちたような状態でＳＤ1550の上に堆積した瓦は、上、下2層に分れ、しかも下層の瓦は、すべて縄目の叩きのものであることは非常に興味深い。ここでは、ＳＤ1550上に堆積した丸・平瓦を中心にして報告することにする。

軒丸瓦（図版24・25、別表2）

出土点数22点で4型式に分類できる。内訳は別表2に示したとおりである。これらは主にＳＤ1555から出土した。個別毎の記述については省略する。

軒平瓦（図版24、別表3）

出土点数22点で4型式に分類できる。内訳は別表3に示したとおりである。これらは、軒丸瓦同様に主にＳＤ1555から出土したが老司Ⅱ式が10点で全体の50%近くを占めている。また、平瓦部凸面の叩きは、すべて縄目である。

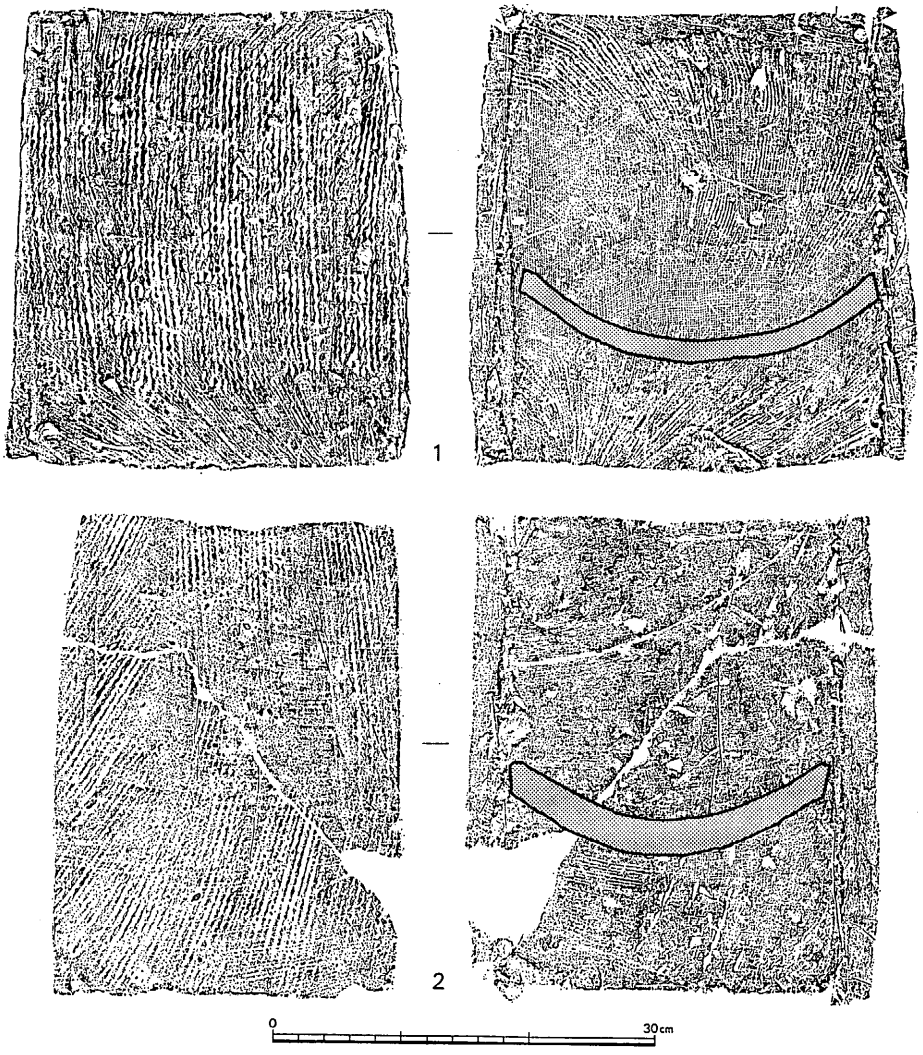


第38図　第65-1次調査丸・平瓦実測図・拓影

丸・平瓦（第38・39図、図版33・34）

築地ＳＡ1410の北側に滑り落ちたような状態で堆積した瓦は、上・下２層に分れることは、すでに述べたが、丸瓦、平瓦とも完形ないし、それに近い状態に復原できるものが比較的多い。ここではこれらについて述べる。

まず上層では、丸瓦は、いずれも玉縁を有するもので、粘土板巻きつけによるものである。３は凸面の叩きは縄目で、部分的に、すり消している。４は斜格子の叩きで、調整は行っていない。



第39図　第65-１次調査出土平瓦実測図・拓影

両側縁の調整は、3の縄目の叩きによるものは、分割面をヘラケズリするものと、分割時のままのものとがある。4の格子叩きによるものは、いずれも分割時のままである。

平瓦は、いずれも桶巻造りで、粘土板巻きつけによったものである。広端幅と狭端幅との差が、ほとんどなく円筒形に近い。両側縁は、分割時のままで、調整は行っていない。

次に下層では、丸瓦は完形ないし完形近くに復原できたものが28個体ある。第38図—3に示したものと同様に、いずれも玉縁を有するもので、玉縁の長さは3.5cmから6.5cmのものがある。

すべて粘土板によったもので、凸面の縄目叩きを部分的に、すり消している。両側縁は、分割時のままのものと、ヘラで丁寧に調整するものとがある。

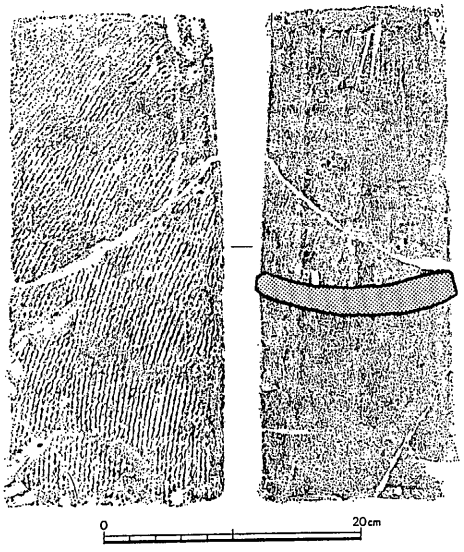
平瓦は39個体ある。すべて粘土板によるもので、糸切り痕が明瞭に残るものが多い。凸面叩きは縦位のものが多いが、叩きの方向が一定しないものもある。凹面は平滑で、布目痕が残るが、通常、桶巻作り丸瓦に認められるような板状の模骨痕を残すものはない。

両側縁は、ヘラによる丁寧な調整を施しているが、第60次調査の項で報告した桶巻作りによるものは、その分割面が円弧の中心に向うのに対して、これらは、すべて上弦ないし下弦の線に対して、ほぼ直角になる。また凸面には、直径2mmないし3mm前後のいわゆる放れ砂を用いたものが認められる。このように凸面叩きが縄目によるものが、格子目叩きによる桶巻作りのものとは異った特徴を有していることは、製作技法のちがいからくるものと考えられる。これまで大宰府出土の平瓦は、すべて桶巻作りによるものとの考え方があったが、ここに報告した凸面が縄目叩きによる平瓦は、一枚作りの可能性があることを指摘しておきたい。

次に文字瓦は626点ある。いずれも丸瓦および平瓦の凸面斜格子叩きの一部に刻まれたもので、「賀茂」、「平井」、「佐」銘のものが圧倒的に多い。これらについては、これまでの概報で報告しているので詳述はさけるが、書体等によって「賀茂」銘8種類、「平井」銘14種類、「佐」銘8種類に分類できる。このほか少量ずつではあるが、「筑前」、「安楽之寺」、「大国」などがある。

道具瓦（第40図、図版43）

道具瓦は面戸瓦20点、熨斗瓦1点、鬼瓦2点がある。このうち面戸瓦と鬼瓦については、第60次調査出土のものと同じであるので、詳細については省略する。



第40図　第65-1次調査出土熨斗瓦実測図・拓影

熨斗瓦は、桶巻作りによる平瓦を、生乾きの段階で半截したものである。両側縁は、いずれもヘラケズリによる調整を行っているが、片側縁は平瓦製作時の調整のままであり、他方の側縁は、熨斗瓦に分割した際に直にヘラケズリしている。

小　結

調査の結果検出した主要な遺構は、築地1条と溝4本のみである。ＳＡ1410は蔵司の外郭築地の可能性があり、この調査地域内で北折し台地に接続するかも知れないという想定のもとに調査を開始したが、西側部分は谷の流れによって破壊され、調査区内では北折しなかった。また第60次調査の結果と考え合わせれば政庁域の大垣である可能性もあり、今後の検討課題となった。築地残存部分は遺存状態が非常に良好で、築地本体の下部が高さ約30cm程残っており、基壇築成方法と本体との関係を知り得た。しかし残存状態が良好であったにもかかわらず、寄柱等はその痕跡すら発見されなかった。これは小礎石を使用し、全て撤去されたのかも知れないが、当初から寄柱は用いられなかった可能性が強い。

6．第65—2次調査

本次調査は、第54・60次調査の北側に接した地域で約860m²について発掘調査を実施した。この調査に先だって実施した第54・60・65—1次調査結果では築地・礎石建物等を検出したが、後世の削平が著しく、わずかにその痕跡を残すのみであった。今回の調査地域は既調査地より一段高くなっており、遺構の遺存状態も良好であろうと予測され、築地の内部施設の確認を主たる目的とした。また蔵司前面地域については本次調査をもって全て終了したことになる。

地番は筑紫郡太宰府町大字観世音寺字蔵司489番地である。

発掘調査は昭和54年9月20日に開始し、柱根および保土穴の保存処理作業を含め同年12月22日に終了した。

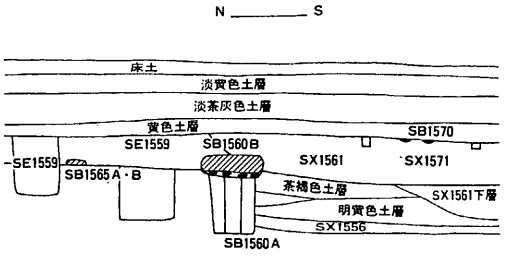
検出遺構

調査の結果検出した主要な遺構は掘立柱建物4棟、礎石建物3棟、井戸2基、製銅工房跡、瓦積遺構1、それにピット等である。先に行った第54・60・65—1次調査によって築地・建物・洪水跡等の遺構を検出したのであるが、これらは大略3期に分けられ、本次調査で検出した遺構も建物の建て替えや遺構相互の切り合い等から3期に分け、時期区分の基準については先の調査に拠った。

第Ⅰ期は第Ⅱ期造営に際して整地された時期以前の遺構で、ここでは第Ⅰ期に属する明確な遺構で検出できなかった。以下各期毎に遺構を説明する。

土層の関係

表土・床土を除去すると淡黄色土層、淡茶灰色土層があり、黄色土層は最終の遺構面全体を覆う層で、これを除去すると第Ⅲ期に属するＳＢ1570、ＳＢ1575Ａ・Ｂ、ＳＥ1559、ＳＸ1571、ＳＸ1573、ＳＸ1576等が検出された。またＳＢ1570、ＳＥ1559、ＳＸ1571は瓦を多量に含んだＳＸ1561以降に構築されたものである。このＳＸ1561は第Ⅱ期のＳＢ1565Ｂ、ＳＢ1560Ｂ、ＳＥ1558より上層でＳＢ1565Ｂの一部を切っている。また東半分ではＳＸ1561と同時期の大きな落ち込みＳＸ1572がある。また、ＳＢ1560Ａ・ＢとＳＢ1565Ａ・Ｂとの前後関係については層位からは摑むことはできない。茶褐色土層・明黄色土層はＳＢ1560の整地層であり、その下にＳＸ1556の炭層がある。このＳＸ1556は第Ⅰ期の時期に投棄されたものか、もしくは第Ⅱ期のための整地の一部として成されたものであろう。これから出土した土器は7世紀後半代のも



第41図　第65-2次調査土層模式図

のと考えられる。

第Ⅰ期の遺構

第Ⅰ期の遺構として明確に確認できるものは検出しなかったが、発掘区西端のＳＢ1560の南側でＳＸ1556の土壙状になった炭層を検出した。

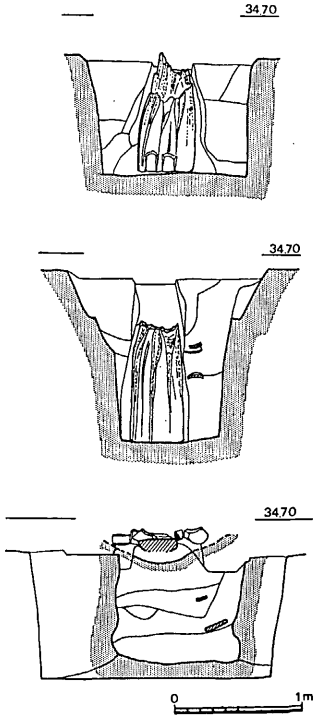
ＳＸ1556　焼土と炭が厚く堆積したもので、掘立柱建物ＳＢ1565Aはこの炭層を切って造営されている。この炭層中からは鞴の羽口等が出土しており、付近に工房に関する遺構があった可能性が考えられる。工房に関する遺構は検出できなかったが、炭層は北方の台地下まで広がっており、台地上からかき出されたもののようである。

第Ⅱ期の遺構

第Ⅱ期の遺構は更に2小期に区分される。第Ⅱ－1期にはＳＢ1560Aがあり、第Ⅱ－2にはＳＢ1560Ｂ・ＳＥ1558等がある。ＳＢ1565A・Ｂについては1・2期どちらに属するかは明確でないので、第Ⅱ期の大区分の中に位置付けした。

掘立柱建物

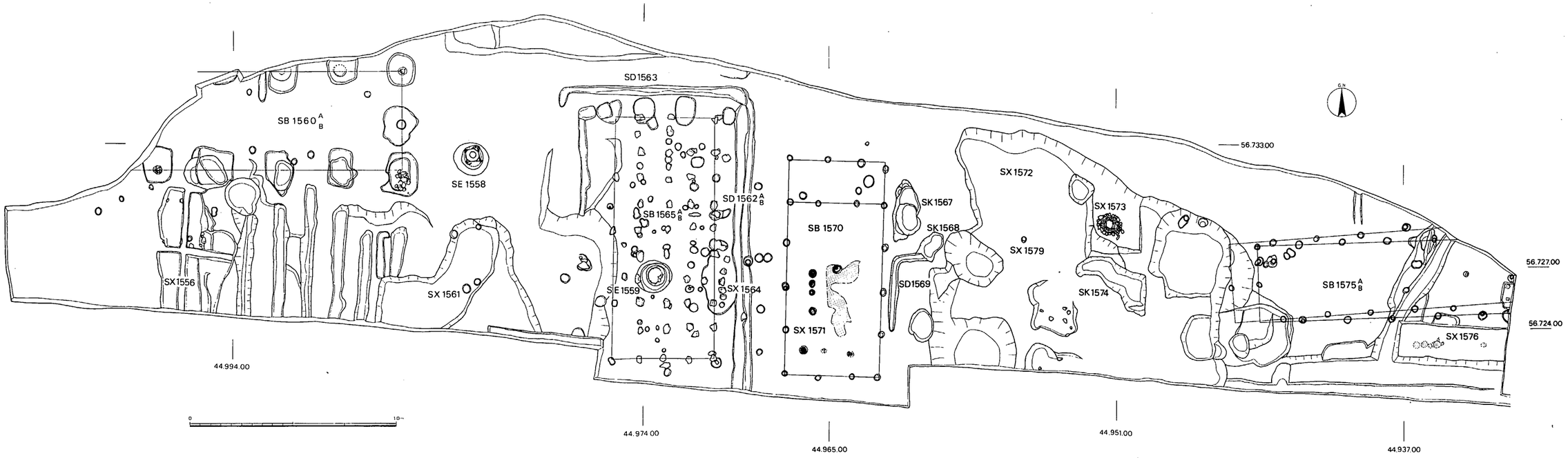
ＳＢ1560A　発掘区の西北隅部で検出した掘立柱建物である。これは南北2間、東西については4間分を検出した。これは更に西側の発掘区域外へ延びており、東西の規模については確認できなかった。柱穴の掘方は隅丸方形もしくは長方形を呈しており、1.20×1.80m前後、深さは1ｍ前後のものである。東北隅と西南端の柱穴には柱根が残存するが、他は抜き取られている。柱根の大きさはほぼ同じで、長さ90cm前後、径45cm前後のもので、底部は手斧で粗く打ち削っている。側面の下端部に25×14cmのイカダ穴がある。また柱穴のいくつかには柱の下部に瓦や拳大の石をまわしているものもある。柱間寸法は梁行の総距離4.84m、桁行の総距離11.94mとなり、梁行8尺、桁行10尺のものである。



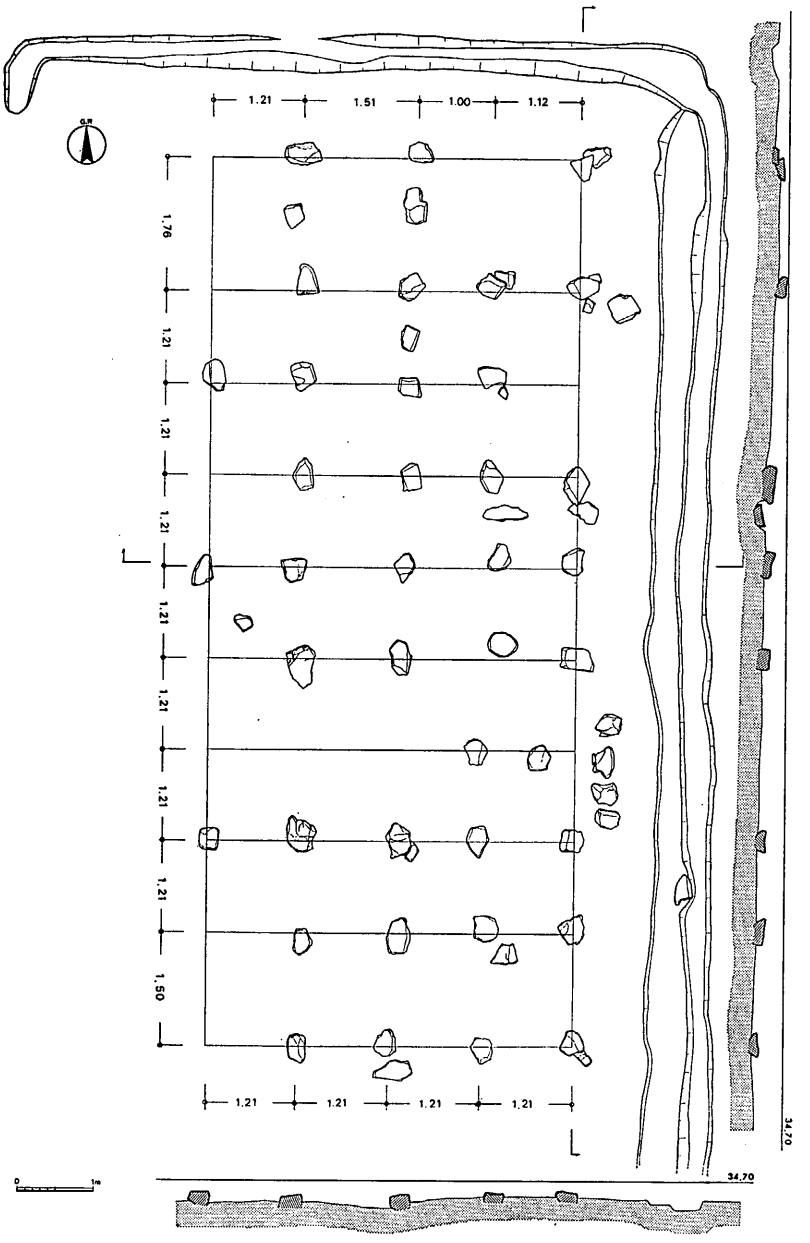
第42図　ＳＢ1560Ａ・Ｂ柱穴・根石実測図

礎石建物

ＳＢ1560Ｂ　ＳＢ1560Aと同位置・同規模の礎石建物である。遺存状態は悪く、ＳＢ1560Aの東南隅の柱穴の直上にわずかに根石が残っていたのみである。建て替えの際、ＳＢ1560Aの柱を抜き取った後、多量の瓦を柱穴中に投棄している。柱間寸法は梁行8尺・桁行10尺のものと考えられる。柱の抜き取り穴に入っていた土器は9世紀前半代のもので、この建物の時期はこの頃と考えられる。



第43図　第65－２次調査遺構配置図



第44図　ＳＢ1565Ａ・Ｂ実測図

ＳＢ1565Ａ　発掘区の中央部付近で検出したもので、遺存状態はきわめて悪く、礎石数個が残っているのみで、柱間等については不明である。

ＳＢ1565Ｂ　ＳＢ1565Ａと同位置に建て替えられたもので、遺存状態はきわめて良好であ

る。一部では新・旧の礎石が重なっている個所もあり、レベル的には約10cmの高低差がみられる。これは4間×9間の南北棟の総礎石のものである。ほぼ真南北の方位をとり、ＳＢ1560と方向を合わせている。西側柱礎石列はＳＸ1561によって切られ、3個のみ残存する。柱間距離については、南・北の側柱礎石間の心々距離は約11.80mで、約40尺に近い数値となる。1.21m等間であるが、南・北端の1間分はやや広くなり、1.50mと1.76mの柱間である。

東西方向の礎石列については柱筋を合わせているが、南北方向の礎石列は必ずしも柱筋は合わせておらず、南側柱礎石の梁間は1.21m等間であるが、北側柱の梁間は東から3間目が1.50mと広くなっている。また東側柱礎石列の南から3間目と4間目の東側に4個の石が並んであり、さらに北から2間目のところにも石が1個みられる。これらについては明確でないが、階段的性格のものとも考えられる。

最後にこの建物の構造については、桁方向に柱筋を合わせる礎石配置をしていることから、床張りで、校倉造りのものと考えられる。

このＳＢ1565Ａ・Ｂについては2小期のどの小期に入るか明瞭でないが、ＳＢ1565Ａは第Ⅱ－1期、ＳＢ1565Ｂは第Ⅱ－2期と考えた方が妥当のようである。

溝

ＳＤ1562Ａ　ＳＢ1565Ａの建物の雨落ち溝で、東側に位置する。溝幅については新期のＳＤ1562Ｂに切られているため不明で、また北側の雨落ち溝については明確でない。

ＳＤ1562Ｂ・1563Ｂ　ＳＢ1565Ｂの建物に伴なう雨落ち溝である。ＳＤ1562Ｂは旧期の溝より50cm東側よりで、側柱礎石から150cmの位置にある。溝幅40cm、深さ10cmのものである。

井戸

ＳＥ1558　ＳＢ1560の東側で検出した井戸である。掘り方は円形で径1.70m、深さ2.0mを測る。井戸枠は横板と曲物を組み合わせたもので、枠の上部は厚さ1.0m前後の薄い板を1枚ないし2枚合わせ横に使用し、縦・横60cmの正方形のものである。隅の接合は合欠きにしている。隅柱はみられず、隅部の外側ないし内側に瓦を立てて補強している。下部構造は径60cm、高さ35cm、厚さ0.5cmの曲物である。また底部には径30cm、高さ30cm、厚さ0.6cmの小形の曲物を中心に据えている。

土壙

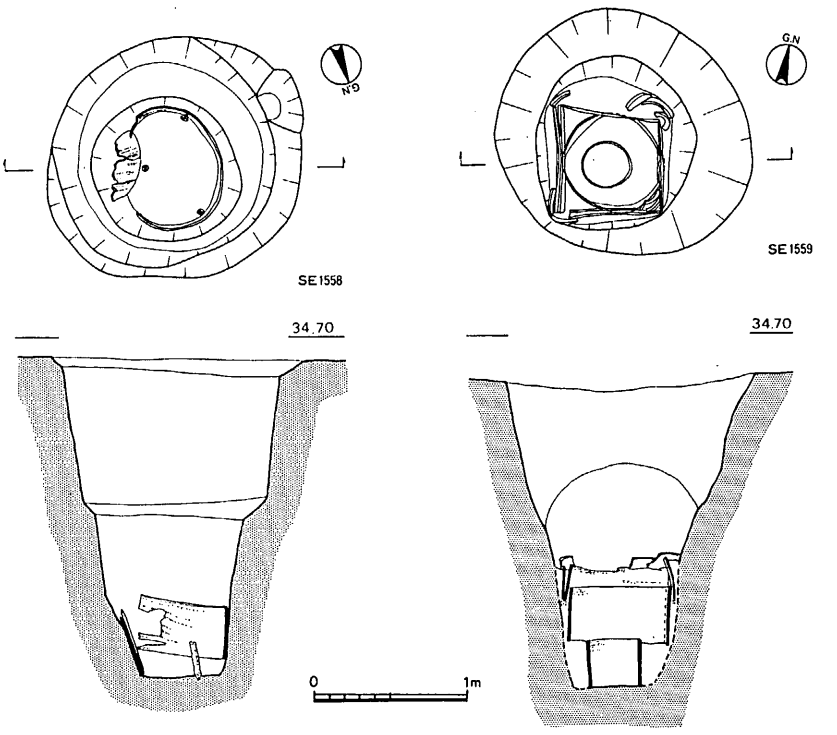
ＳＫ1574　土壙状の不整形の落ち込みである。整地の違いかとも考えられるが、一括して土器が出土した。

落ち込み

ＳＸ1561　ＳＢ1565Ｂの西側にある大きな落ち込みである。これはＳＢ1565Ｂを切っている。これには多量の瓦が混入しており、これから出土した土器は10世紀後半代のものである。

ＳＸ1572　ＳＸ1573の周囲で、灰褐色土層が大きく落ち込むもので、時期的にはＳＸ1561と

同じである。ＳＸ1573との層位関係については明確でないが、ＳＸ1573の整地とも考えられる。



第45図　ＳＥ1558・1559実測図

第III期の遺構

第Ⅲ期の遺構として、ＳＢ1570・ＳＥ1559・ＳＸ1571・ＳＸ1573・ＳＢ1575・ＳＸ1576がある。

掘立柱建物

ＳＢ1570　ＳＢ1565の東側で検出された3間×5間の掘立柱の建物である。南北棟であるが東へ若干ふっている。柱間は桁については2.13m（7.2尺）等間であるが、梁行については必ずしも規則的ではない。北側に1間分の間仕切りがある。柱穴の大きさは径25～35cmのものである。この建物の内部には保土穴（ＳＸ1571）とその東側には炭と鋳型・坩堝等が入ったＳＫ1567・1568、ＳＤ1569があり、この建物は工房の覆屋的性格のものと考えられる。

ＳＢ1575Ａ・Ｂ　発掘区東端で検出した重複する掘立柱の建物である。この建物は東西棟でほぼ同位置に同じ規模で建て替えが行なわれている。これは他の建物と比較すると方位のふれが大きい。この2棟の建物はいずれも梁行2間、桁行については5間分を検出したが、更に東側の発掘区域外へ延びており、桁行については不明である。いずれも柱間は桁行で2.20m等間で、梁行は1.90mである。柱穴は径25～40cm位のものである。この建物の内部と南側にはＳＸ1576がある。

工房跡

ＳＸ1571　ＳＢ1570の内部にあり、保土穴7個が「コ」字状に並んでいる。保土穴の周囲には焼け土がみられる。残存状態の良好なものは摺鉢状を呈し、径30cm、深さ16cmである。壁

は1cm前後の厚さで堅く焼けており、その周囲は5cmの厚さで焼けて赤化している。中には炭がつまり、銅滓が投棄されている。

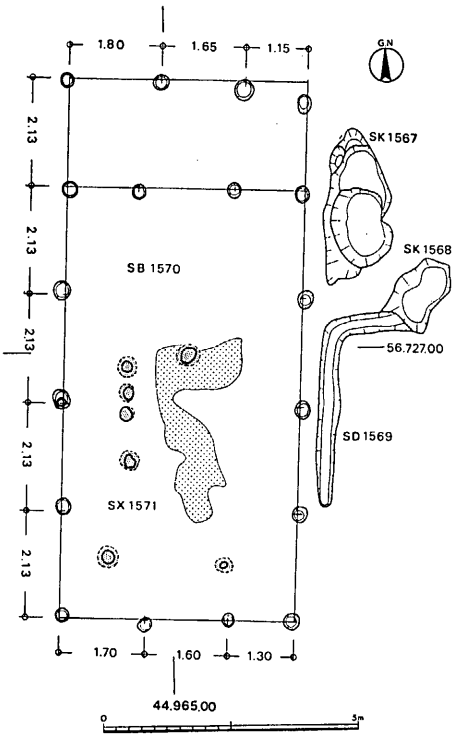
SX1576　SB1575A・Bの内部および、南側に保土穴状の焼け面がみられる。いずれも削平されているため痕跡はわずかで、明確でない。SB1575A・Bと付属するものかも知れない。

溝

SD1569　SB1570の東側で検出したものである。これは「L」字状を呈し、長さ約4m、幅40cm、深さ10cm前後の浅い溝である。ここには炭がつまり、銅滓・鋳型が出土した。SX1571と関連する遺構である。

土壙

SK1567・1568　いずれもSB1570の東側で検出したものである。この2つの土壙はSD1569と同様に炭が多量に入り、多量の鋳型・坩堝・鞴羽口・銅滓が出土した。形状は不整形で深さも15cm前後の浅いものである。SX1571に関連する遺構である。



第46図　SB1570、SK1567・1568、SD1569、SX1571実測図

SK1580　SB1565Bの西側で、半截された丸瓦が立て並べた状態で検出された。

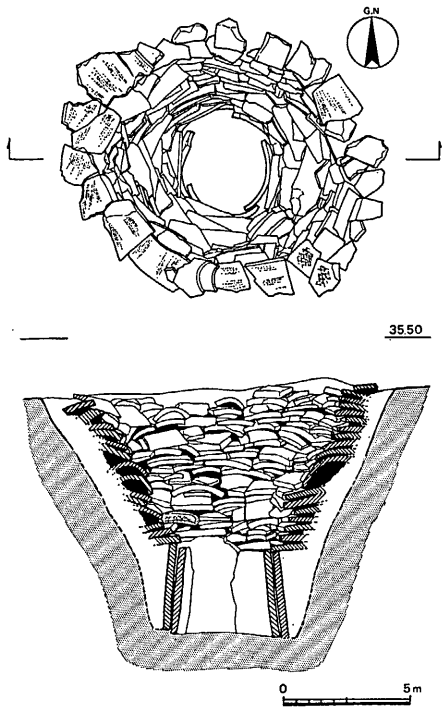
井戸

SE1559　SB1565Bを切って造られた井戸である。この井戸は平面が円形の掘り方のもので、径1.20m、深さ2.0mのもので、下部には曲物と曲物の底板を使用した枠が残っている。曲物は厚さ1cm前後、高さ30cmのもので、4分の1が欠失しており、その欠けた部分には曲物の底板を立てて補っている。枠の内側に接して3本の杭を打ち、内へ崩れるのを防いでいる。上部構造については不明である。

不明遺構

SX1573　SB1575の西北部で検出した井戸様の瓦組遺構である。円形のプランをもち、平瓦および丸瓦・軒平瓦を平に使用し、摺鉢状に積み重ねている。上端の径は90cm、下端径は40cmで、深さ1mのものである。構築法は摺鉢状の掘り方の下部に完形の平瓦（長さ35cm）を径40cmの円周に二重に立て並べ、その上に平瓦・丸瓦・軒平瓦を65cmの高さまで積み重ねている。

SX1579　SB1570の東側で検出した、直径20cmのピットである。ここからは「釘隠し」



第47図　ＳＸ1573実測図

杯蓋（1）　体部が歪んだ形を成すものである。天井部は回転ヘラ削り調整を行っている。

椀（2）　外反する高台と若干外上方へ延びる体部とからなる。体部中位には強いヨコナデにより2条の沈線が巡り、下半には回転ヘラ削り調整を施している。

土師器

甕（3・4）　両者ともに体部と口縁部の一部を残すのみである。3は体部があまり張らない小形の甕で、内面はヘラ削り、外面は刷毛目調整を施している。4は体部内面上端を横方向にヘラ削りされ、口縁部と体部との境を明確にしている。口縁部と体部との境いの外面には接合時の段が残っている。3・4ともに焼成は良好で淡茶色を呈する。

の鋳型と思われるものが出土している。

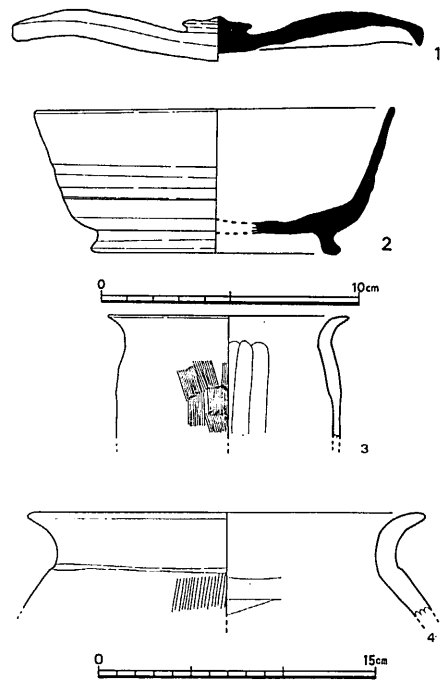
出土遺物

出土した遺物は土器、瓶類、輸入陶磁器および製銅、製鉄関係のものである。これらの遺物のうち土器がまとまって出土した遺構はＳＥ1558およびＳＫ1567だけであるが、前者は10世紀中頃、後者は11世紀前後の一括と考えられ、大宰府出土の土器を考える上で標準資料となり得る良好なものであった。また、ＳＢ1570周辺やＳＸ1571から銅滓や鋳型が出土したが、鋳型の一部が建築関係のものであることは注目される。

ＳＸ1556出土土器（第48図、別表1）

蔵司前面地域を整地する際に台地上から投棄された炭化物や鞴の羽口と共に土師器や須恵器が出土した。

須恵器



第48図　ＳＸ1556出土土器実測図

ＳＢ1560Ａ出土土器（第49図、別表１）

掘立柱建物ＳＢ1560Ａの掘り方および抜き取り穴からわずかではあるが土器が出土した。

掘り方出土

須恵器

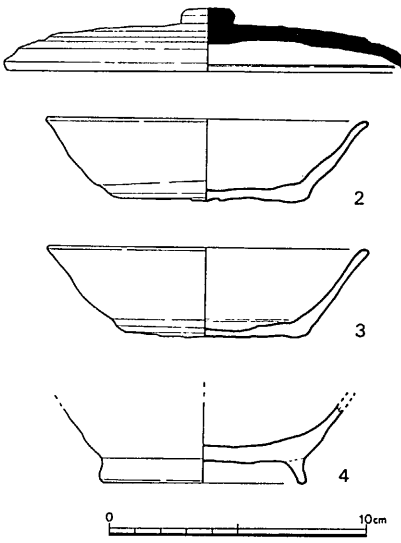
蓋（１）　東北隅柱穴掘り方から出土したもので、口径 15.4cm を測る。天井部は回転ヘラ削り調整を行っている。

抜き取り穴出土

土師器

杯（２・３）　口径12.6cm、器高3.2・3.5cmを測る杯で、外底部はヘラ切り離しのままである。

椀（４）　体部の大部分を欠失しているが、恐らく高台部から直線的に外上方へ延びる器形になるものと考えられる。



第49図　ＳＢ1560Ａ出土土器実測図

ＳＥ1558出土土器（50～53図、別表１、図版35～37）

井戸廃絶時に多量の土器を、少数の鉄製品（小札・鏃）と共に一括して投棄していた。出土した土器は、須恵器（甕）、土師器（杯、皿ａ、皿ｃ、椀、甕）、黒色土器（椀）、青磁（椀）が出土した。

須恵器

甕の破片が出土した。

甕（65）　残存部は全てヨコナデ調整で、叩目はない。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。

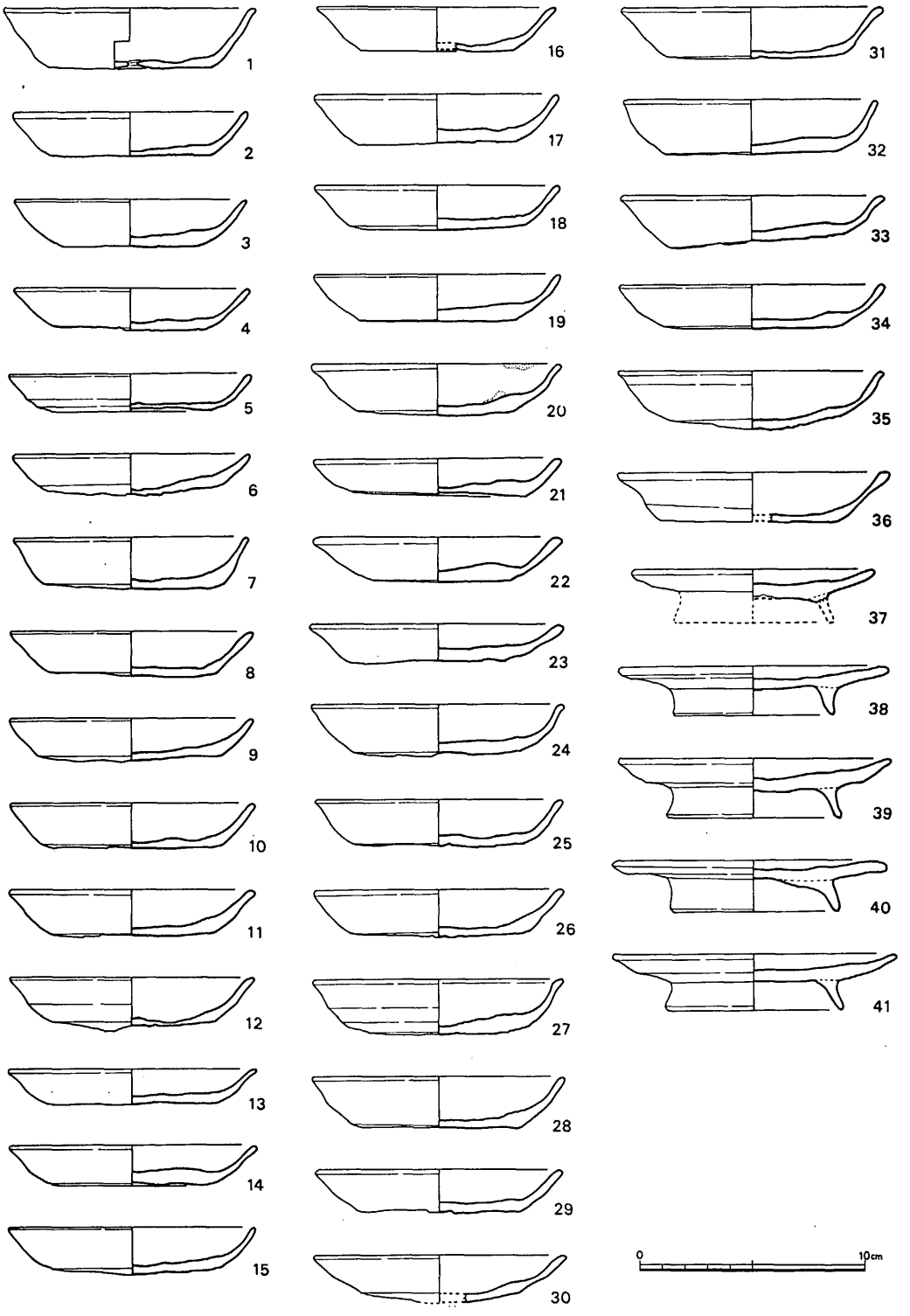
土師器

杯（１）　杯形の土器は１点出土したにすぎない。口径11.2cm、器高2.8cm を測る。底部に焼成後の穿孔がある。

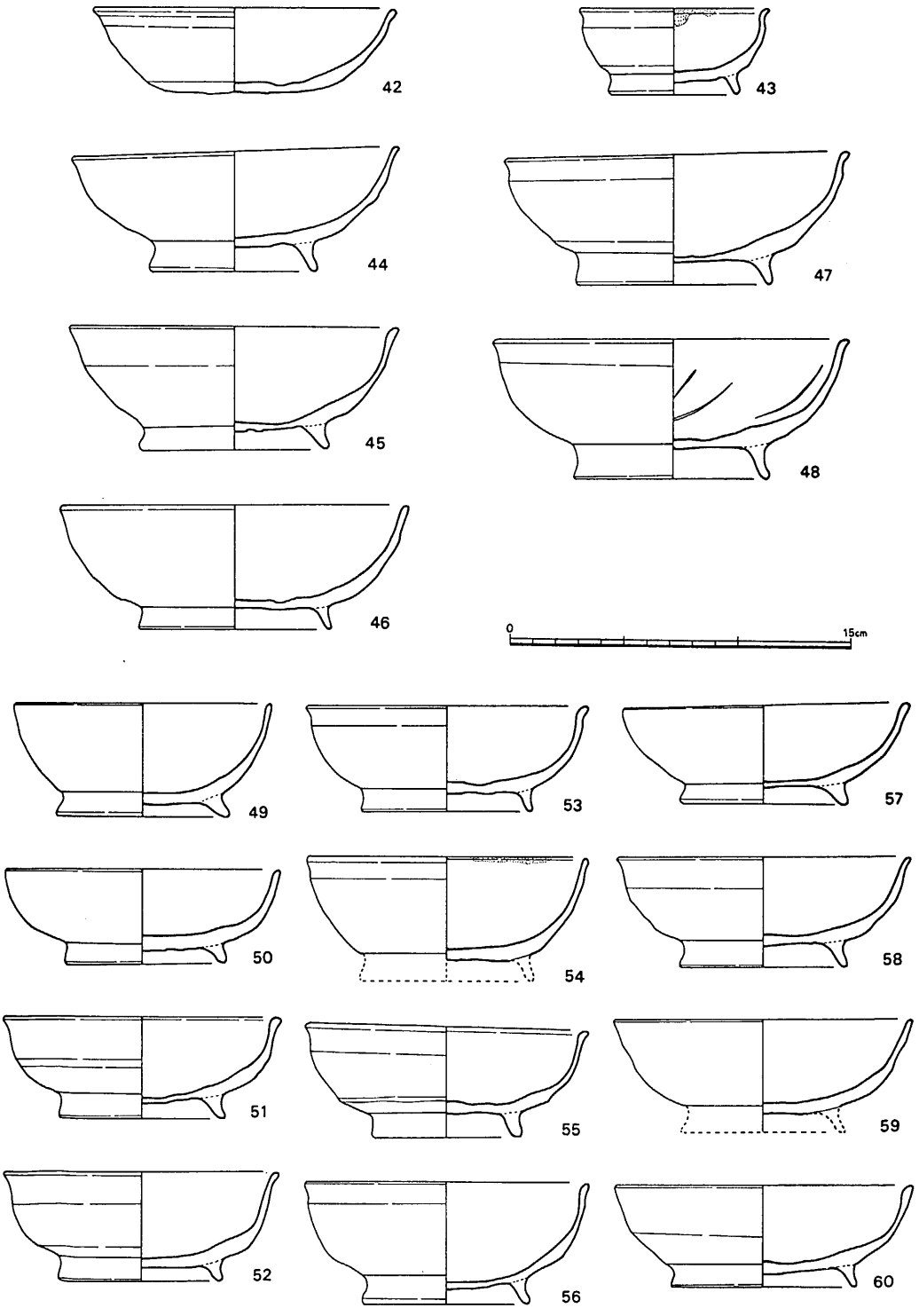
皿ａ（２～36）　口径10.4～12.0cm、器高1.6～2.6cmを測る。20・24には油煙の付着が認められることから灯火器として使用されたことが判る。

皿ｃ（37～41）　口径10.9～12.6cm、器高1.8～2.7cmを測る。

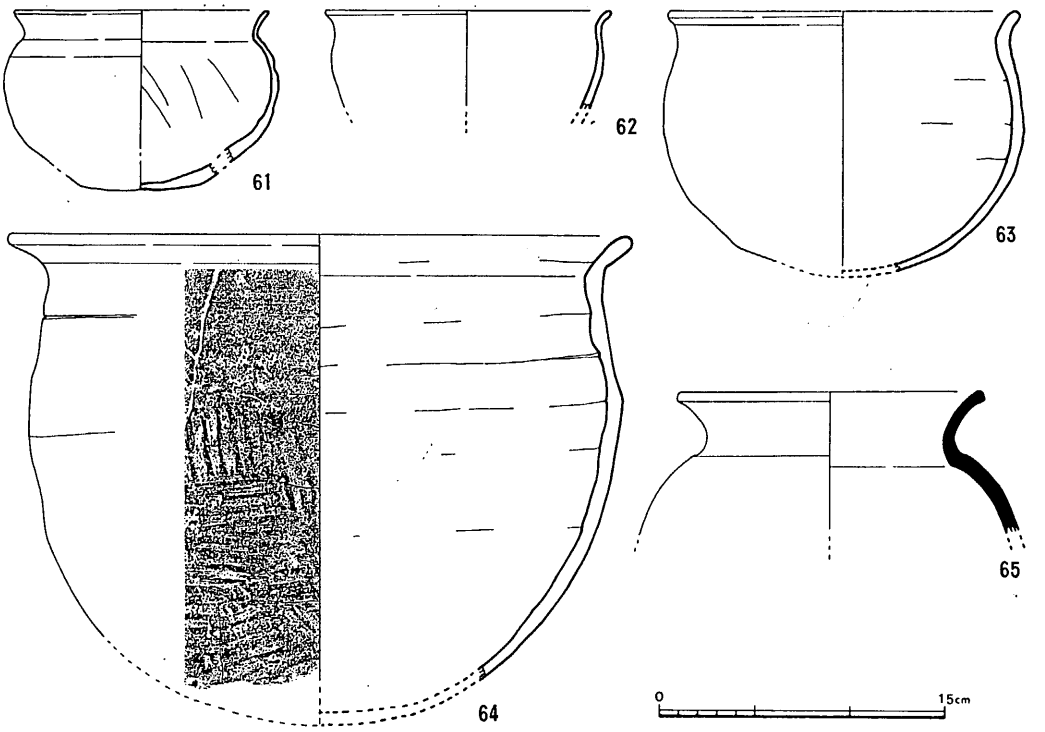
椀（42～60）　無高台と有高台のものが出土したが、圧倒的に後者が多く、前者はわずかである。有高台のものは法量によりＡ・Ｂ・Ｃの三種類に分かれる。Ａは小形のもので、２個体分出土した。43は口径8.4cm、器高3.8cmを測り、灯火器として使用されている。Ｂ（49～60）は口径11.2～13.0cm、器高4.2～5.4cmを測る中形のものである。52～54は灯火器として使用されて



第50図　ＳＥ1558出土土器実測図(1)



第51図　ＳＥ1558出土土器実測図(2)



第52図　ＳＥ1558出土土器実測図(3)

いる。C(44～48)は口径14.5～15.7cmを測る。49の内面にはヘラ状工具のあたりが観察できる。

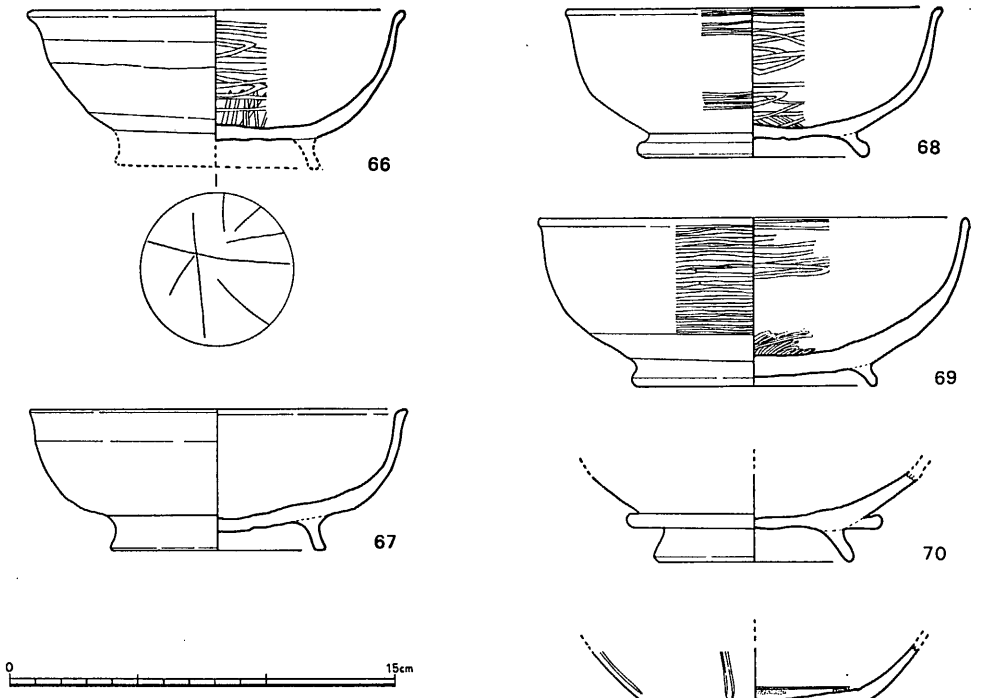
甕（61～64）　大・中・小三種類が出土した。全て外面には媒が付着し、内面には炭化物が付着している。61・62は小形のもので、61は体部内面はヘラ削り、体部外面中位以下は指頭圧痕が乱雑に残り、上半はヨコナデ調整である。62は体部下半を欠失しているが丸底になるものと考えられる。体部内面中位以下はヘラナデ調整、外面下半は２次的火熱のため器面が剝離しており、調整痕は観察困難である。63は中形の甕で、内面に粘土紐の痕跡を良く残している。体部内外面はヘラナデ調整を施している。64は大形のもので、63と同様に粘土紐の痕跡を良く残す。体部内外面中位以上はヨコナデ、内面下位は器面剝離のため調整痕は観察困難である。外面下位は粗い叩目が施されている。

黒色土器

内面のみを燻したＡ類（66・67）と内外面を燻したＢ類（68～70）が出土した。66の外底面にはヘラによる文様が描かれている。70は鍔付のもので、恐らく托にのった椀を表現したものであろう。出土例の少い優品である。

輸入陶磁器

越州窯系青磁椀が１点出土した。



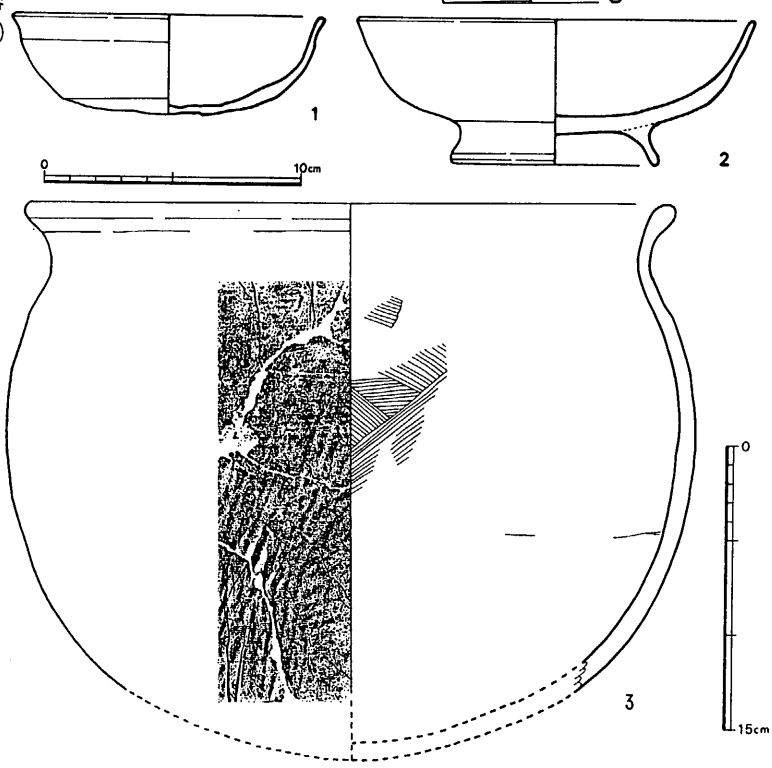
第35図　ＳＥ1558出土土器・陶磁器実測図(4)

椀（71）　高台先端の畳付部を除いて、緑色の釉が全面に施釉されたⅠ－2類の椀である。体部に縦方向の沈線が2本残っている。復原すると6本になると考えられる。胎土は暗灰色を呈する。

ＳＥ1559出土土器

（第54図、別表1）

この井戸から土師器、黒色土器が出土したが、出土数は少く図示できるのはわずかに3点の



第54図　ＳＥ1559出土土器実測図

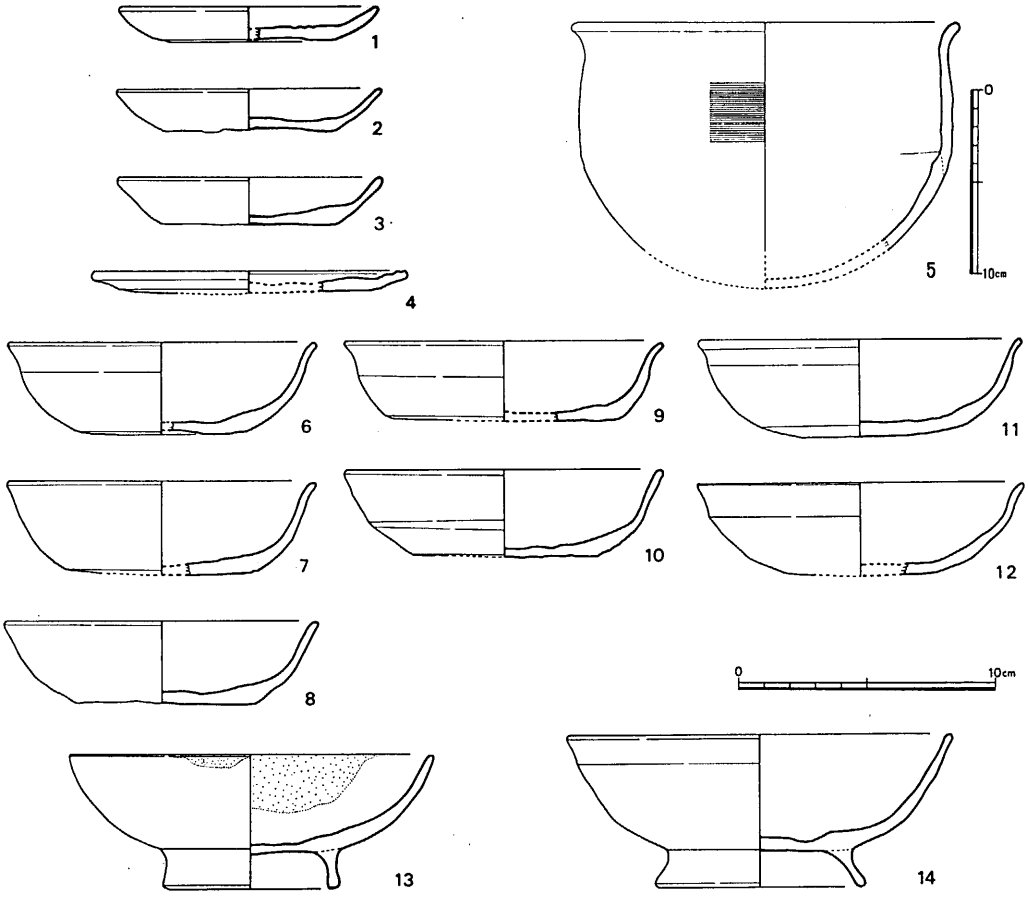
みである。

土師器

椀（1・2）　1は無高台の椀で、口径 12.2cm、器高 3.9cm を測る。外底部には板状圧痕が残っている。2は体部の屈曲部は中位であるが、腰が低い。この腰の低い器形のものは口縁部が屈曲する例は少く、2もまた直口ぎみに延びる。

甕（3）　口径 33.3cm を測る大形の甕で、底部を欠失している。体部上半は横方向の刷毛目調整で、叩目を消しているが、中位以下には粗い叩目が残されている。内面下半は器面剝離のため調整方法が不明であるが、中位より上方には細い刷毛目調整が残っている。体部内面および口縁部外面に粘土紐の痕跡が残る。外面には煤が、内面には炭化物の付着が認められ、煮沸用として使用されたことが知れる。胎土中には砂礫を多く含む。淡茶色を呈し、焼成は良好である。

ＳＫ1567出土土器（第55図、別表１、図版38）



第55図　ＳＫ1567出土土器実測図

炭化物の中から多数の鋳型と共に土器が出土した。出土した主な土器は土師器（皿a、杯、椀、甕）および青磁片である。

土師器

皿a（1～4）　1～3は口径10.2～10.5cm、器高1.7cmを測る通例の小皿であるが、4は口縁部に2条の沈線を巡らすもので、皿とするよりも蓋とした方がより妥当かも知れない。

杯（6～10）　体部中位で屈曲し、口縁部が若干外反するもので、無高台の椀に近似した形を成す。口径12.2～12.6cm、器高3.1～3.7cmを測る。

椀（11～14）　無高台、有高台のものが出土した。13・14ともに体部下半に屈曲部を有し、腰が低い。13は灯火器として使用されている。

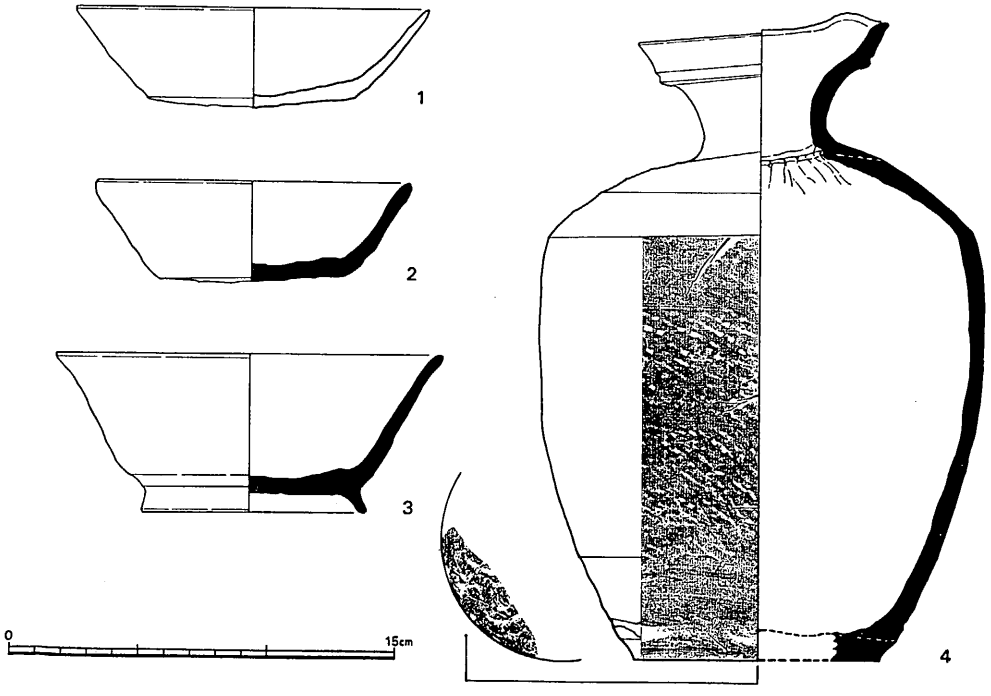
甕（5）　口径21.1cmを測る中形の甕である。口縁部はヨコナデ調整、体部は内外面ともにヘラナデ調整を行い、外面体部中位上半には更に回転刷毛目調整を施している。外面には濃密に煤が付着している。

輸入陶磁器

越州窯系椀が1点出土した。

椀　Ⅰ類の口縁部片が1点出土した。丸味を有する体部と細く若干外反する口縁部とからなり、淡黄緑色の釉が施されている。内外面ともに細い貫入が多く入っている。

SK1574出土土器（第56図、別表1、図版39）



第56図　SK1574出土土器実測図

出土した土器は土師器・須恵器である。

土師器

杯（1）　ほぼ完形に近いもので、内外面の調整については磨滅のため不明である。底部はヘラ切りである。

須恵器

杯（2）　完形で、口径 12.3cm、器高 4.0cm のものである。底部はヘラ切りであり、また墨痕がみられるが、判読出来ない。

椀（3）　体部は直線的にのびるが、口縁部はわずかに外反する。開き気味の高台を底部端に貼付する。胎土はあまり砂粒を含まず、精製されている。

壷（4）　体部および底部を欠失するが、図上復原が可能で、口径 9.8cm、器高 25cm のものである。底部は平底で体部は若干ふくらみ気味である。胴部と肩部の境は明瞭である。口縁部は朝顔状に開き、外面の口縁部と頸部との境には沈線を入れ、明瞭な段を有する。胴部外面には格子の叩き目があり、叩きの後、胴部下位と肩部はヘラケズリする。内面はナデ調整している。底部と胴部および頸部と肩部との境に接合痕がみられる。胎土は砂粒の混入が少なく精製されている。外底には円弧状の叩き目がある。

ＳＸ1561出土土器（第57・58図、別表１、図版40・41）

瓦を多量に含んだこの遺構からは、須恵器、土師器、施釉陶器、輸入陶磁器、石鍋等が出土した。

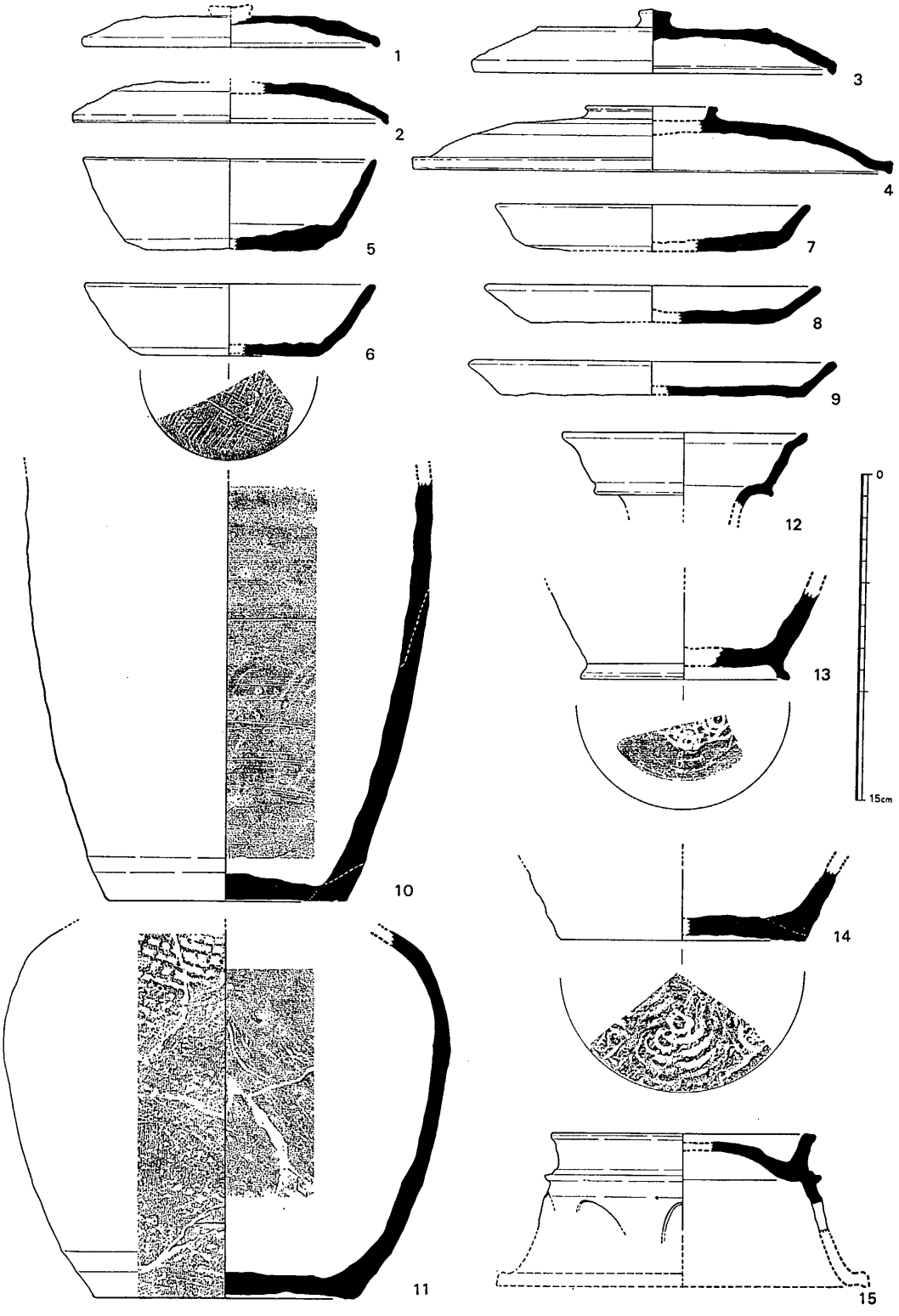
須恵器

蓋（1～4）　4の天井部は回転ヘラ削り調整、1の天井部はヘラナデ調整、2・3はヘラ切り離しのままである。2の内面には墨が付着しており、硯として使用されたものと考えられる。4は縁部が屈曲し、環状の摘が貼付されたもので、胎土、調整、焼成ともに非常に丁寧なつくりのものである。内面に赤色顔料が付着している。

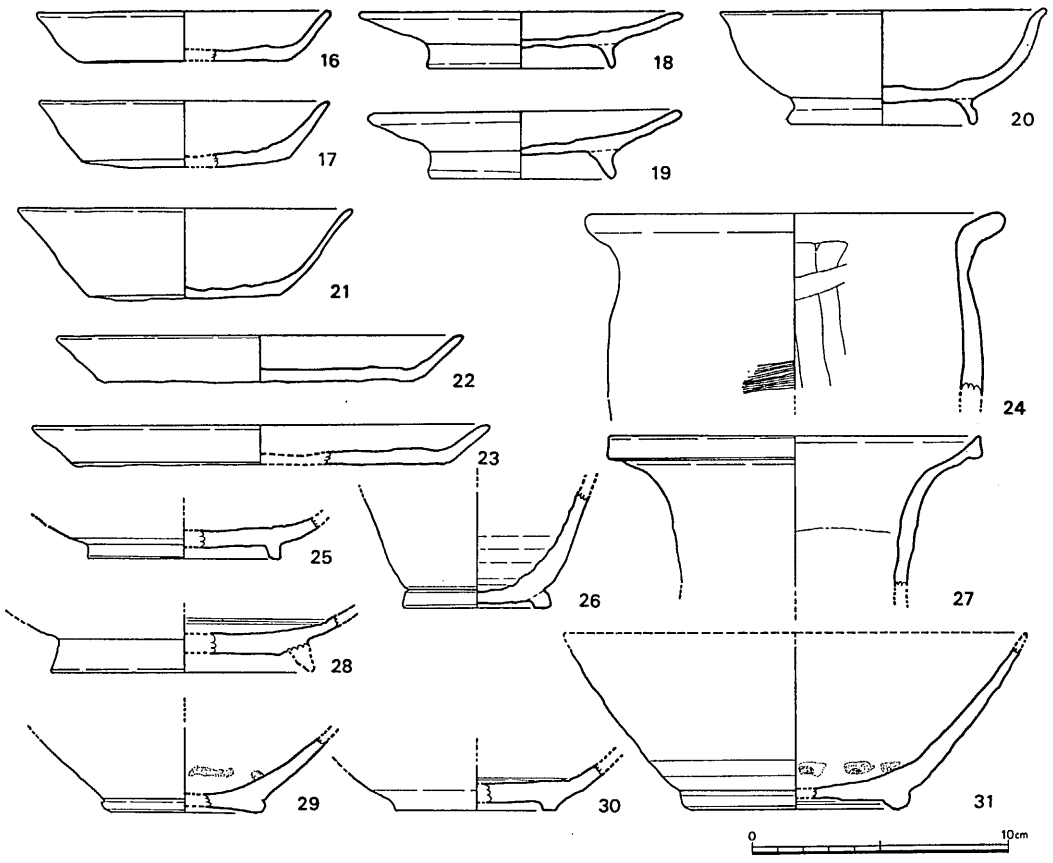
杯（5・6）　5は体部外面に「記」銘の墨跡が見られる。しかし、墨の残りが悪いため判読を困難にしている。6はヘラ状の工具で叩いたような痕跡が残っている。

皿（7～9）　外底部は全てヘラ切り離しのままである。8・9は内面に墨が付着し、器面が滑らかであることから硯として使用されたものと考えられる。

壷（10～14）　10の内面は円弧状の叩き目がヨコナデによって消されながらもわずかに残り、また底部はヘラ削りされているが、わずかに円弧状の叩き目が残っている。11は内面に布を巻いたあて具跡と考えられる布目が残り、外面は格子叩き目調整が施されている。内底面は同心円状の叩き目跡、外底部は乱雑なヘラ削り調整がなされている。12は口縁上部で外反し、頸部と口縁部の境いに稜を有している。13・14の外底部は同心円状の叩き目が残る特異な土器である。14の体部下位内面は刷毛目、外面は不定方向のヘラ削り調整を施している。



第57図　ＳＸ1561出土土器実測図(1)



第58図　ＳＸ1561出土・陶器・陶磁器実測図(2)

硯（15）　周縁よりも、陸部が低く、また陸部と海部の境は不明瞭な円面硯である。脚部に透彫による文様が描かれているが、残存部が少いため透しの形状は明らかでない。

土師器

記述の都合上９世紀後半代以降のもの（Ⅰ）とそれ以前のもの（Ⅱ）に分けて報告する。

Ⅰ

皿ａ（16）　口径11.5cm、器高2.0cmを測る。

皿ｃ（18・19）　口径12.6・12.1cm、器高2.2・2.6cmを測る。

杯（17）　口径11.4cm、器高2.6cmを測る。

椀（20）　口径12.8cm、器高4.4cmを測るもので、口縁部を外反させている。

Ⅱ

皿（21・23）　23は外底面に回転ヘラ削りを施しているが、22は器面磨滅のため調整痕が不明である。

甕（24）　体部外面上位および口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はヘラ削り調整、外面は器面磨滅のため明瞭ではないが、一部に細い刷毛目調整が施されている。

灰釉陶器

椀（25）　外面を回転ヘラ削りし、内面に灰釉を施釉したものである。

壷（26・27）　26は外面体部下位までに施釉したものである。27は口縁部内面上半および端部に施釉されたものである。26・27ともに胎土は精選され、丁寧に仕上げられた優品で、26の釉は一見白磁風に発色している。

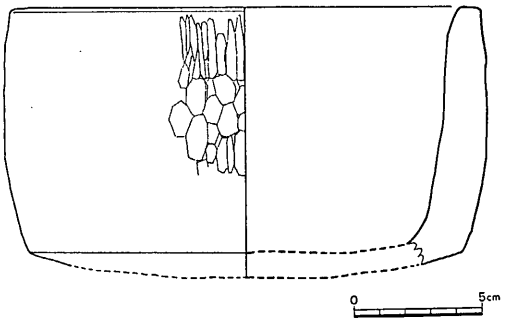
緑釉陶器

椀（28）　高台部を欠失したもので、淡赤色の胎に濃緑色の釉が全面に施されている。外底部に糸切りが残り、ヘラによる陰刻の一部が残っている。

輸入陶磁器

越州窯系青磁が若干数出土した。

椀（29～31）　29は円盤状の底部を有するⅡ－2類の底部片で、内部に施釉された黄色の釉はほとんど剝落している。外底面はヘラ削りにより糸切跡を消している。30は高台畳付部分を露胎する以外は全面に施釉されたⅠ－2類のものである。31は体部下位以下に回転ヘラ削り調整を施し、高台畳付以内を露胎としたものでⅡ－1類に分類される。細い貫入が無数に入る黄緑色の釉が施されている。



第59図　ＳＸ1561出土石鍋実測図

ＳＸ1561出土石製品（第59図）

瓦層から石鍋片が数点出土したが、図示した以外は全て細片である。縦に把手が削り出されたものと考えられるが、残存部にはその痕跡がない。外面はヘラ削り調整、内面はヘラ削り調整の上から磨きを施し器面を密にしている。外面には煤が付着している。

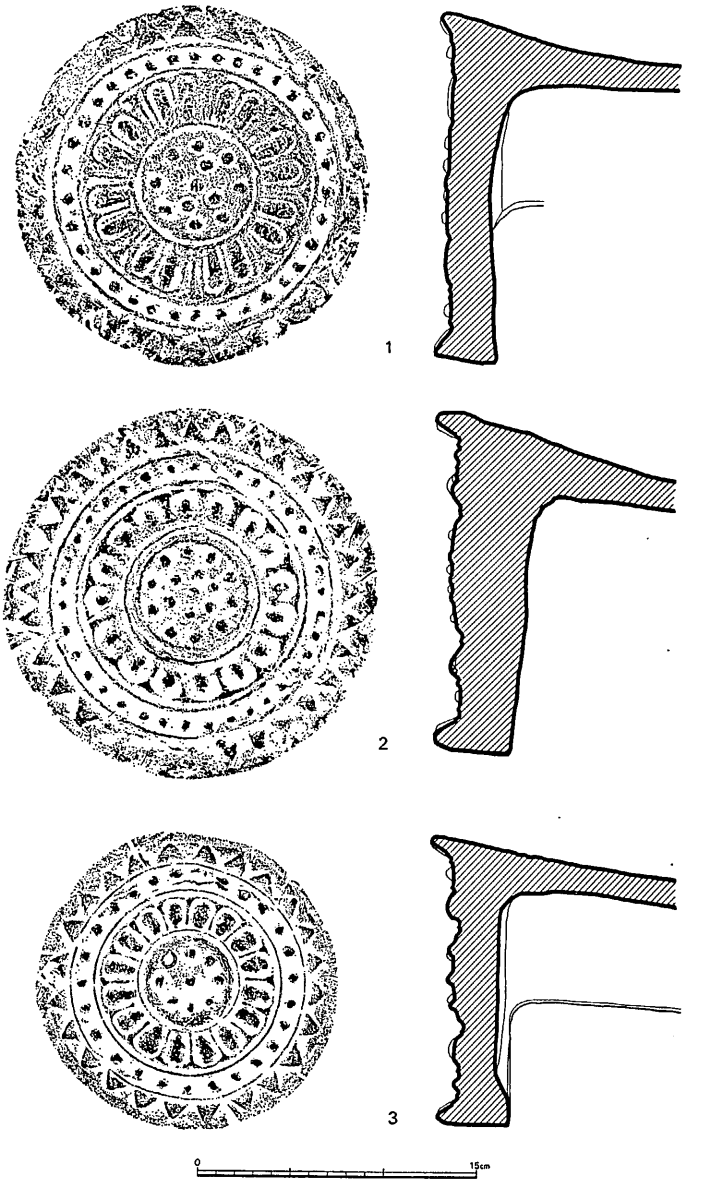
瓦類

この調査で出土した瓦類は、丸瓦・平瓦・軒平瓦のほか若干の鬼瓦・面戸瓦がある。これらは主にＳＸ1561、ＳＸ1572、ＳＫ1580などから出土した。また下層の茶褐色土層から出土した丸瓦・平瓦は、大宰府出土瓦類の中では、最も古期に属すると考えられるもので、ここでは、これらを中心に報告する。

軒丸瓦（第60図、別表２、図版24）

出土点数121点で、11型式14種類に分類できる。内訳は別表２に示した。このうち比較的出土量の多いものは、第14図および第60図に示した鴻臚館式、老司式の系統のものである。第60図－３は大宰府政庁跡では新出型式である。１は老司式でⅡ式に比較して、瓦当面全体が

やや平坦になる。わずかに高い中房に1＋4＋8の蓮子を配しているが、これは鴻臚館式と同一の配置である。弁の肉盛りは薄く、平坦である。外区は内縁に珠文を外縁に凸鋸歯文を配する。2は圏線で囲こまれた一段高い中房に1＋6＋10の蓮子を配する。弁は短く、横幅が広くなり、肉盛りが厚い。間弁が界線状に連続し、やや単弁風に見える。外区は内縁に珠文を外縁には、やや縦長の凸鋸歯文を配する。瓦当厚が他のものと比較して、やや厚い。3は新出型式である。瓦当径が16cmで、やや小振りである。圏線で囲こまれた一段高い中房に1＋8の蓮子を配する。弁の肉盛りは厚く間弁が界線状にのびて弁を囲んでおり単弁風に見える。外区は内縁に珠文を外縁に凸鋸歯文を配する。瓦当裏面の下半部は周縁に沿って一段高くなっており古い要素を有している。丸瓦の取付け位置は高く外区内縁付近にくる。例は杉塚廃寺(註1)、三宅廃寺(註2)、般若寺跡にある。またこれと同系統と思われるものが豊前国分寺、豊前国府から出土している。



第60図　第65-2次調査出土軒丸瓦実測図・拓影

軒平瓦（図版24、別表3）

出土点数85点で10型式12種類に分類できる。このうち第60次調査の項で報告した第15図－1・3が最も多く、この両者で全体の55%を占めている。これらについては詳述を省略する。別表3－2に示した軒平瓦はSB1560Aの柱抜取り跡から検出したもので、内区は左から右へ流れる扁行唐草文で、下外区の凸鋸歯文が内向しているのが特徴である。顎は段顎で、平瓦部凸

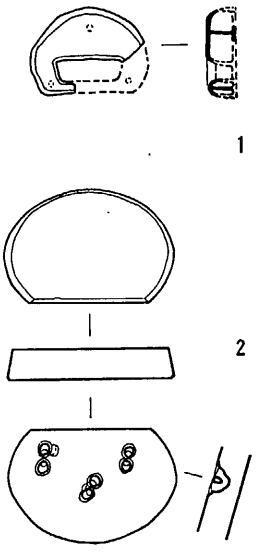
面の叩きは、縄目である。この軒平瓦は共伴した土器から、少くとも9世紀前半ないし、それ以前の年代観が考えられる。

道具瓦（図版43）

面戸瓦1点、鬼瓦1点がある。いずれも破片である。これらは第60次調査出土のものと同じであるので記述については省略する。

帯金具・石帯（第61図、図版38）

1は銅製の丸鞆で楕円形の下辺を直截した形状で、長方形孔を有する。腐蝕が著しく裏金具は一部残存するのみである。表と裏の金具とは鋲留されており、2カ所が確認される。裏金具の長方形孔の有無については不明である。縁は腐植しているが、縦幅1.7cm、横幅2.4cm前後の大きさで、厚さは0.6cmのものと考えられる。長方形孔は縦0.4cm、横約1.2cmである。床土出土のものである。



第61図　帯金具・石帯実測図

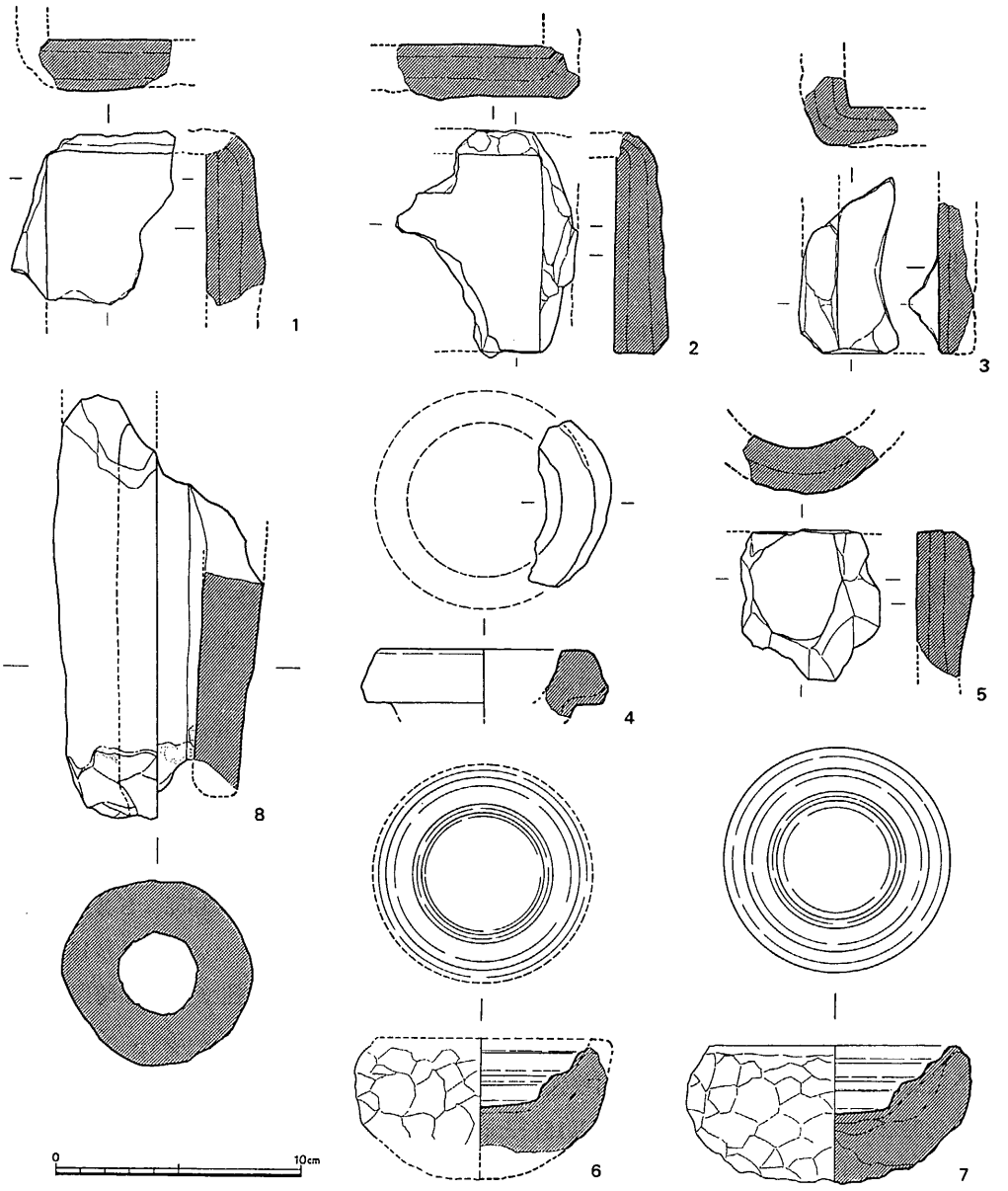
2は石製の丸鞆で、完形である。表面は磨いており、裏面は粗削りのままで、そこには帯への装着のためのかがり穴を3カ所に穿っている。縦幅2.2cm、横幅3.3cm、厚さ0.6cmのものである。磨きのない部分は灰白色を呈する。灰色土層から出土した。

鋳造関係遺物（第62図、図版42）

鋳型や坩堝、鞴羽口等の鋳造に関係する遺物がＳＢ1570の東側の土壙ＳＫ1567・1568、ＳＤ1569、ピットＳＸ1579および遺構面から出土した。

土製鋳型（1～7）　鋳型はかなりの量出土しているが、いずれも小片であるため形状が知れるものは少ない。種類としては少なくとも5種類のものがみられる。1～5はＳＫ1567・1568、ＳＤ1569、6はＳＸ1579、7はＳＢ1570遺構面上から出土したものである。

1～3は鋳型の外型で、同種のものであるが相互に接合はしない。1と2より鋳られたものは、両側と上方が面となり、下方が開口する箱形のもので、2の縦幅は完存しており、これからすると縦幅は8.0cmのものである。横幅については不明である。箱の厚さについては不明であるが、3に側面の立ち上がりが一部残存し、少なくとも1cm以上はあったものと考えられる。これらは凡そ厚さ1.5～2.0cmのもので、鋳面から1cmぐらいは細かい胎土で鋳込みにより、硬く焼きしまって黒変している。外表は砂粒と籾殻を入れた粗い胎土である。4は口縁部片で下部が欠失しているため、形状については不明である。この他に破片が10点余みられるが、いずれも接合しない。これは外面に鋳肌となる仕上げ真土がみられ、これは中型と考えられる。6・7の最上段の径と4の径が近似しているので、これとの関係も考えられるが定かでない。5は小片で他に数点破片がみられる。形状については不明であるが、筒状のものを鋳た



第62図　ＳＫ1567・1568、ＳＤ1569出土鋳型・鞴羽口実測図

外型と考えられる。仕上げ真土は0.5cmのものである。粗真土には砂と籾殻を入れている。6・7は同じ大きさで同種の鋳型の外型である。6は上端部を欠失しているが、7は完形である。いずれも平面形は円形で4段の段を有し、肩は丸味を帯びている。また最下段の底部も若干丸味を帯びている。直径は下から4.6cm、5.4cm、7.2cm、8.4cmを測る。仕上げ真土は0.5cmの厚さである。中真土・粗真土が厚く籾殻と砂を入れている。6・7の製品については

「釦隠し」と考えられる。8は大形の鞴羽口で、基部を欠失する。孔は基部側がやや太くなっている。孔の周囲には模骨様の幅1cmの浅い段が縦方向についている。内側は砂粒と籾殻を入れた粗い胎土で、外側は0.5cmの厚さで細砂を含む精製した粘土をまきつけている。外面の先端部は2次加熱を受けて、灰色に変色し、一部ガラス化している。内面の先端部は黒化し一部に銅滓が付着している。

小結

調査の結果、ここでは掘立柱建物4棟・礎石建物3棟・井戸2基・製銅工房跡・瓦積遺構等を検出したが、これらの遺構は大略3期に分かれる。

第Ⅰ期の遺構はＳＸ1556で、第Ⅰ期の時期に投棄されたものと考えられる。ここから出土した土器は7世紀後半代のものと考えられる。

第Ⅱ期はＳＢ1560Ａ・Ｂ、ＳＢ1565Ａ・Ｂ、ＳＥ1558が造営された時期である。建物の建て替えによってさらに2小期に分けられ、第Ⅱ－1期にはＳＢ1560Aがあり、これはＳＸ1556を切って造られていることから7世紀後半以後に造られたもので、その終りは第Ⅱ－2期にあたるＳＢ1560Bに建て替えられるまでである。その時期は柱の抜き取り穴から出土した遺物が9世紀前半代のもので、その頃に建て替えられたものと考えられる。

ＳＢ1565Ａ・Ｂが第Ⅱ期のどの小期にあたるのかは明瞭でないが、第Ⅱ－1期のＳＢ1560Aと並存した可能性が考えられ、新期のＳＢ1565BはＳＸ1561から切られていることからすると10世紀中頃に廃絶している。ＳＥ1558の廃絶は出土遺物から10世紀中頃に考えられ、その開始期は第Ⅱ－2期の終り頃にあたる。

第Ⅲ期の遺構としてＳＢ1570、ＳＢ1575Ａ・Ｂ、ＳＤ1569、ＳＫ1567・1568、ＳＸ1571・ＳＸ1573、ＳＸ1576がある。これらはＳＸ1561以降に造営ないし構築されたものでＳＢ1570は柱穴およびこれに伴うＳＫ1567・1568、ＳＤ1569から出土した遺物から11世紀前後の時期に考えられる。ＳＸ1576と関連すると考えられるものとして第60次調査の炭層Ⅰがあり、この炭層Ⅰは位置的にＳＸ1576から投棄された可能性がある。これから出土した土器はＳＫ1567・1568、ＳＤ1569と同一型式のものであり、ＳＸ1571と同様にＳＸ1576は11世紀前後の時期に位置付けられる。ＳＸ1576とＳＢ1575Ａ・Ｂが伴うとすれば、この頃に製銅関係の工房がやや大規模に営まれたようである。ＳＸ1573はこれらの工房に関連する施設と云えよう。

註1　筑紫野市教育委員会『杉塚廃寺』筑紫野市文化財調査報告書　第4集　1979

註2　福岡市教育委員会『三宅廃寺』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第50集　1979

Ⅲ　ま　と　め

蔵司前面域の調査は第65次調査をもって全て終了した。そこで、昨年度に調査を実施し、すでにその概要について報告している第54次(註1)調査分を含めてこの地域における遺構・遺物について一応のまとめをしておく。

この地域は平坦な面を成し、また文政3年の『旧跡礎現改之図』には54個の礎石が描かれていることから、この地には礎石建物が整然と配されていたのではないかと考えられていた。調査の結果、中央地域より南半域は大洪水と考えられる大きな流れによって遺構は削り取られ、また北半域中央部は削平が著しく、検出した官衙関係の建物は5棟のみであり、かつまたそのうちの2棟は同位置に建替えられたものであった。しかし、この洪水は出土した遺物から平安時代後期と推知されたため前面地域の終焉を知る手掛りとなった。

1．各期の設定と遺構

前面域は大略3期に大別される。第Ⅰ期は第Ⅱ期の整地が行われるまで、第Ⅱ期は大洪水による南半域の破壊まで、第Ⅲ期は洪水の跡が埋没するまでの時期である。また第Ⅱ期はＳＡ1400が廃止される以前と以後とにより1・2小期に区分できる。各遺構がそれぞれどの期に属するかは、まず土層の上下関係により、次に遺構の重複によって前後関係を決めた。同一面に掘り込まれた遺構はそこから出土する土器を手掛りとした補助的手段を用いた。

各期毎の遺構は第1表に示したとおりである。

第Ⅰ期

湿地帯であったため、遺構はわずかで、導水管と考えられるＳＸ1404と性格不明なＳＸ1406のみである。

この期に属する遺構は主として台地上に造営されたと考えられる。このことは前面地域の整地層中に製鉄製銅関係の炭化物や滓、鞴、坩堝が含まれ、また漆関係の遺物も出土し、更に材木の削屑が多量に出土していることから知れる。

第Ⅱ期

第Ⅱ－1期

整地層上に、区画施設ＳＡ1400、ＳＡ1410Aを築造し、建物ＳＢ1560Aを造営した時期である。

ＳＡ1400は南側が破壊されていたため、基壇幅を直接知り得ないが、暗渠施設ＳＸ1385・1390・1515および北側雨落溝ＳＤ1405からある程度復原できる。ＳＸ1390の全長は約4m、その北端からＳＤ1405の肩までは約1.5mを測る。南側部分も同様な構造であったとすると、幅

Ⅰ　期	Ⅱ　期		Ⅲ　期
	1	2	
ＳＸ　1404	ＳＢ　1560Ａ	ＳＢ　1500	ＳＢ　1570
ＳＸ　1406	ＳＡ　1400	ＳＢ　1560Ｂ	ＳＢ　1575Ａ・Ｂ
	ＳＡ　1410Ａ	ＳＡ　1410Ｂ	ＳＥ　1387
	ＳＤ　1405	ＳＥ　1558	ＳＥ　1559
	ＳＤ　1550Ａ	ＳＫ　1392	ＳＫ　1388
	ＳＤ　1555Ａ	ＳＫ　1510	ＳＫ　1567
	ＳＸ　1385	ＳＫ　1574	ＳＫ　1568
	ＳＸ　1390	ＳＤ　1401	ＳＤ　1395
	ＳＸ　1515	ＳＤ　1505	ＳＤ　1506
	ＳＸ　1554	ＳＤ　1550Ｂ	ＳＤ　1507
		ＳＤ　1552	ＳＤ　1508
		ＳＤ　1555Ｂ	ＳＤ　1513
		ＳＸ　1520	ＳＤ　1514
	ＳＢ　1565Ａ・Ｂ		ＳＤ　1569
	ＳＤ　1562Ａ・Ｂ		ＳＸ　1386
	ＳＤ　1563		ＳＸ　1501
			ＳＸ　1571
			ＳＸ　1573
			ＳＸ　1576

第１表　主要遺構編年表

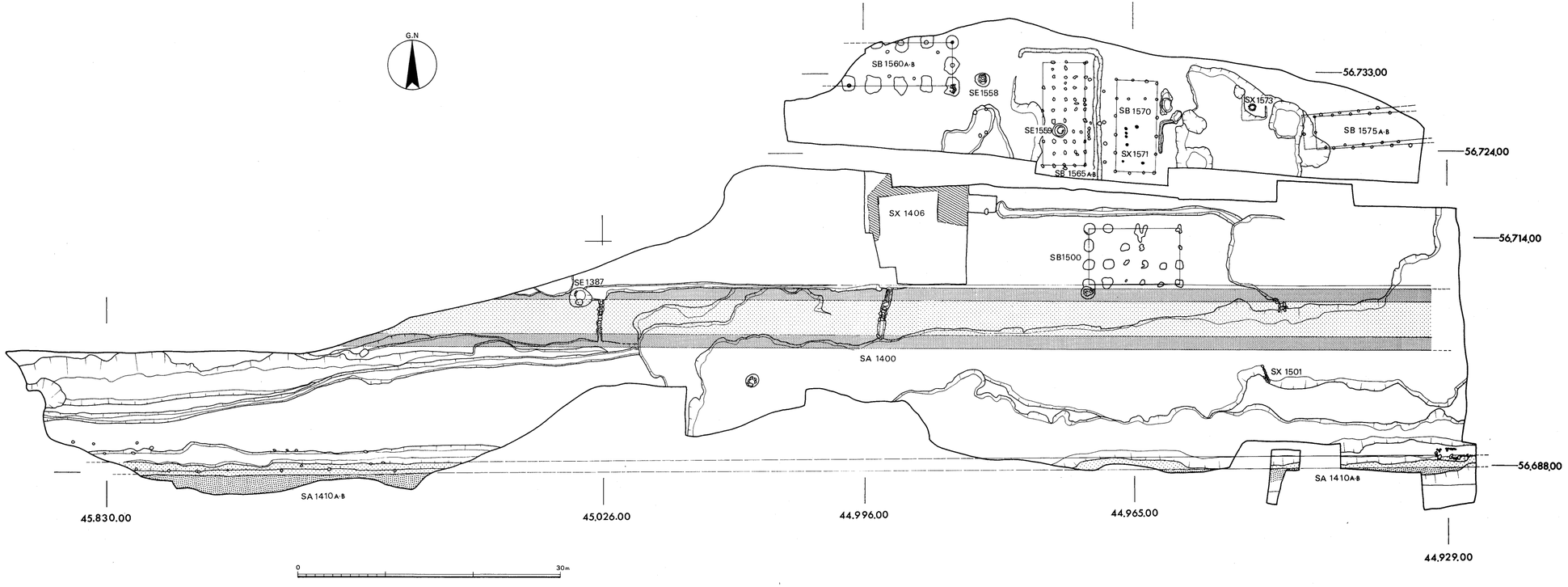
約７mの基壇を積上げ、それと併行し、版築上位中央部に幅約４mの石組暗渠を設置したことになる。また、石組の北端を三者とも揃えていることを重視すると、築地基壇は二重になっていた可能性を指摘できる。つまり幅約７mの基壇上に、幅約４mの上成基壇を構築し、その上に本体を築いた姿が想定できる。このように考えると下成基壇の溝は開渠でも暗渠でも良いことになり、ＳＸ1385で木樋が使用され、またＳＸ1390の北側部分の面が乱れていることも理解できる。

ＳＡ1410Ａは第60次調査検出分（東側部）と第54・65－１次調査分（西側部）を含めて東西約160mにわたって検出したが、基壇は東側部と西側部では若干の相違が認められた。西側部ではＡ・Ｂ２期に大別され、更にＡはａ・ｂの２小期に分かれ、基壇犬走りはａ期では２段になるが、東側部分ではそれらの痕跡は認められなかった。しかし、東側部と西側部の築地は基壇位置・方向および本体位置が完全に一致することから一連のものであることは疑いない。

この期に属する唯一の建物であるＳＢ1560Ａは一部私有地内に延びているため完掘できなかった。検出したのは２間×４間であるが、恐らくは２間×５間程度の建物になると考えられる。

第Ⅱ－２期

この期はＳＡ1400が廃絶され、礎石建物が造営された時期で、この期の終り頃に井戸が出現



第63図　蔵司前地域遺構配置図

する。

ＳＢ1500はその掘り方がＳＡ1400の雨落ち溝の位置と一部重複することからこの期に属することが判った。3間×5間の総柱の礎石建物で、桁行、梁行ともに7尺を測る。この規格の建物は大野城の礎石建物群とまったく同一であることは注目される。

ＳＢ1560ＢはＳＢ1560Ａを建替えたもので、掘立柱建物を礎石建物としている。

ＳＢ1565Ａ・Ｂは総柱の礎石建物である。層位の関係および出土遺物から第Ⅱ期に属するのは明らかであるが、1・2期どちらに属するか不明であった。ここで2小期に入れたのは、第Ⅱ－2期に礎石建物が2棟あり、掘立柱建物がないという消極的な状況理由からである。しかし、第Ⅱ－1期にＳＢ1565Ａが一部入いるかも知れない。ＳＢ1565Ａは部分的に礎石が残るのみで、またＳＡ1565Ｂ造営時に動かされたものもあり、建物を充分に復原することはできなかった。ＳＡ1565Ｂは桁行柱列のうち中央列が他の柱列と同一方向を取らずに東に振っているため、桁行が不揃いになっいる。一方、梁行は方向を全て揃えており、桁行方向よりも梁行方向に重点を置いた建物構造であることが判る。

ＳＡ1410Ｂは東側部では基壇改修が行われたと考えられ、多量に瓦を含んだ階段ＳＸ1520と同一作業による乱石積の基壇化粧がなされている。しかし、西側部では基壇化粧はなかった。

ＳＥ1558はこの期の最後頃につくられたもので、多くの土器が一括して投棄されていた。このＳＥ1558はその位置からＳＢ1560Ｂに伴うものと考えられ、この建物の存続を考える上で非常に参考になると考えられる。

第III期

この期は洪水による破壊の後になるため、遺構も溝（自然流路）がもっとも多い。流路になっていない北半域では製銅工房関係の遺構がつくられ、また井戸や井戸状の遺構も構築されている。しかし、第Ⅱ期で造営されたような官衙建物はこの期には廃絶しており、またＳＡ1410Ｂも洪水により破壊され、再建されていないようであり、官衙的役割を終えた時期といえる。

2．出土遺物からみた各期の年代

第Ⅰ～Ⅲ期まで造営された蔵司前面域はかなりの期間使用されていたようで、出土した遺物も非常に多い。ここでは、遺構の存続年代を考える上で手掛りとなる遺構・層位出土の遺物を中心として、各期の年代を求めることにする。

第Ⅰ期の整地層から出土した遺物は大宰府政庁第Ⅰ期の遺物と同型式のものが大半を占め、大宰府政庁第Ⅱ期のものは出土しなかった。このことから大宰府政庁第Ⅰ期の時期に相当するかとも考えられるが、第Ⅱ－1期の中心建物と考えられるＳＢ1560Ａの建設時期との関係が問題となる。このＳＢ1560Ａの抜き取り穴から出土した土器はＳＥ400段階のもの[註2]であり、9世紀前半代と考えられ、掘立柱建物の耐用年数を考えると整地の年代と大きな矛盾が生じてく

る。しかし、整地層中から出土した遺物は7世紀後半代から8世紀初頭頃か、それ以前の遺物だけであったことからここでは一応第Ⅰ期を8世紀前半代までとしたい。このように結論すると、第Ⅱ期の最初期にはＳＡ1400、1410Aのみで建物は建設されず、第Ⅱ－1期後半にようやくＳＢ1560Aがつくられたことになる。つまり、前面域の最初の役割りは台地上の施設の区画としてＳＡ1400が設置されたことになる。次に第Ⅱ－2期の造営開始はＳＡ1400を切って掘り込まれたＳＫ1510出土遺物が手掛りとなる。このＳＫ1510からは多量の瓦と共にかなりの数の土器が出土した。これらの瓦や土器は8世紀後半頃から9世紀前半代のものであった(註3)。このことから、第Ⅱ－2期の造営はその頃に年代を求めることができる。次に第Ⅱ－2期の終りを示す遺構はＳＢ1565Bを切るＳＸ1561、ＳＥ1559および遺構面上を流れるＳＤ1506がある。ＳＸ1561は多量の瓦と共に多数の土器が出土しており、その中で最も新しいものはＳＥ1558と同一時期のもので、10世紀中頃(註4)と考えられる。またＳＥ1559およびＳＤ1506はＳＥ1558よりも一型式遅れた土器群を出土している。このＳＤ1506は南半域を大きく削り取る洪水があった際に北半域の東北部上を破壊した溝と思われ埋土は砂のみであった。以上のＳＸ1561、ＳＥ1559、ＳＤ1506の年代から第Ⅱ期の終りは11世紀前後と考えられる。このＳＤ1506の時期に接するようにして製銅工房関係の遺構ＳＢ1570、ＳＸ1571・1576が営まれている。この製銅関係の遺物は灰色砂質土層Ⅱの上面に北から南へ投棄したような状態で発見（第60次調査炭層Ⅰ・Ⅱ）されたことから、製銅工房関係の遺構が存続していた時期には南半域は大きく削り取られていたことが判る。製銅工房関係の遺構を最後とし、この地の南半域に砂礫を堆積していくこととなり、この洪水の痕跡も12世紀初頭には完全に埋没し、現在の姿に近くなったと思われる。

3．築地の方位とその設置時期

1節において、各遺構の概要を総括し、2節では層位・出土遺物からみた各期の年代について述べてきたが、ここでは区画施設が若干方位を異にしているので、そのことについてまとめておく。ここで述べる方位は国土法第Ⅱ座標系を基準とした。

ＳＡ1400はＳＸ1390とＳＸ1515の北端部を結ぶと西側では北へ35′4″、ＳＡ1410は築地本体の方向が西側では北へ8′43″を測り、両者には26′21″のずれがある。一方層位および出土遺物から両者の設置時期に差があるのかどうか明らかでなかった。しかし、両者には方位のずれがあることから、同じ第Ⅱ－1期に属しても同一計画性のもとに構築されたかどうか疑問が生じ、検討しておく必要がある。

第2節で述べたように第Ⅱ期の開始は政庁Ⅱ期とあまり隔らない時期が考えられることから政庁の中軸線と南門から延びる築地方向を検討素材とする。

政庁中軸線（南門と正殿の心心を結ぶ線）は北側で東へ34′24″、南門から延びる南面築地は西側で北へ29′16″振っている。両者とも同一計画のもとにつくられた基壇であり、5′8″の差

は地業の誤差と考えられる。この数値とＳＡ1400とＳＡ1410を比較するとＳＡ1400は極めて近似した方向を有していることが判る。このことから政庁がいわゆる朝堂院形式に造営された第Ⅱ期の諸施設と同一計画のもとにＳＡ1400がつくられた可能性が強くなる。同一計画のもとにつくられたとすれば、このＳＡ1400は蔵司を画する築地と考えられることから、蔵司の台地上にも、第Ⅱ－１期には整備された諸施設が設置されたものと思われる。

方位を重視して考えるとＳＡ1410はＳＡ1400と別の計画で設置されたことになる。また、ＳＡ1400とＳＡ1410は時期差があるにしても同時併存した可能性は出土遺物から十分に考えられ、ＳＡ1410は別の性格を持つ施設である可能性がある。別の役割りを有するものとすれば、広義の政庁域を画する大垣的な施設かと考えられる。ＳＡ1410が大垣的な施設とすれば、広義の政庁域が東西８町にわたるとする意見(註５)もあり、広い範囲にわたる調査が必要であることから、今後の調査結果をまって検討すべきであり、問題を提起するに留めたい。

註１．九州歴史資料館『大宰府史跡』昭和53年度発掘調査概報1979

註２．横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集２』1976
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』1978
をもとにして以下年代を求めるが、後者では前者の年代観を若干変更しているので、主として後者による。

註３．出土した杯・皿のうちもっとも新しいものはＳＥ400段階のものである。

註４．註１論文のＳＫ674段階のものである。またＳＫ674よりも今回検出したＳＥ1558の方が、より豊富な量と器形を出土した。

註５．石松好雄「大宰府政庁の庁域について」『九州歴史資料館研究論集３』1977

別　　表

別表1

挿図番号	番　号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
SK1510(第60次調査)								
		須恵器　杯						
9	1	12.4	3.7	6.2	○		×	×
	2	13.2	3.6	9.2	○		○	×
	3	12.8	4.8	8.4	○			
	4	16.2	6.5	9.4	○		○	×
		壺						
	5		(26.4)	11.1				
	7	11.2						
		甕						
	8	24.6						
		土師器　杯						
10	9	16.2	(4.1)	8.3	○		○	
	10	16.2	3.9	8.0	○			
	11	15.3	4.6	8.8	○			
		皿						
	12	18.1	1.7	13.0	(○)			
		緑釉陶器　椀						
	13	16.2	5.5	7.3				
SD1507								
		土師器　皿a						
11	1	10.0	1.4	8.2	○		○	
SD1508								
		土師器　皿a						
11	2	9.1	1.3	7.8	○		○	○
	3	9.4	1.7	6.5	○		○	○
	4	10.3	1.4	7.0	○			○
		皿c						
	5	12.8	2.8	7.7	○		○	
		椀						
	6	14.1	5.3	8.1	(○)		○	×
SD1506								
		土師器　皿a						
11	7	11.4	2.0	8.8	○		○	○
		皿c						
	8	13.0	2.1	7.6	○			○
	9	13.3	2.9	8.7	○			×
		椀						
	10	12.2	5.0	7.4			○	×
	11	13.7	4.6	7.4			○	

挿図番号	番　号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
炭層 I								
		土師器　皿 a						
11	13	10.4	1.8	7.5	○		○	○
	14	10.6	2.0	7.3	○		○	×
	15	10.9	2.0	7.9	○		○	×
		杯						
	16	12.4	2.5	7.5	○		○	×
	17	12.9	3.8	8.0	○		○	(○)
		椀						
	18	14.8	5.6	9.1	○			
炭層 II								
		土師器　皿 a						
11	20	9.8	1.9	6.6	○		○	○
	21	11.0	1.4	7.8	○			×
		皿 c						
	22	10.3	2.3		○		○	○
	23	11.4	2.2	8.0	○			○
		無高台椀						
	24	13.7	3.9		○		○	
		椀						
	25	13.2	6.2	8.0			○	×
黄灰色土層								
		土師器　皿 c						
11	26	11.4	2.4	7.3	○			×
	27	11.5	2.5	6.7	○			
	28	12.0	2.5	7.4	○		○	
		椀						
	29	12.1	5.3	7.3				×
		脚付皿						
	30	12.7	3.6		○			×
整地層中・下								
		須恵器　蓋						
6	1	13.2	2.6					
	2	14.2	3.0					
	3	18.3						
		杯						
	4	14.1	4.7	7.7	○		○	×
		高台付皿						
	5	17.9						
		椀						
	6	13.0	7.7					

挿図番号	番　号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
平瓶								
6	7	4.5	10.7	4.9				
	9	10.7						
壺								
	11	8.4						
鉢								
7	21	45.2						
	22	40.6						
甕								
	23	25.2						
	24	22.8	34.0					
土師器　杯								
	14	10.6	(2.9)					
Ⅲ								
	15	15.9						
鉢								
	16	17.8						
甕								
	17	13.4	17.0					
	19	22.0						
ＳＥ1545(第63次調査)								
土師器　Ⅲa								
23	1	8.3	1.0	7.6		○	○	×
	2	8.2	1.3	7.1		○	○	○
Ⅲc								
	3	9.6	2.5	6.2			○	×
杯a								
	4	11.7	2.0	7.7		○	○	×
	5	13.4	3.2	10.1		○	○	○
腐植土層								
土師器　Ⅲa								
23	6	8.4	1.3	6.8		○	○	○
	7	9.0	1.4	7.0		○	○	○
杯a								
	8	13.4	2.4	8.8		○	○	○
	9	13.9	2.6	9.5		○	○	○
	10	12.9	2.3	9.0		○	○	○
炭層								
土師器　Ⅲa								
23	11	8.6	0.9	7.0		○	○	○
	12	8.9	0.9	6.9		○	○	○
	13	8.6	1.4	6.1		○	○	○

挿図番号	番　号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
23	14	8.8	1.3	6.9		○	○	○
	15	9.0	1.2	7.5		○	○	○
	16	9.0	1.2	7.4		○	○	○
		杯 a						
	17	12.5	2.3	8.7		○	○	○
	18	12.6	2.6	7.6		○	○	○
	19	13.0	2.2	9.3		○	○	○
	20	13.4	2.4	8.9		○	○	○
	21	13.5	2.8	8.2		○	○	○
	22	13.5	3.3	8.7		○	○	○
	23	13.6	2.7	8.4		○	○	×
	24	13.7	3.2	9.7		○	○	○
	25	14.2	2.7	10.8		○	○	○
黒色粘土層								
		土師器　皿 a						
23	26	9.2	1.0	7.7		○	○	○
		杯 a						
	27	13.4	2.8	8.8		○	○	○
暗灰色粘土層								
		土師器　皿 a						
23	29	8.5	1.2	6.0		○	○	○
	30	9.0	1.3	7.6		○	○	○
	31	9.2	1.4	6.2		○	○	○
		杯 a						
	32	13.2	3.0	7.4		○	×	×
		土鍋						
24	33	29.3						
	34	40.4	19.3					
第64次調査								
		須恵器　蓋						
28	1	12.9	1.2					
	2	14.6	1.3					
		甕						
29	13	37.1						
		土師器　杯						
28	3	14.4	3.2	8.3	○		○	×
		皿						
	8	16.0	1.8	12.4	○		○	×
	9	17.7	1.7	14.4	○			×
		皿 c						
	10	15.6	3.9	9.0	○			×

挿図番号	番　号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
ＳＤ1555Ａ(第65－１次調査)								
		須恵器　杯						
37	1	13.0	3.3	7.6				
	2	20.0	4.6	14.2	○		○	×
		皿						
	3	18.0	2.6	14.6	(○)		○	×
		壺						
	4	11.3						
		土師器　杯						
	5	13.2	3.2	8.2	(○)		(○)	×
	6	13.7	3.2	7.7	○		○	×
	7	14.9	3.5	7.0	○		○	×
茶灰色土層								
		須恵器　壺						
37	8	10.4						
		土師器　杯						
	9	23.6	3.3	7.8	○		(○)	×
		青磁　椀						
	11	12.8						
	12	16.0	6.1	6.1				
	13	20.0						
灰茶色土層								
		土師器　椀						
37	10	15.7	6.5	8.4				
整地層								
		須恵器　杯蓋						
34	1	13.2	(4.2)					
	2	13.2	4.4					
	3	13.9	4.5					
	4	14.2	4.0					
	5	14.2	4.3					
	6	13.8	3.9					
	7	14.3	(3.9)					
	8	14.3	4.6					
		杯身						
	9	11.6	3.8					
	10	11.7	(4.2)					
	11	14.4	4.3					
	12	13.3	4.6					
	13	13.4	4.7					

挿図番号	番　号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
坩蓋								
34	14	11.6	3.7					
高杯								
	16	11.5	15.5	10.8				
甕								
35	27	21.1						
壺								
	28	13.8						
土師器　壺								
	17	10.4						
	18	10.4	(24.9)					
	20	16.1	(26.9)					
甕								
	21	18.4	33.0					
鉢								
	22	24.9	17.5					
	23	26.5	(10.6)					
甑								
	24	25.2	32.0	8.3				
	25	26.3	28.7	9.7				
	26	28.8	20.8	6.7				
SB1560A(第65－2次調査)								
須恵器　蓋								
49	1	15.4	2.5					
土師器　杯								
	2	12.6	3.2	7.2	○		○	×
	3	12.6	3.5	7.0	○		○	×
SE1558								
須恵器　甕								
52	65	15.9						
土師器　杯								
50	1	11.2	2.5	7.3	○		×	×
皿a								
	2	10.4	2.0	7.1	○		(○)	○
	3	10.4	2.1	6.3	○		○	○
	4	10.5	1.8	6.8	○		○	○
	5	10.9	1.7	7.0	○		○	○
	6	10.7	1.8	8.0	○		○	○
	7	10.7	2.2	7.8	○		○	○
	8	10.9	1.9	7.3	○		○	○
	9	10.9	1.9	7.8	○			×
	10	10.9	2.0	8.0	○			○
	11	10.9	2.1	7.3	○		○	○

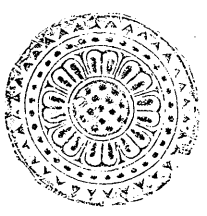
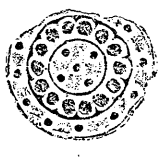
挿図番号	番　号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
50	12	10.9	2.2	7.1	○		○	○
	13	11.0	1.6	7.5	○			×
	14	11.0	1.9	7.5	○			○
	15	11.0	1.9	7.5	○		○	(○)
	16	11.0	2.0	6.8	○		○	○
	17	11.0	2.0	7.0	○			○
	18	11.0	2.0	7.7	○		○	○
	19	11.0	2.1	7.0	○		○	×
	20	11.0	2.3	7.4	○		○	×
	21	11.1	1.6	7.6	○		○	○
	22	11.1	2.1	6.1	○			×
	23	11.2	1.8	7.0	○			○
	24	11.2	2.1	7.1	○		○	○
	25	11.2	2.1	7.5	○		○	○
	26	11.2	2.1	8.0	○			○
	27	11.2	2.5	6.2	○		○	×
	28	11.2	2.3	7.7	○		○	○
	29	11.3	1.9	7.3	○		○	○
	30	11.3	2.1	7.1	○		○	×
	31	11.6	2.3	7.7	○		○	○
	32	11.7	2.4	7.7	○		○	○
	33	11.8	2.0	7.3	○			×
	34	11.8	2.0	7.9	○		○	
	35	11.9	2.6	7.8	○		○	○
	36	12.0	2.2	7.8			○	○
皿c								
	37	10.9						
	38	12.0	2.0	7.1	○		○	○
	39	12.0	2.7	7.6	○		○	×
	40	12.3	1.8	7.6	○		○	×
	41	12.6	2.5	9.9	○			×
無高台椀								
51	42	13.3	3.8	8.6	○			○
椀								
	43	8.4	3.8	5.8	○		○	×
	44	14.5	5.3	7.5	○			×
	45	14.5	5.5	8.3	○			○
	46	15.3	5.5	8.5	○		○	○
	47	15.1	5.8	8.7	○		○	×
	48	15.7	6.1	8.7	○		○	○
	49	11.2	5.0	7.6	○		(○)	×
	50	12.0	4.2	7.5	○		(○)	○
	51	12.0	4.5	7.2	○		○	○
	52	12.0	4.8	7.2	○			⊙
	53	12.4	4.7	7.5	○		○	×

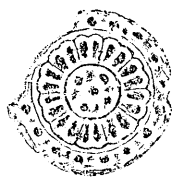
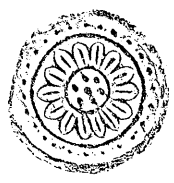
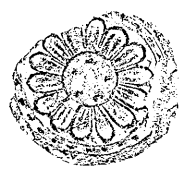
挿図番号	番　号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
51	54	12.2					(○)	○
	55	12.4	4.9	6.6	○		○	×
	56	12.6	5.4	7.4	○		○	○
	57	12.8	4.4	7.4				×
	58	12.9	4.8	7.4	○			○
	59	13.0			○		○	○
	60	13.0	4.5	8.1	○		○	×
甕								
52	61	13.1	(9.3)					
	62	14.8						
	63	18.3	(13.7)					
	64	32.5	(25.4)					
黒色土器A　椀								
53	66	14.8						
	67	14.7	5.6	8.3	○		○	○
黒色土器B　椀								
	68	14.6	5.9	9.0	○		○	○
	69	16.7	6.6	9.5				
SE1559								
土師器　無高台椀								
54	1	12.1	3.9	8.2	○		○	○
椀								
	2	15.5	5.7	8.0				
甕								
	3	34.0	(29.0)					
SK1567								
土師器　皿a								
55	1	10.2	1.4	6.9	○			×
	2	10.4	1.6	6.6	○		○	○
	3	10.4	1.8	6.8	○		○	○
	4	12.4	(0.9)					
杯								
	6	12.2	3.7	6.7	○			×
	7	12.2	(3.7)	7.6	○			×
	8	12.4	3.2	7.1	○		○	×
	9	12.5	(3.2)	9.3	○			×
	10	12.6	3.5	7.3	○		○	
無高台椀								
	11	12.7	3.8	8.2	○			×
	12	12.8	(3.7)	6.9	○			○
椀								
	13	14.2	5.3	6.9	○		○	×
	14	15.1	6.0	8.2	○		○	×

挿図番号	番　号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
		甕						
55	5	21.1	(14.5)					
SK1574								
		須恵器　杯						
56	2	12.3	4.0	7.0	○		○	×
		椀						
	3	15.0	6.2	8.7	○		○	×
		壺						
	4	9.7	24.7	9.4				
SX1556								
		須恵器　蓋						
48	1	16.0	1.7					
		杯						
	2	14.1	5.6	9.7	○		○	×
		土師器　甕						
	3	13.2						
	4	21.6						
SX1561								
		須恵器　蓋						
57	1	13.6						
	2	14.4						
	3	16.7	2.9					
	4	22.1	3.0					
		杯						
	5	13.4	4.1	7.7	○		○	×
	6	13.4	3.3	8.0	○		○	×
		Ⅲ						
	7	14.4	(2.2)	11.4	○		○	×
	8	15.5	(1.7)	11.2	○		○	×
	9	16.8	(1.6)	13.8	○		○	×
		壺						
	12	11.3						
		土師器　Ⅰ						
		Ⅲa						
58	16	11.5	2.0	8.2	○		○	×
		Ⅲc						
	18	12.6	2.2	7.3	○		○	×
	19	12.1	2.6	7.3	○		○	○
		杯						
	17	11.4	2.6	8.1	○		(○)	×
		椀						
	20	12.8	4.4	7.5	○		○	×

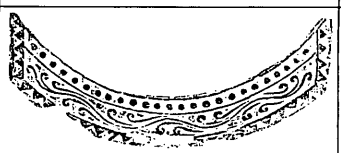
挿図番号	番　号	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	切り離し		内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
					ヘラ	糸		
土師器　II								
皿								
58	22	15.8	2.8	12.0	○		(○)	×
	23	17.7	1.6	14.1	○			×
杯								
	21	13.0	3.5	7.3	○		○	×
甕								
	24	16.4						
灰釉陶器　壺								
	27	14.5						

別表 2

番号	軒丸瓦	60			65 － 1			65 － 2		
		点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位
1		2	1	荒　砂						
2		54	28	S D1513　荒　砂 黄灰土　暗灰色粘土 茶灰色土　S K1510 灰色土 黄灰砂 灰色砂質土	5	31	S D1401 S D1555B 茶灰色土	16	13	S X1572 茶色土 S X1561
3		15	8	S D1513 黄灰色土 灰色土 灰色砂 灰色砂質土 暗灰色粘土				7	6	S B1560A S X1572 S X1561
4		14	7	S D1513　瓦層 I 茶灰色土　S K1510 淡茶色土 黄灰色砂 灰色土 灰色砂質土				7	6	S X1566 S X1572 S X1561
5		15	8	茶灰色土　粘灰色粘土 黄灰色土　S K1510 灰色土 黄色砂 灰色砂質土 S D1505				13	11	S B1560B 黄茶色土 S X1572 S X1561
6		5	3	S D1514 床　土 黄灰色土 S K1510	1	6	床　土	14	11.5	黄茶色土 茶色土 S X1572 S X1561 S K1580
7		25	13	黄灰色土 灰色土 灰色砂質土 明黄色粘質土 炭層 I 暗灰色粘土	5	32	S D1555B S D1555A S A1410B	20	16	S B1560B S X1561 黄茶色土 茶色土
8		7	3	黄灰色土 灰色砂質土 暗灰色粘土 瓦　層 S K1510	1	6	S D1555A	14	11.5	S E1558 茶色土 S X1572 茶褐色粘土 S X1561 S K1580
9		4	2	茶灰色土 黄灰色土 灰色砂質土 暗灰色粘土	1	6	S A1410B	3	2.5	茶色土 S X1561 S K1580
10		10	5	S D1513 茶灰色土 灰色土 灰色砂質土				1	1	S X1572
11		1	0.5	灰色土上層						
12		1	0.5	黄灰色土						
13		1	0.5	黄灰色土				1	1	S X1566

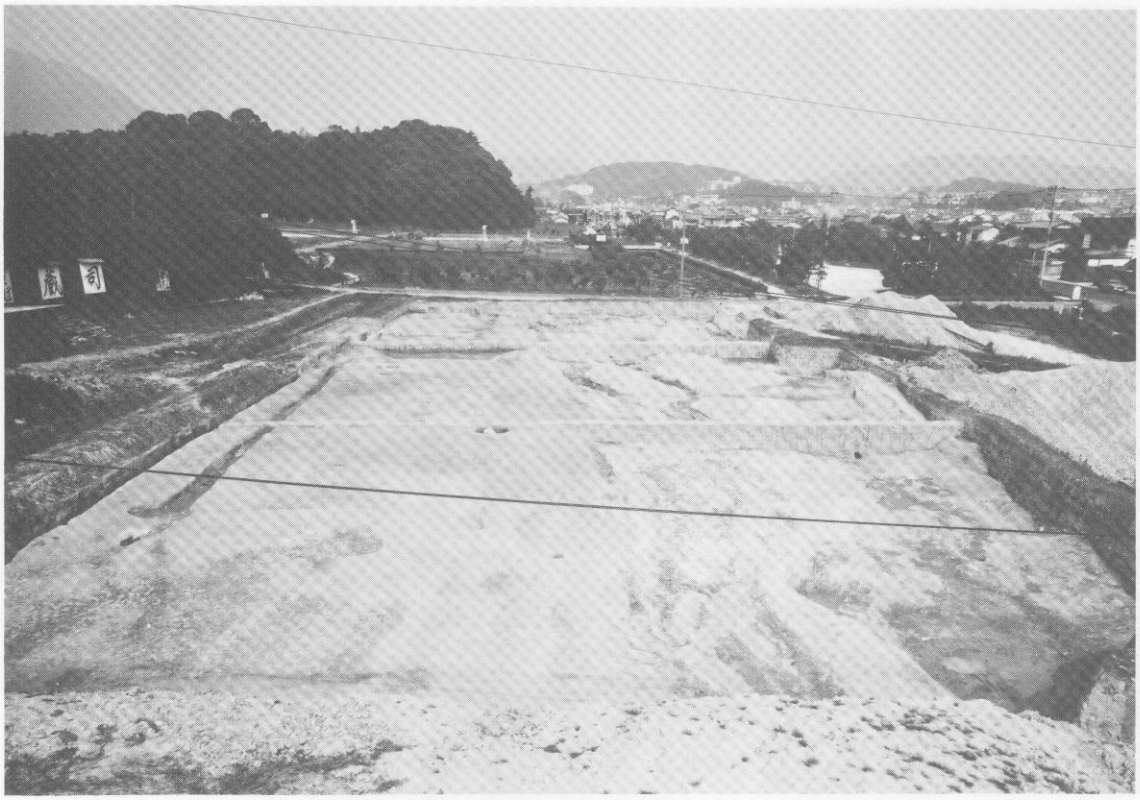
番号	軒丸瓦	60			65 － 1			65 － 2		
		点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位
14		4	2	黄灰色土 灰色砂質土						
15		2	1	黄灰色土				1	1	炭層Ⅰ
16		2	1	黄灰色土 ＳＫ1510				8	6.5	ＳＸ1566 ＳＸ1572 ＳＸ1561
17		4	2	ＳＤ1514 炭層Ⅰ						
18		3	1.5	黄灰色土 灰色砂質土 灰色砂						
19		1	0.5	灰色砂						
20		1	0.5	床　土				1	1	床　土
21		1	0.5	床　土						
22		1	0.5	荒　砂						
23		1	0.5	灰色砂質土						
24		1	0.5	ＳＤ1513						
25					2	12	茶灰色土	6	5	ＳＢ1560Ｂ 床　土 ＳＸ1572 ＳＸ1561
不　明		19	10		1	6		9	7	
合　計		194	100		16	100		121	100	

別表 3

番号	軒平瓦	60			65 － 1			65 － 2		
		点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位
1		49	26	ＳＤ1513　黄灰色砂 SD1514上層　灰色砂 黄灰色土　荒　砂 茶灰色土　炭層Ⅰ 灰色土　暗灰色粘土 灰色砂質土　ＳＫ1510	10	45	ＳＤ1555Ｂ ＳＤ1401 ＳＤ1555Ａ ＳＡ1410Ｂ 灰茶色土	28	33	ＳＥ1559　暗灰色粘土 ＳＢ1570　ＳＫ1580 ＳＸ1572 茶色土 ＳＸ1561
2		6	3	灰色砂 暗灰色粘土 瓦　層				9	11	ＳＢ1560Ｂ 茶色土 ＳＸ1557
3		1	0.5	床　土				4	5	ＳＸ1566 暗灰色土 ＳＸ1572
4		46	25	ＳＤ1513　灰色砂質土Ⅱ 黄灰色土　炭層Ⅱ 茶色土　ＳＫ1510 灰色土 荒　砂	4	18	ＳＤ1555Ａ	1	1	ＳＸ1561
5		22	12	SD1514上層　灰色砂 黄灰色土　灰色砂質土Ⅱ 茶灰色土　暗灰色粘土 黄灰色砂　ＳＫ1510 灰色土	3	14	茶灰色土	27	32	ＳＥ1559　ＳＸ1561 ＳＥ1558　ＳＫ1580 ＳＫ1574 ＳＫ1573 茶色土
6		2	1	ＳＤ1514上層 黄灰色土						
7		3	1.5	ＳＤ1513 黄灰色土 灰色土	4	18	ＳＤ1552 ＳＤ1550 ＳＡ1410Ｂ	1	1	床　土
8		4	2	黄灰色土 炭層Ⅰ				1	1	ＳＥ1558
9		6	3	灰色砂質粘土 荒　砂 炭層Ⅰ				2	2	ＳＸ1566 暗灰色土
10		3	1.5	黄灰色土 灰色砂質土 荒　砂						
11		3	1.5	ＳＤ1513 灰色土 灰色砂質土						
12		4	2	灰色砂質土 荒　砂 炭層Ⅰ				1	1	ＳＥ1559

番号	軒平瓦	60			65 － 1			65 － 2		
		点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位	点数	%	出土遺構・層位
13		3	1.5	ＳＤ1513 黄灰色土 灰色砂質土						
14		2	1	ＳＤ1513 炭層Ⅰ						
15		2	1	炭層Ⅰ						
16		7	4.5	黄灰色土 灰色砂質土 炭層Ⅰ						
17		1	0.5	黄灰色土						
18		2	1	黄灰色土 灰色砂質土Ⅰ						
19		1	0.5	灰色砂質土				1	1	ＳＸ1572
20		1	0.5	床　土						
21								1	1	ＳＸ1561
22		1	0.5	床　土				1	1	ＳＸ1561
23		1	0.5	炭層Ⅰ						
不明		16	9		1	5		8	9.5	
合計		186	99.5		22	100		85	99.5	

図　　版



第60次調査区全景（西から）

第60次調査区全景（東北から）

図版 2

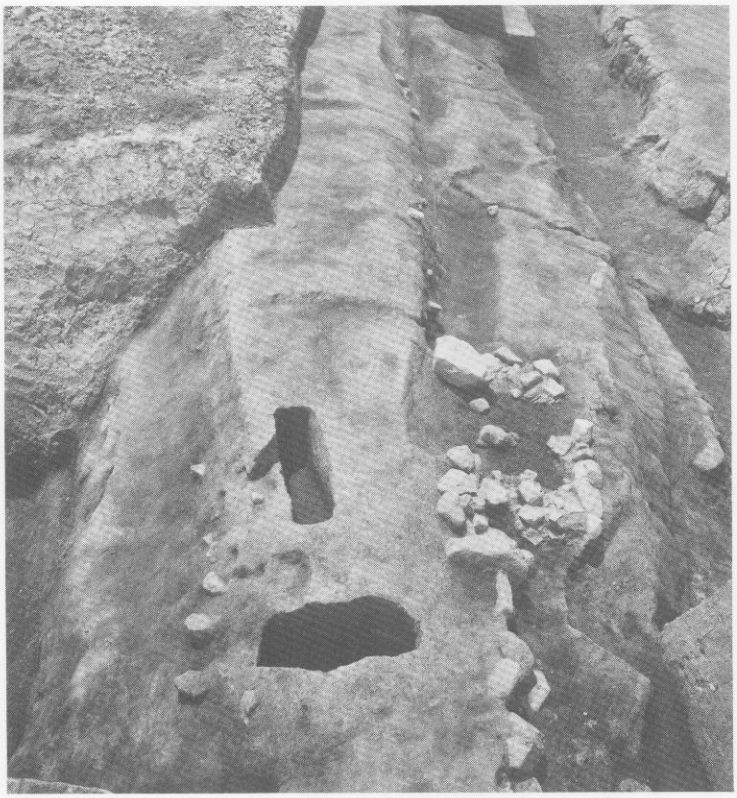
下層遺構SX1406（南から）

下層遺構SX1406（北から）

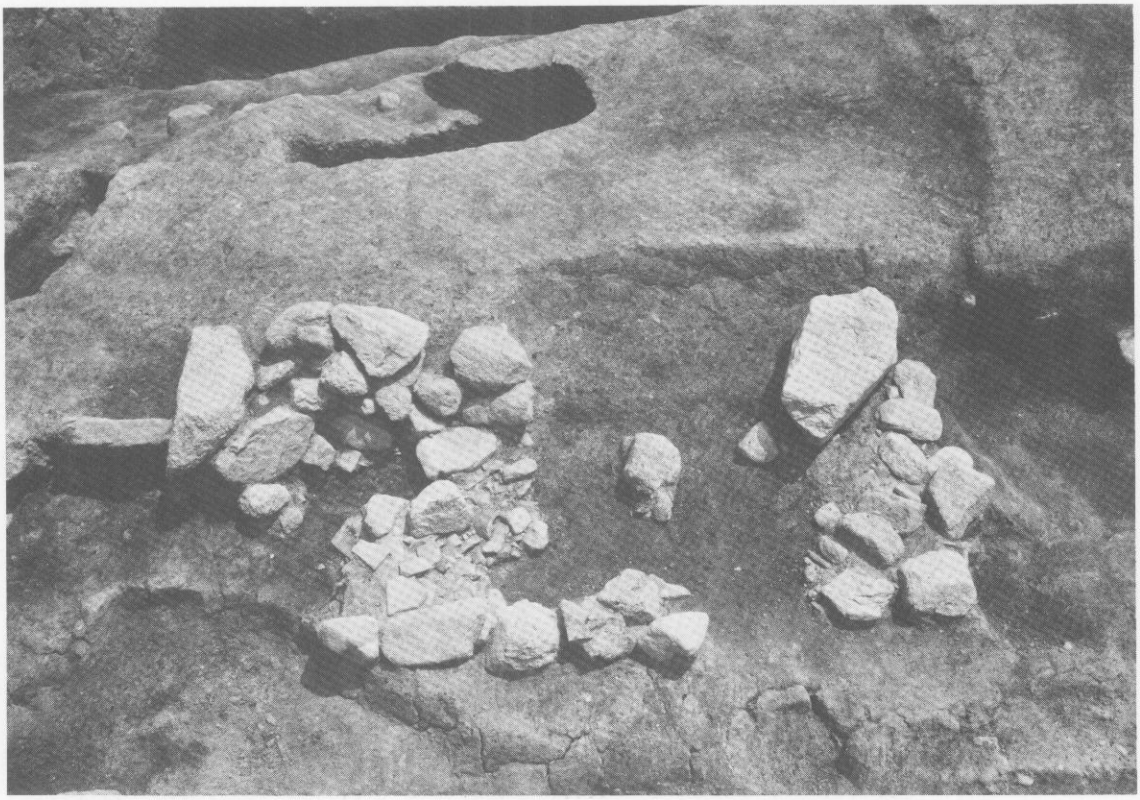
礎石建物SBI500（東から）

礎石建物SBI500（北から）

図版 4



築地SA1410（東から）



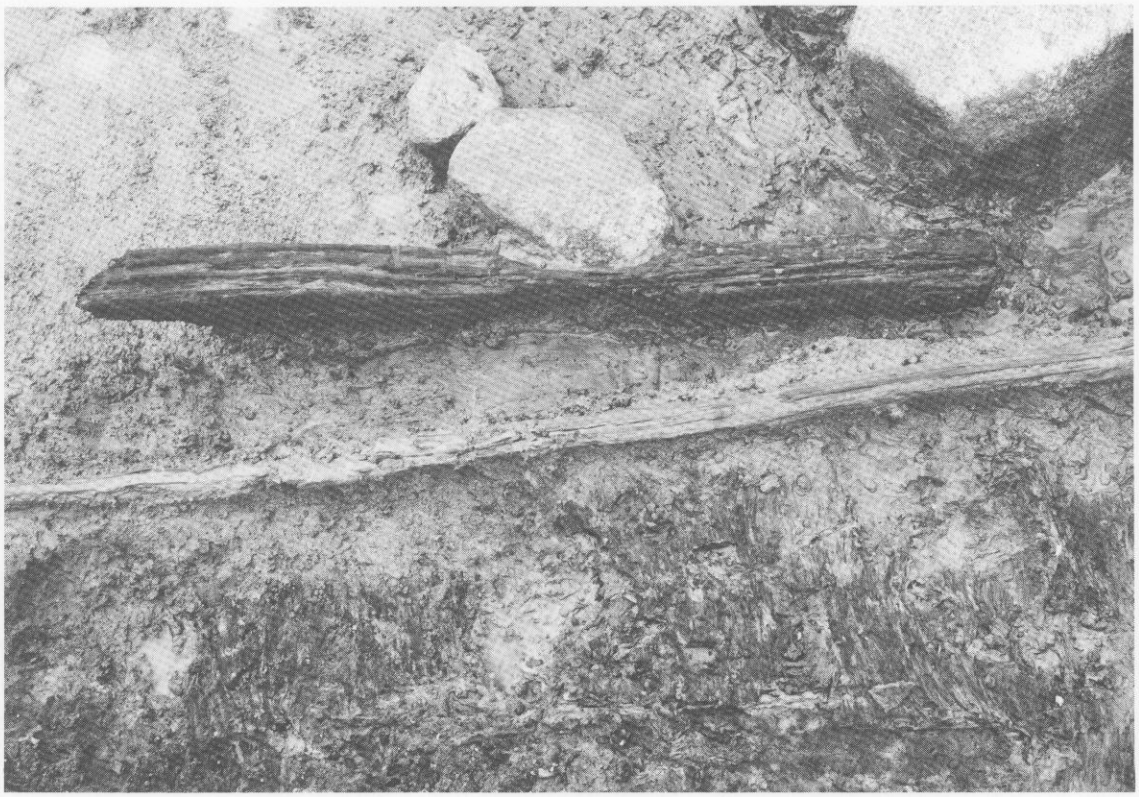
階段SX1520（北から）

暗渠SX1515 （東から）

ダム状遺構SX1501 （東から）

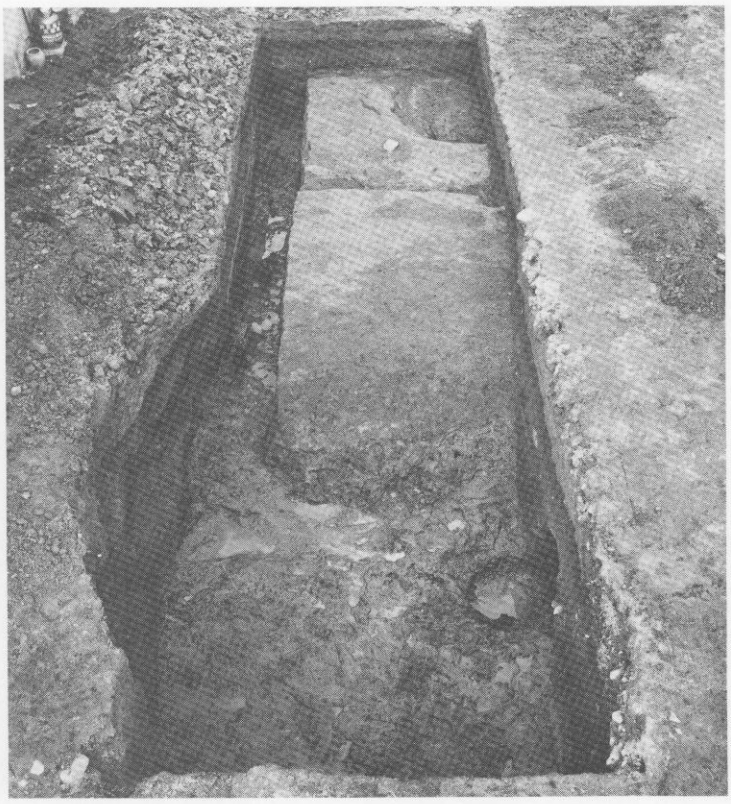
図版 6

唐三彩陶枕出土状態（北から）



木製品杵出土状態（東から）

第63次調査区全景
（東から）

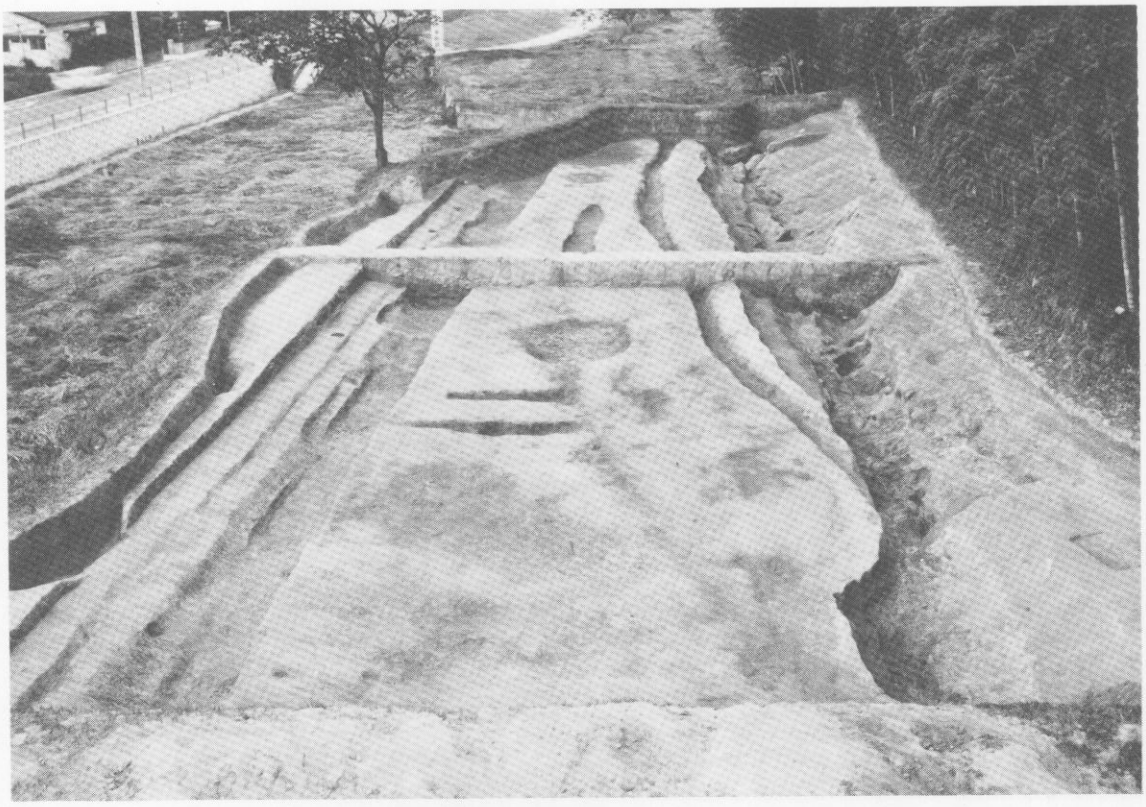


第63次調査区全景（西から）

図版 8

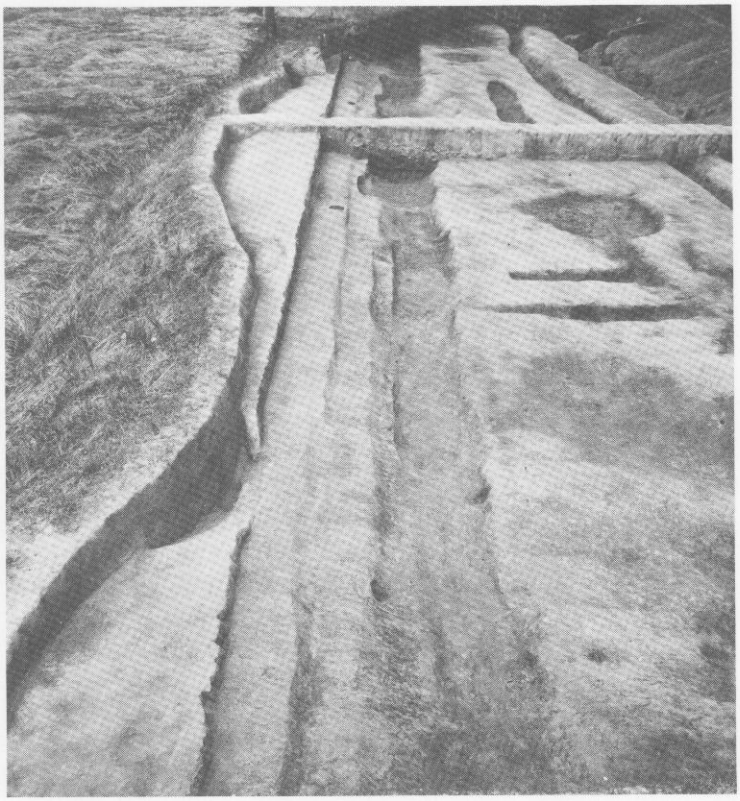
竪穴状遺構SX1546（西から）

大甕出土状態（北西から）

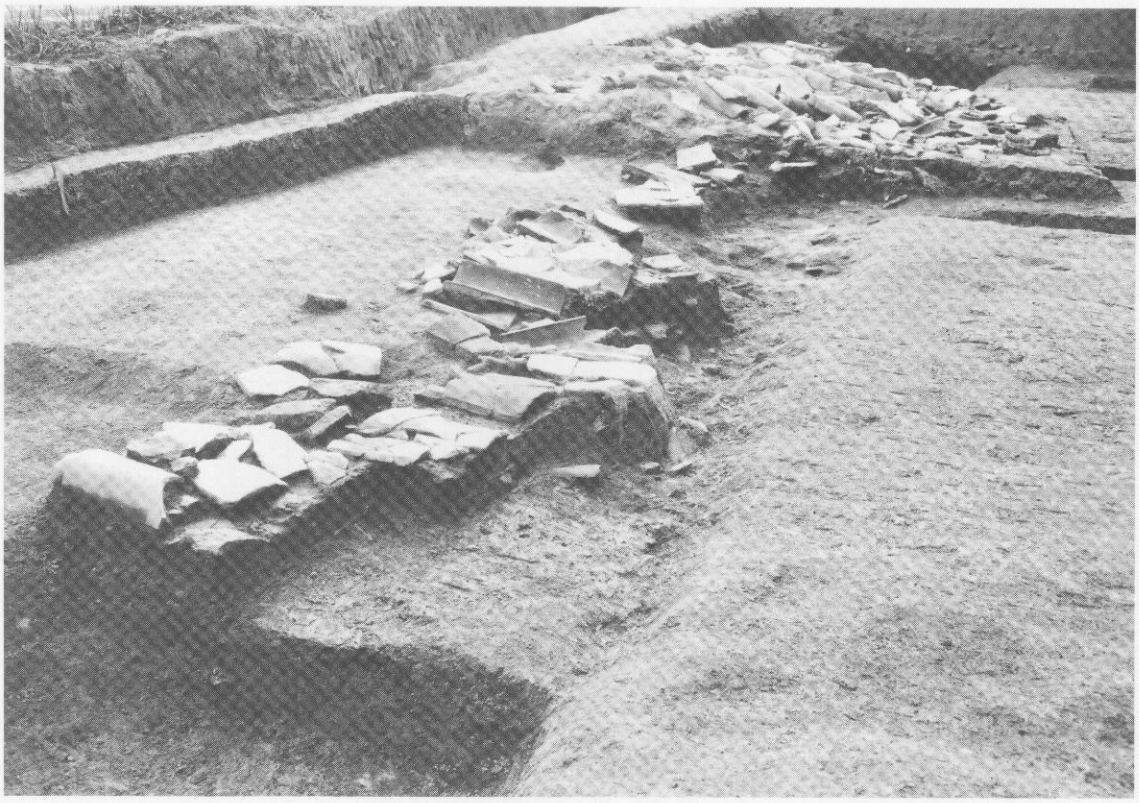


第65—1次調査区全景（東から）

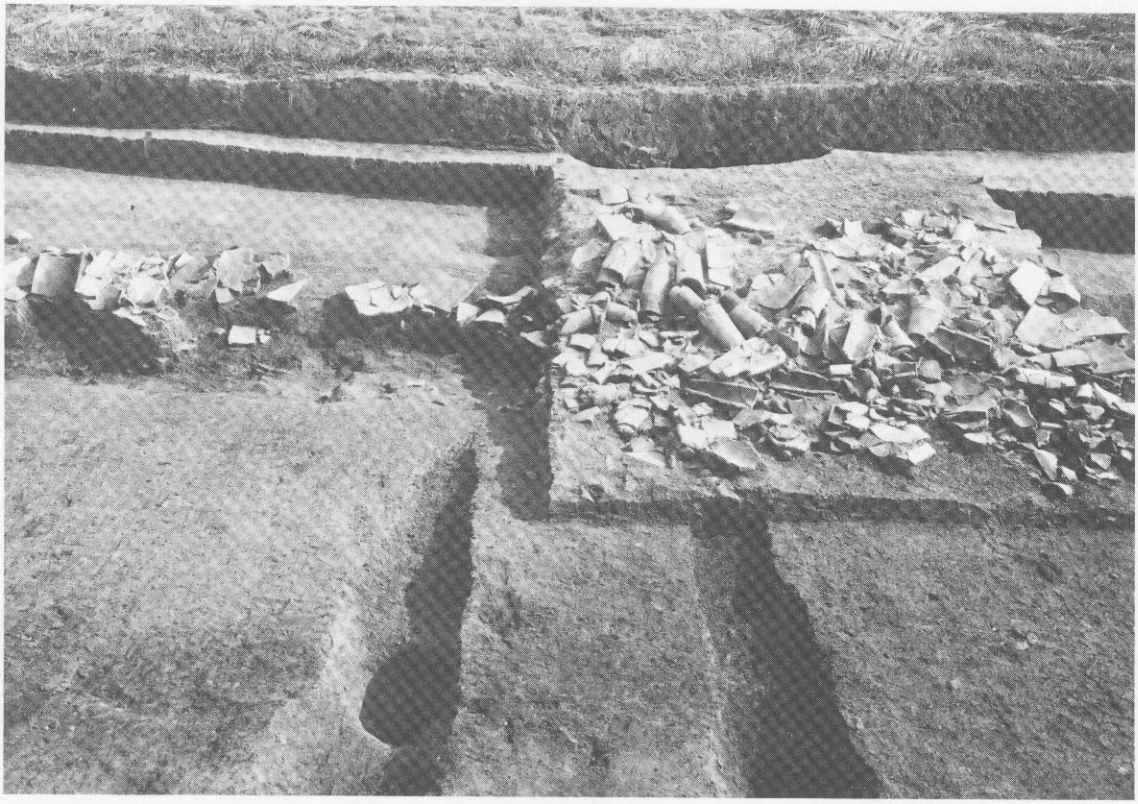
築地SA1410・溝SD1550
（東から）



図版10



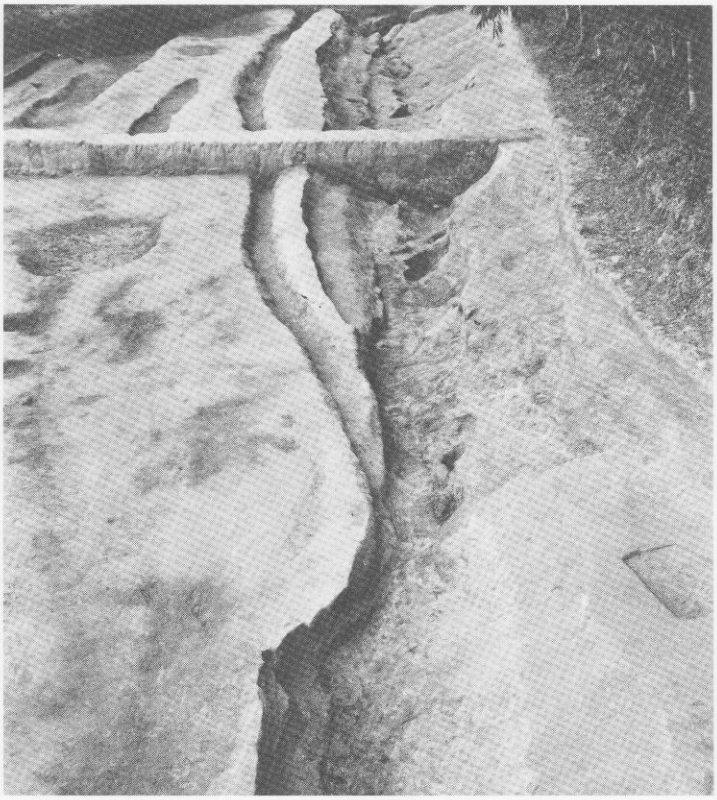
築地SA1410A・B 瓦落下状態（東から）



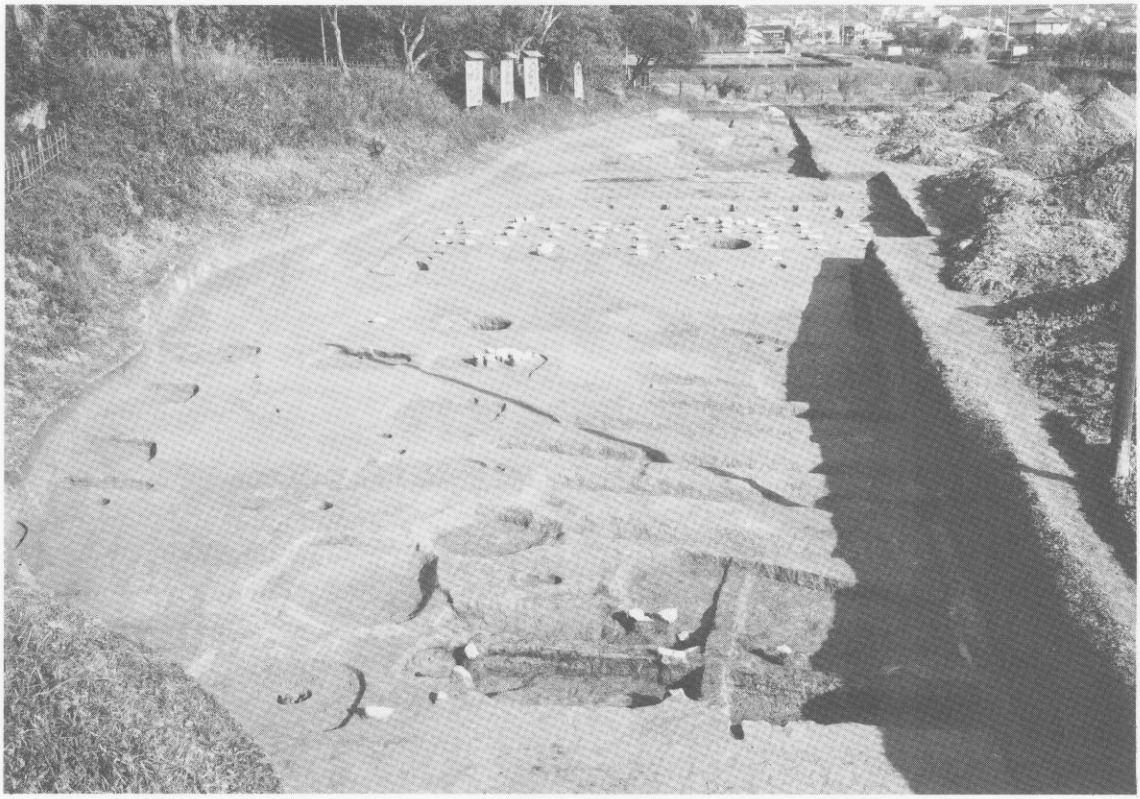
築地SA1410A・B 瓦落下状態（北から）

築地SA1410B 瓦落下状態
（東から）

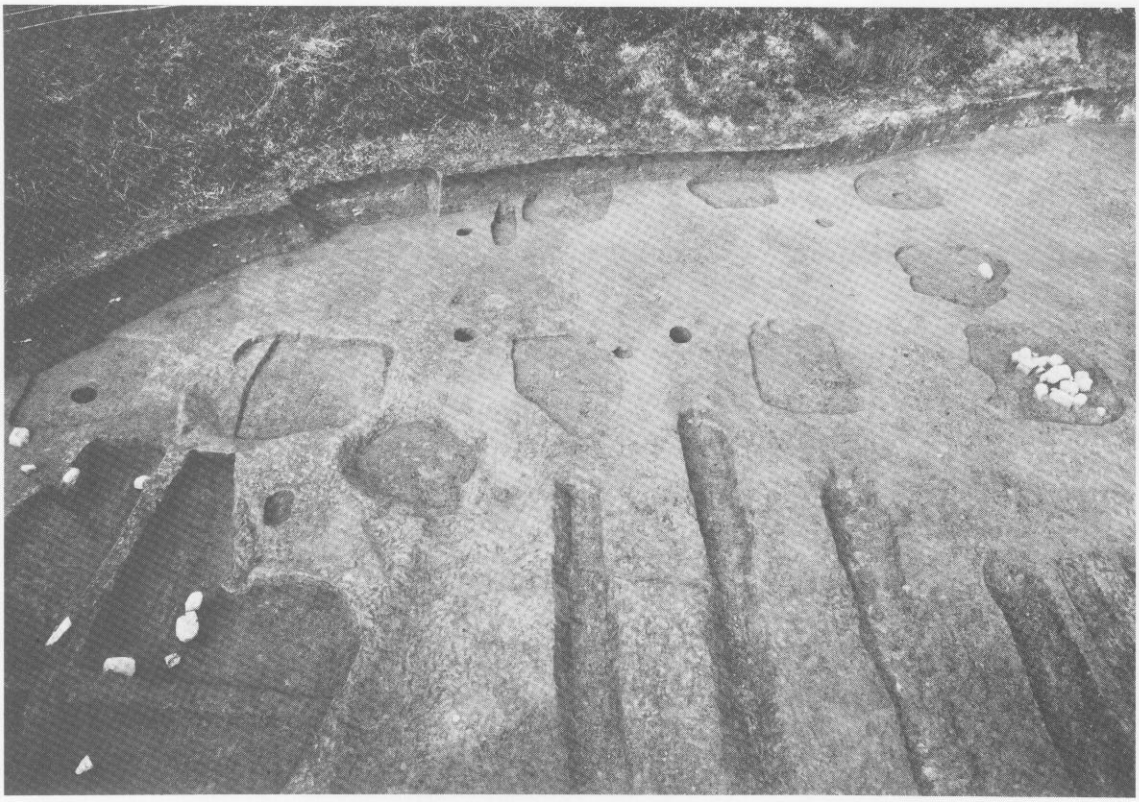
溝SD1401・1555（東から）



第65—2次調査区全景（東から）



第65—2次調査区全景（西から）



建物SB1560A・B（南から）

建物SB1560A・B（東から）

掘立柱建物SB1560A 柱根（東から）

掘立柱建物SB1560A 柱根（南から）

掘立柱建物SB1560A 根がらみ（東から）

掘立柱建物SB1560A 根がらみ（北から）

図版16

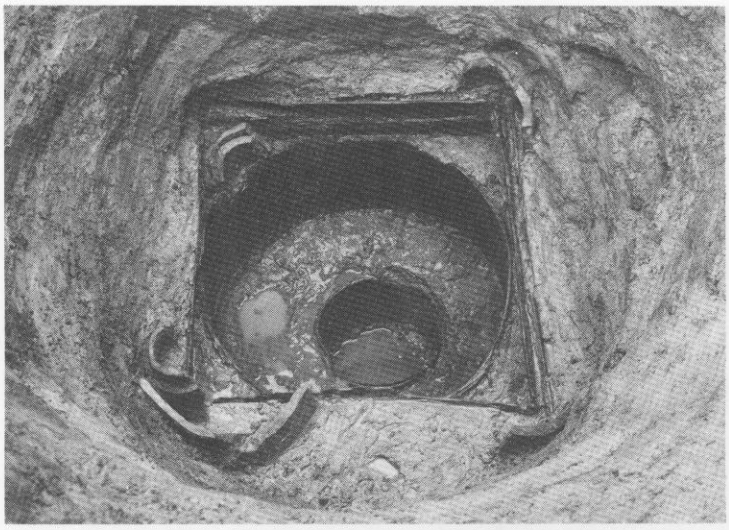
礎石建物SB1565A・B （西から）

礎石建物SB1565A・B （南から）

掘立柱建物SB1570、保土穴SX1571 （南から）

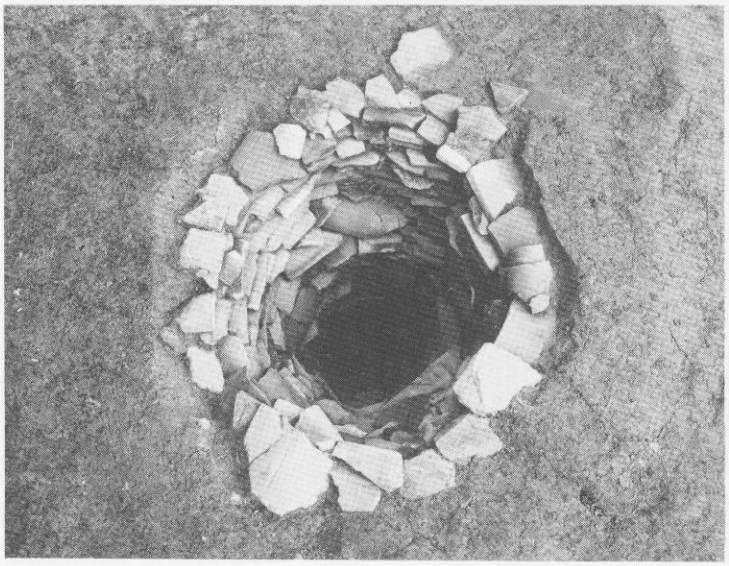
保土穴SX1571 （西から）

図版18

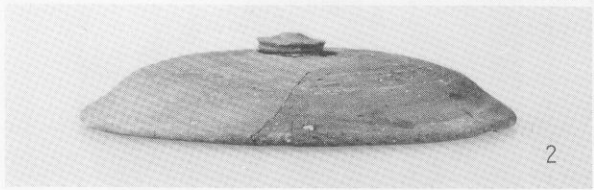


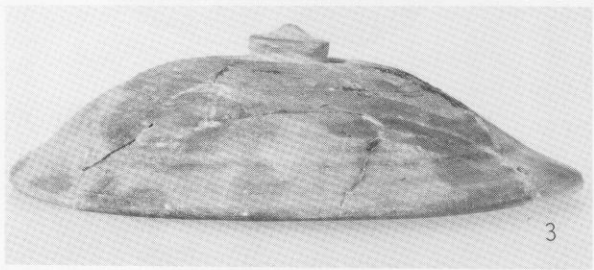
井戸 SE1558（南から）

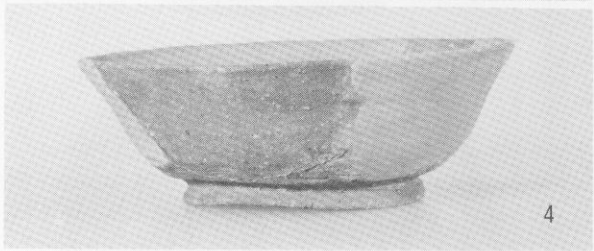
井戸 SE1559（西から）

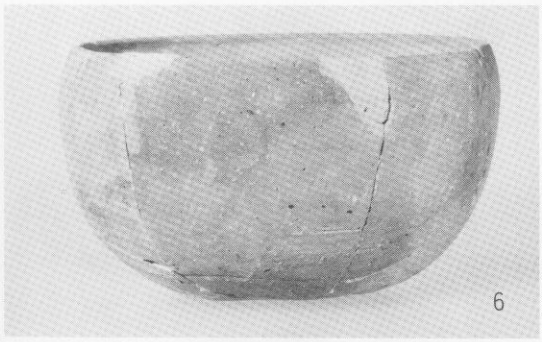


瓦組遺構SX1573（西から）

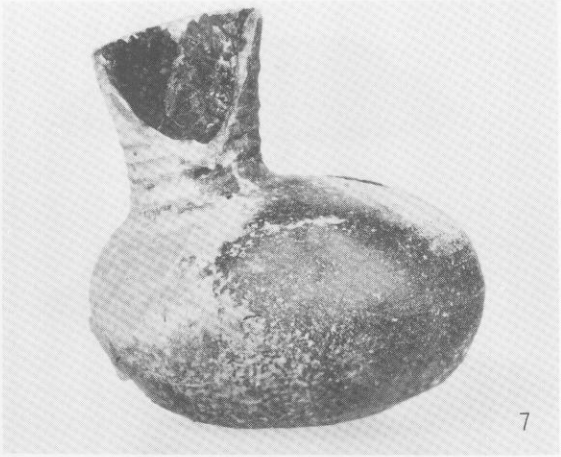






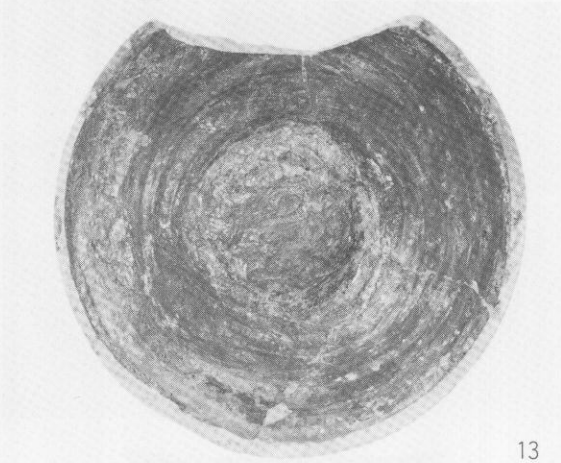


第60次調査　整地層中・下出土土器（1）　（1～6 $\frac{2}{5}$・10 $\frac{1}{4}$・17～24 $\frac{1}{5}$）



7

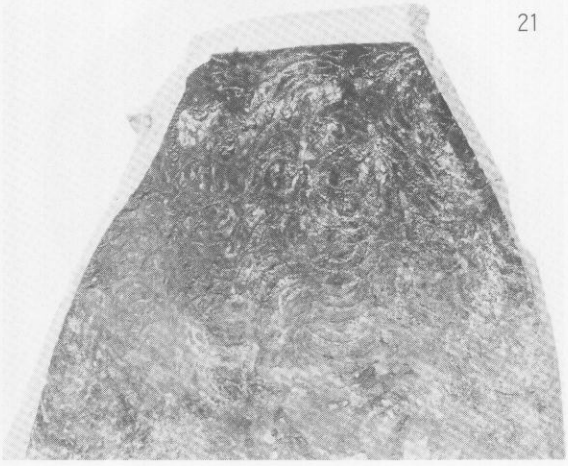
9



13

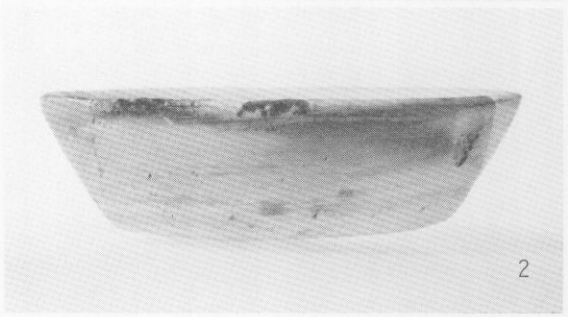
21

11

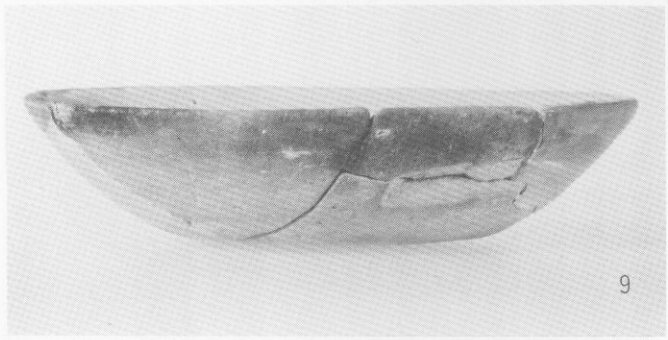


第60次調査　整地層中・下出土土器 (2)　（7 $\frac{1}{2}$、他は $\frac{1}{3}$）

1


2

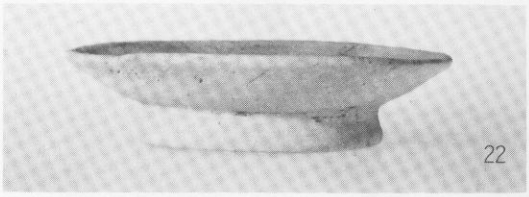
7

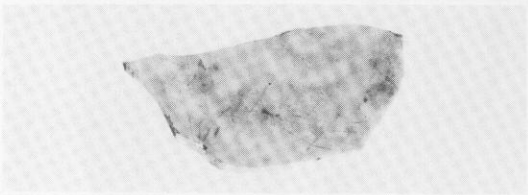

9

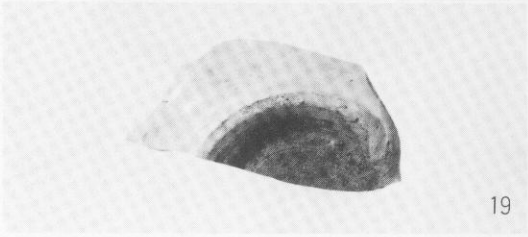
13

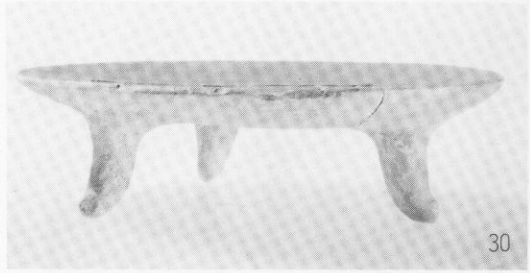
5

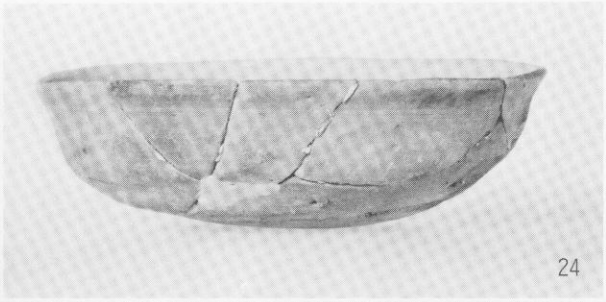
第60次調査　SK1510出土土器（7・5 $\frac{1}{3}$、他は $\frac{1}{2}$）

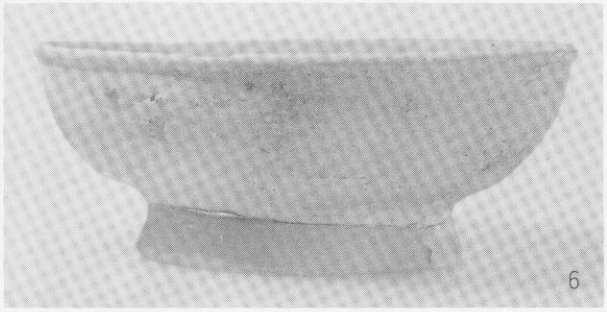




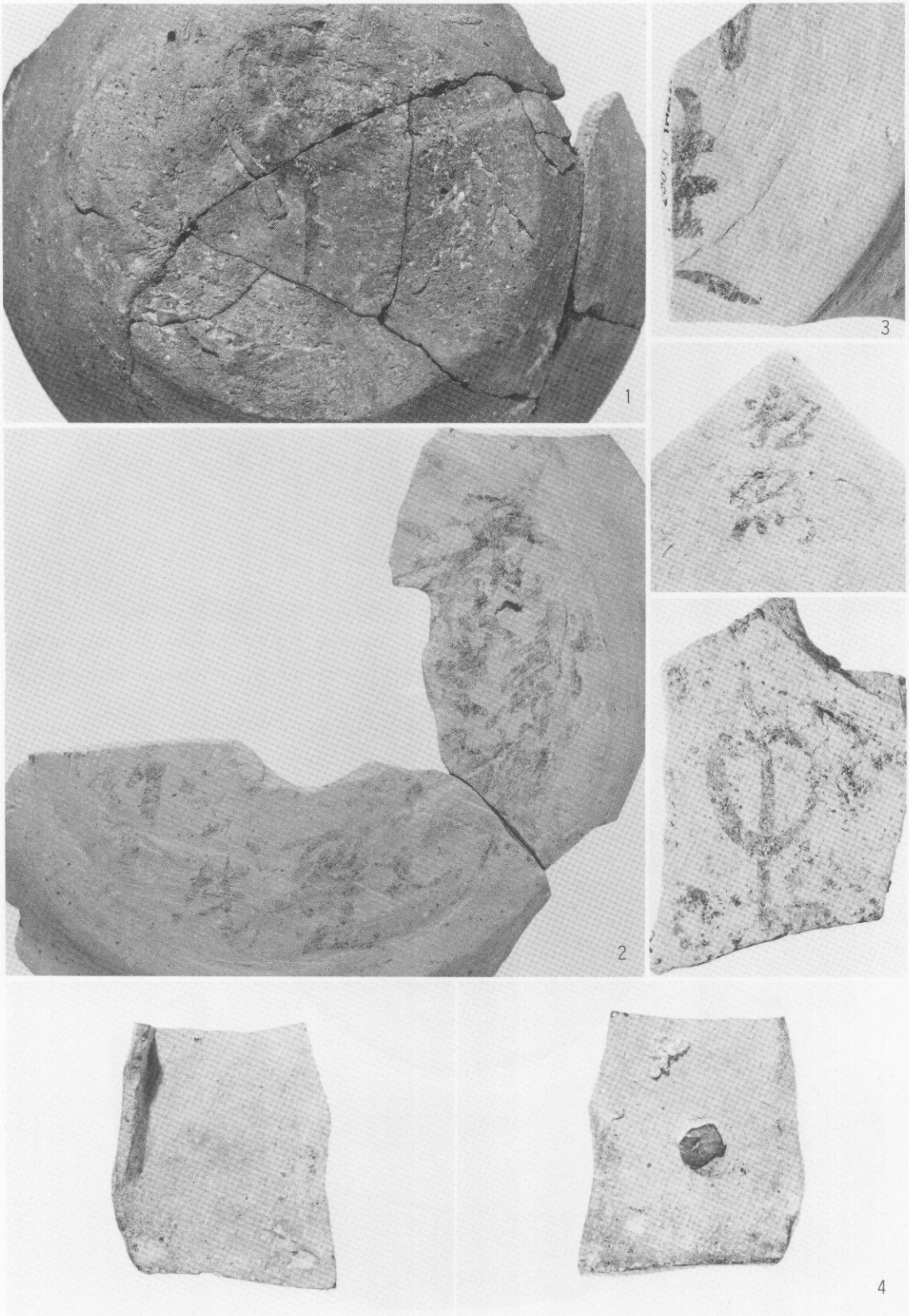






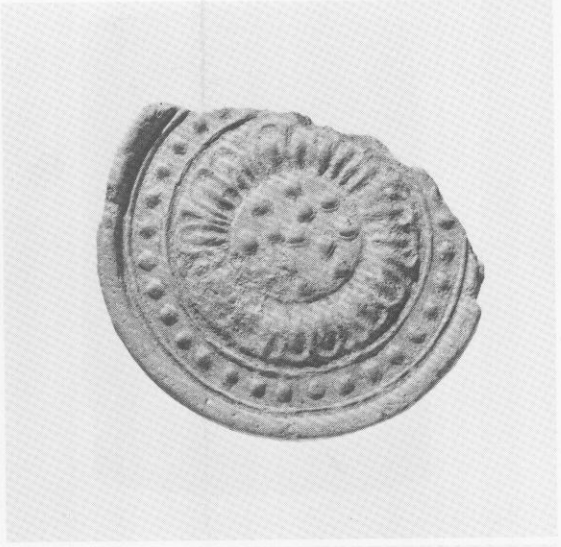
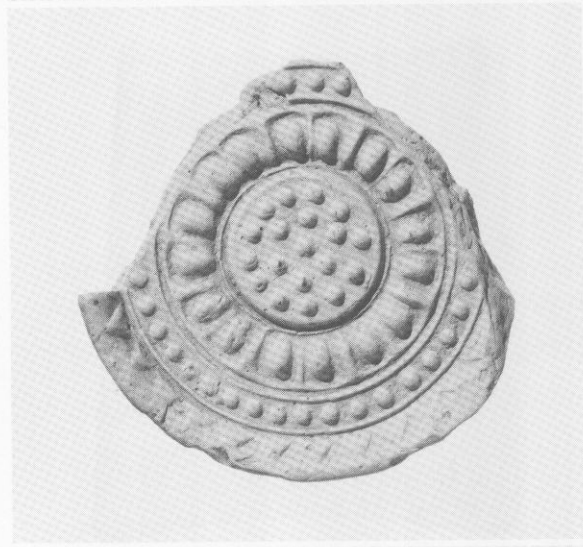


第60次調査　SD1508、炭層Ⅰ、Ⅱ、黄灰色土層（1～25$\frac{1}{2}$）、動物形須恵製品（$\frac{1}{2}$）

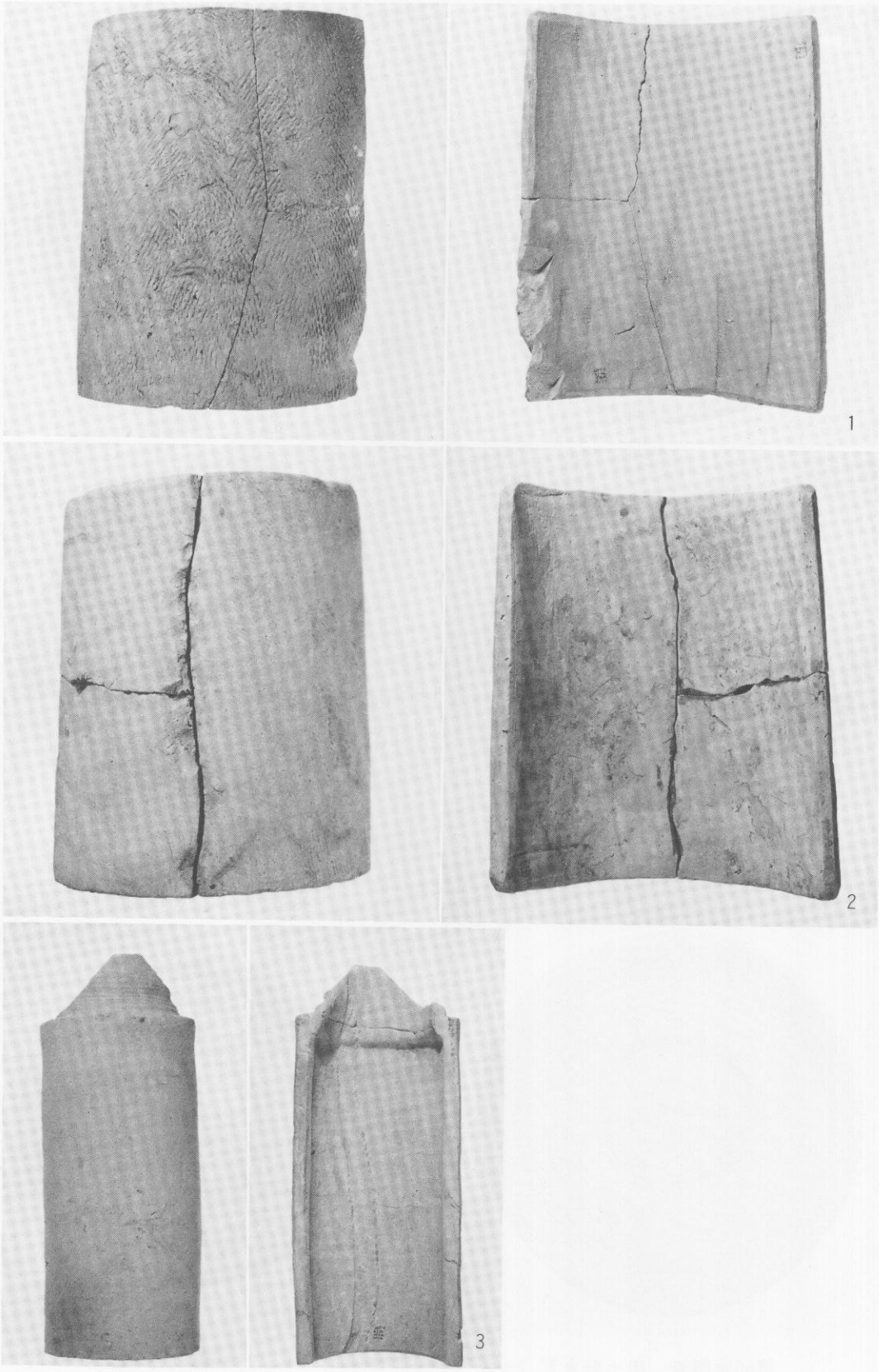


第60次調査　出土墨書土器、硯（4 $\frac{1}{2}$、他は実大）

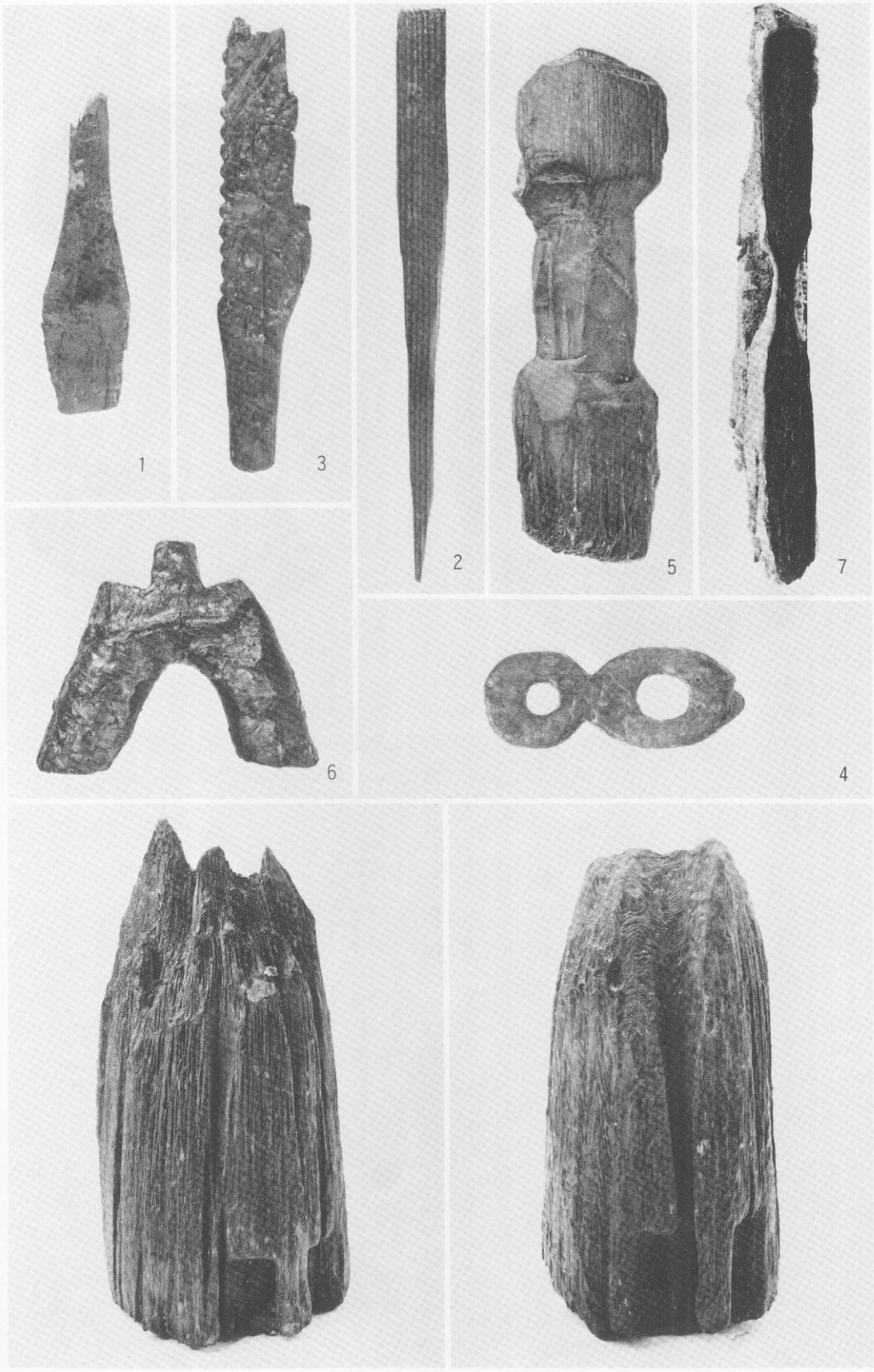
第60次調査　出土軒先瓦（$\frac{1}{3}$）

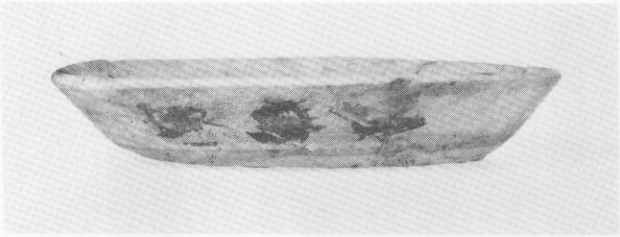
第60次調査　出土軒丸瓦（$\frac{1}{3}$）

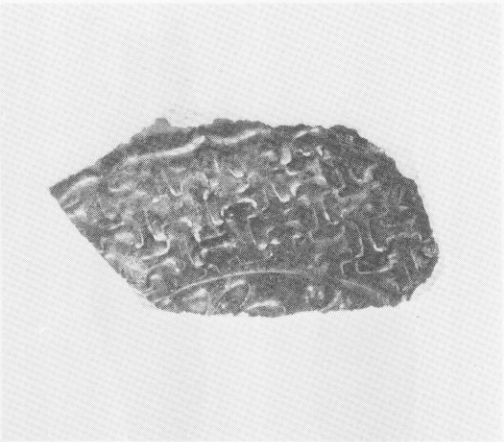


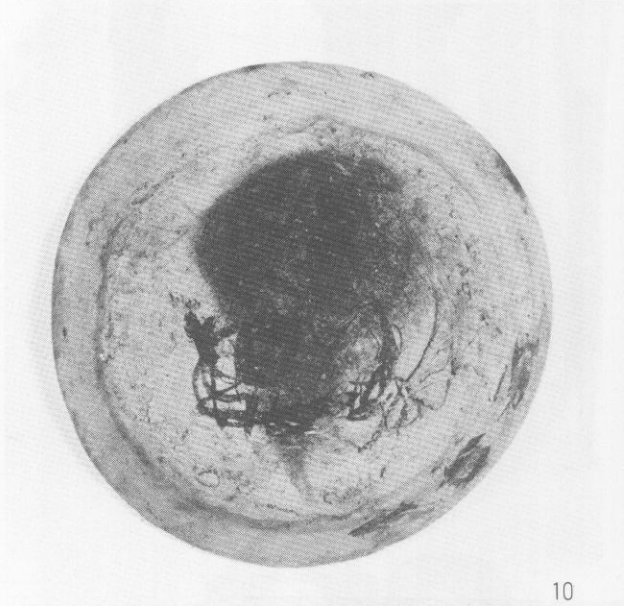
第60次調査　出土丸・平瓦（$\frac{1}{6}$）



第60・65―2次調査　出土木製品、SB1560A柱根

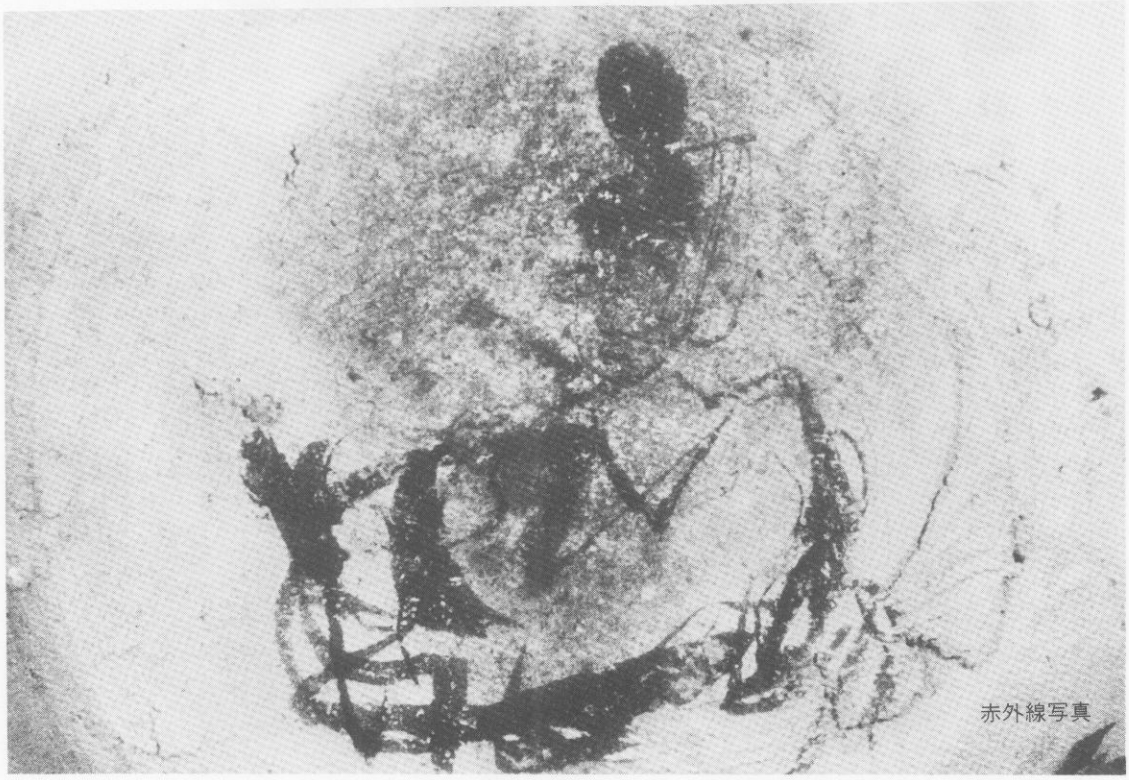






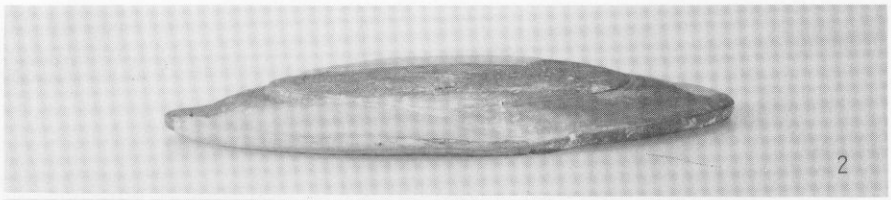
10

28

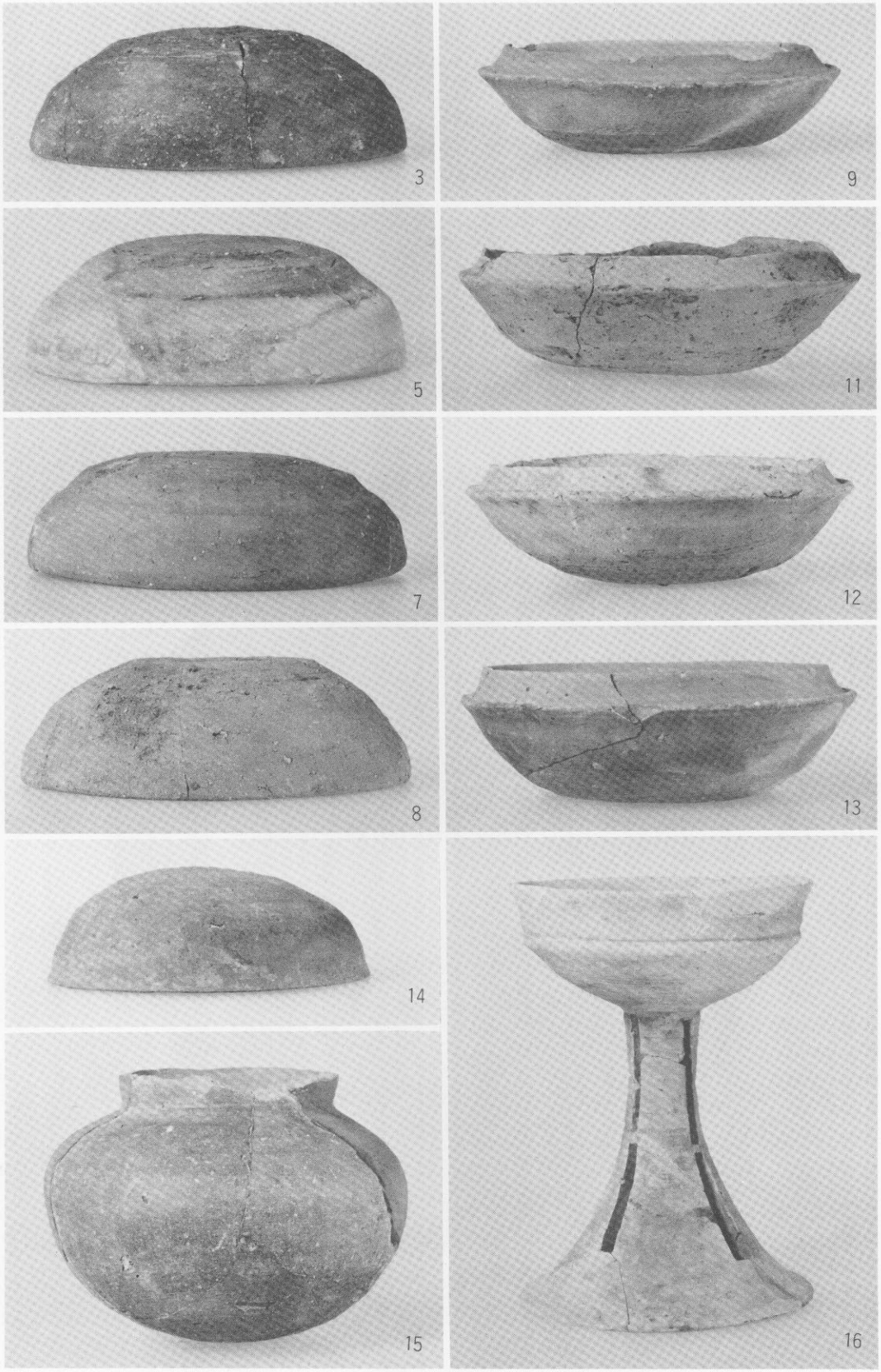


赤外線写真

第63次調査　出土土器（10・28$\frac{1}{2}$）



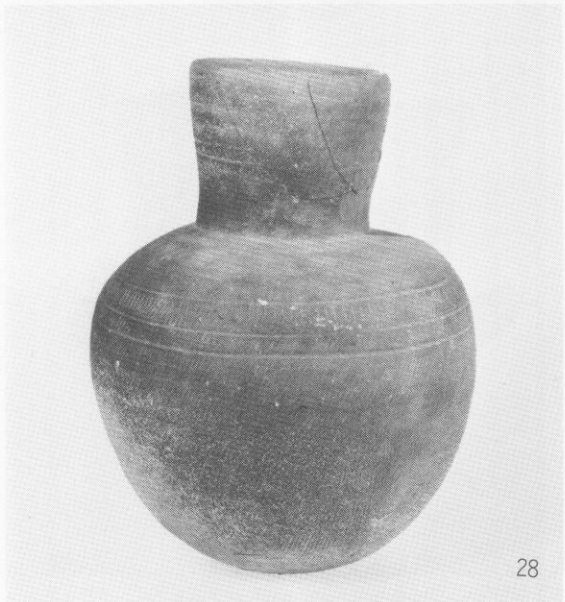
第64次調査　出土土器（2・10$\frac{1}{2}$）

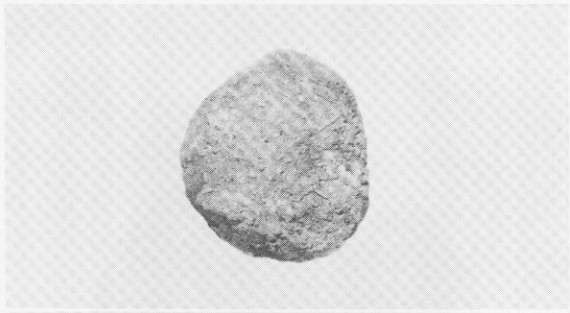


第65—Ⅰ次調査　整地層一括出土土器(1)（$\frac{2}{5}$）

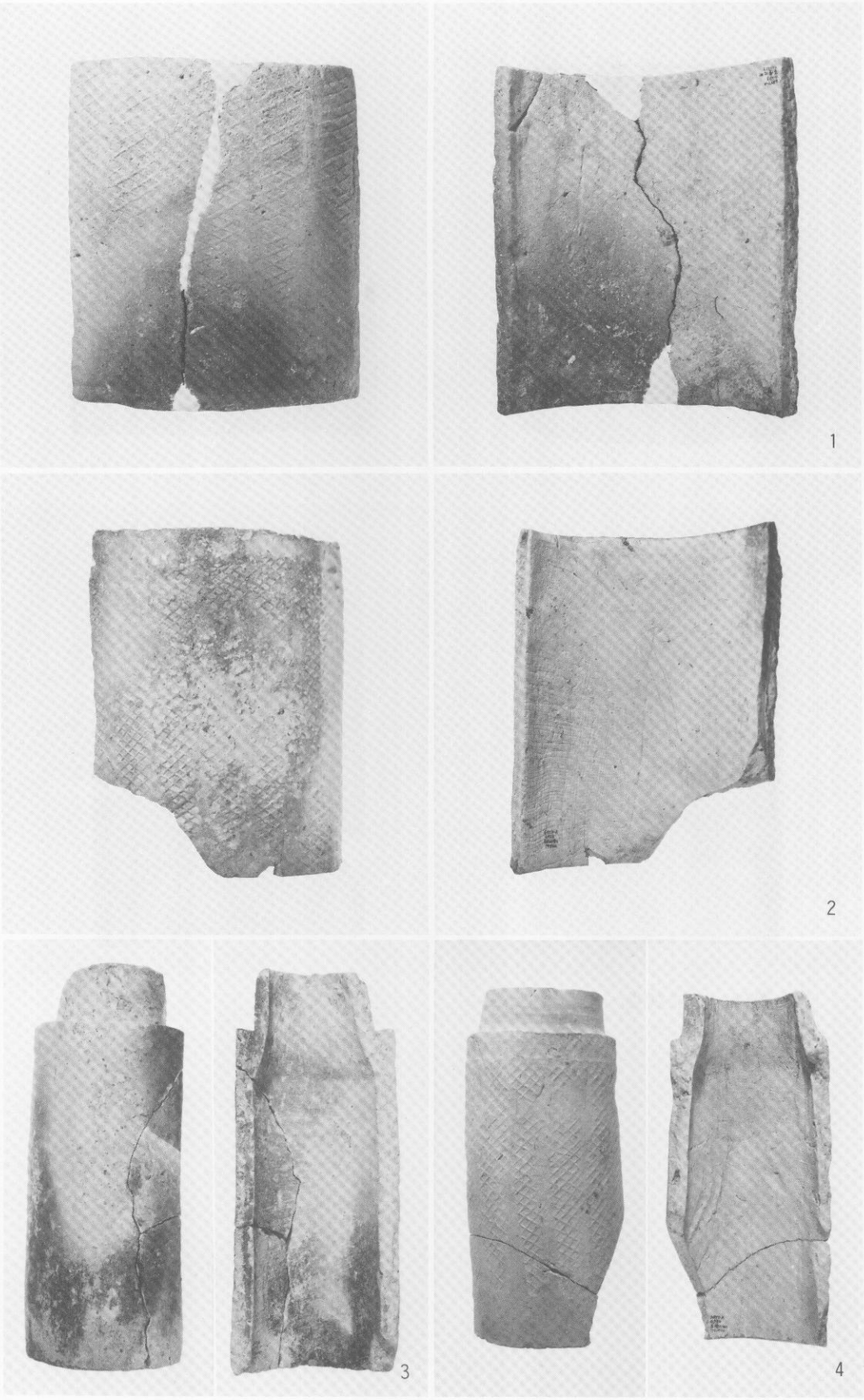
第65—1次調査　整地層一括出土土器(2)（$\frac{1}{5}$）

図版32



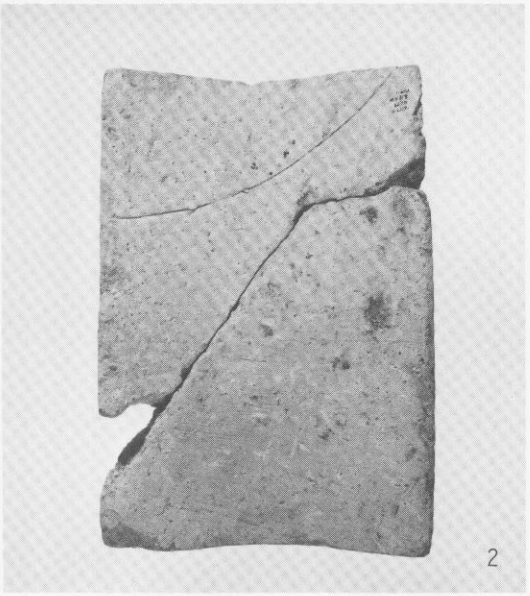


第65—Ⅰ次調査　整地層一括出土土器(3)（25～28$\frac{1}{5}$、29・30実大）



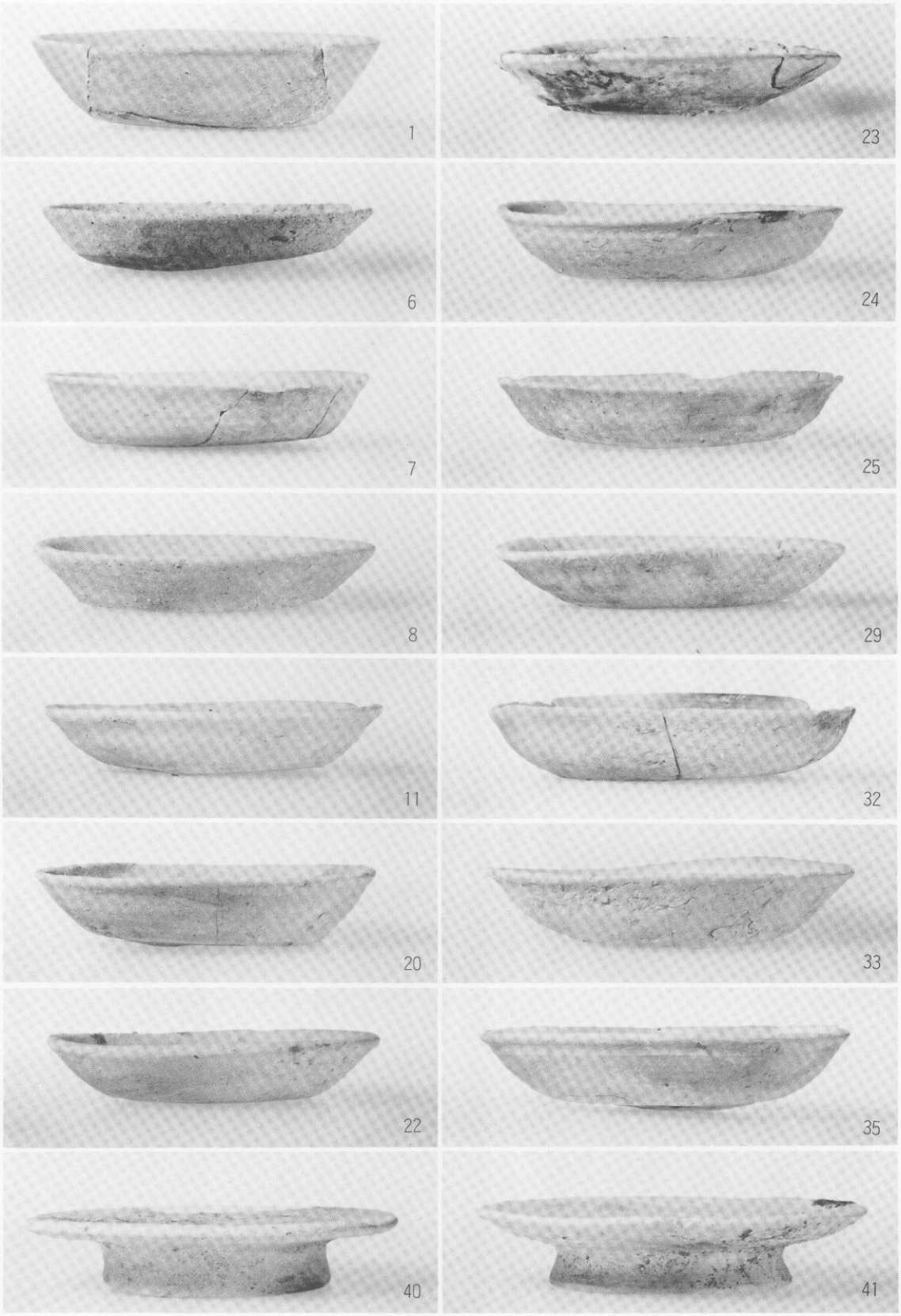
第65—Ⅰ次調査　出土丸・平瓦（$\frac{1}{6}$）

1

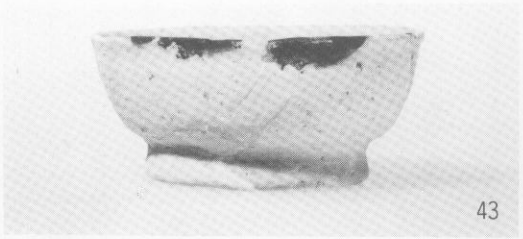


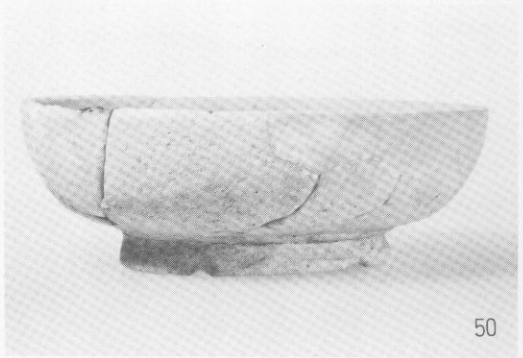
2

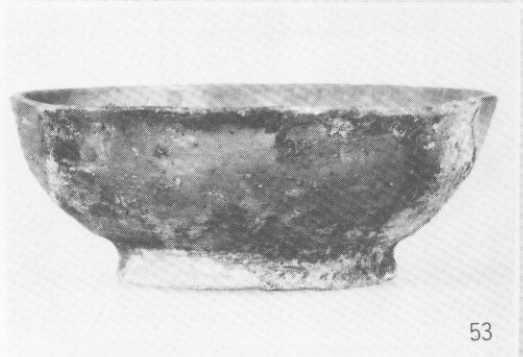
第65—Ⅰ次調査　出土平瓦（$\frac{1}{6}$）



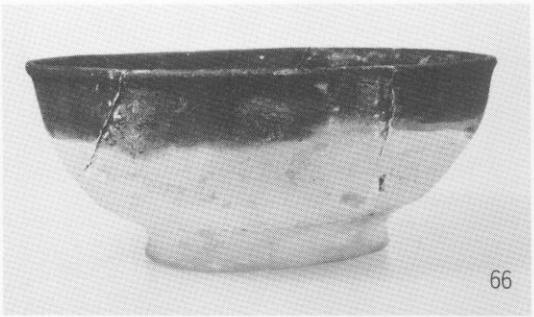
第65— 2 次調査　SE1558出土土器(1) ($\frac{1}{2}$)

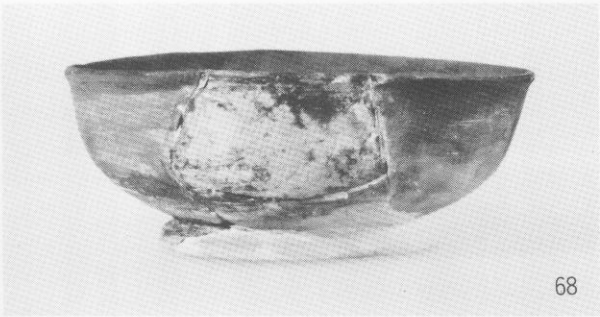


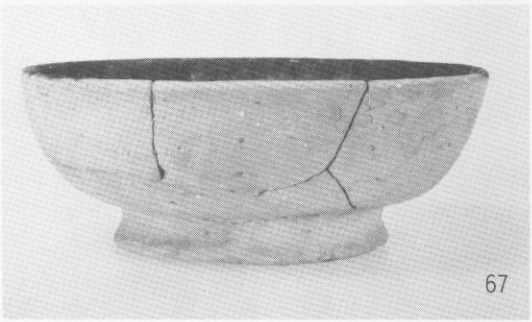




第65— 2 次調査　SE1558出土土器(2)（$\frac{1}{2}$）


66


68

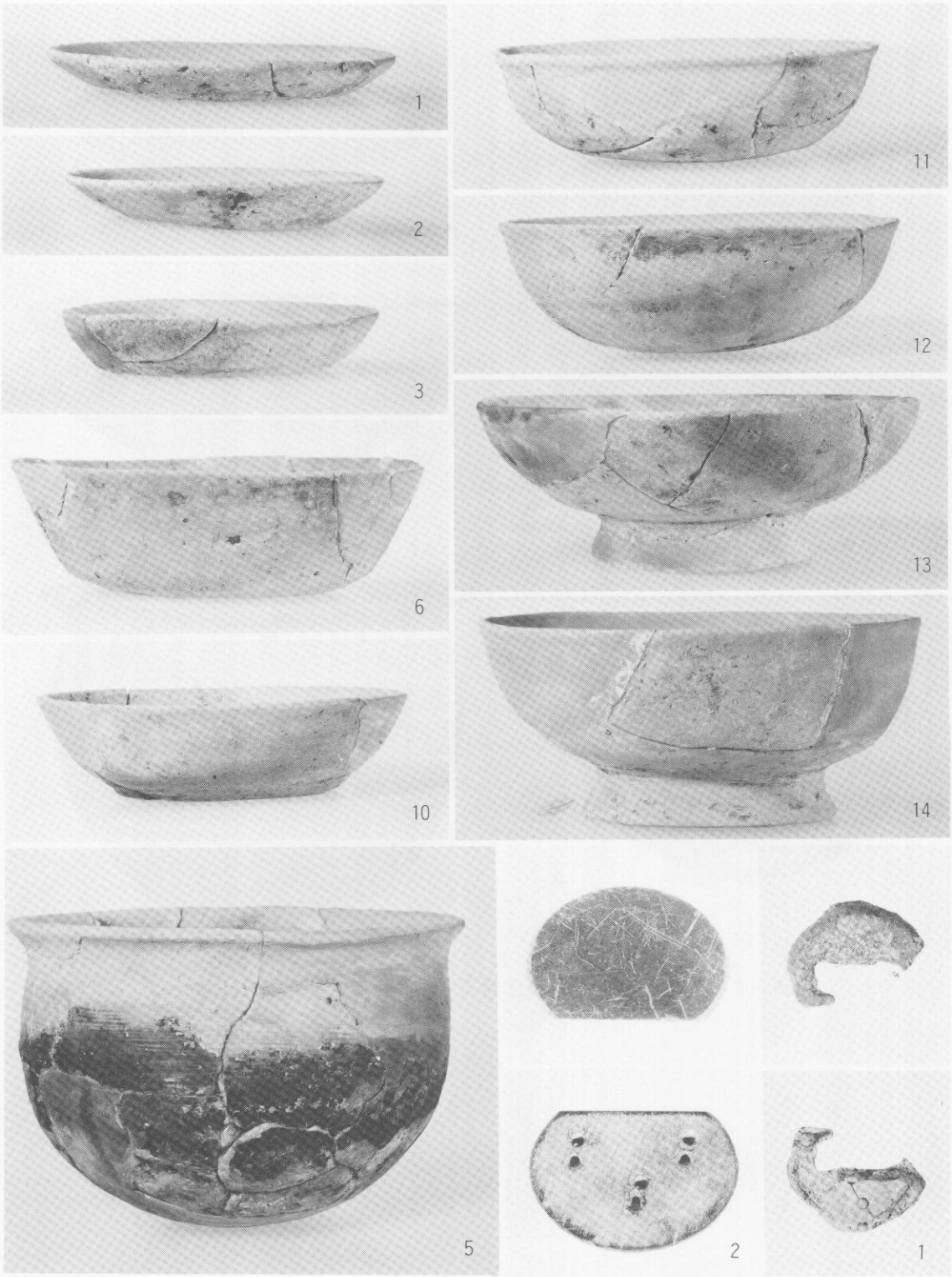

67

69

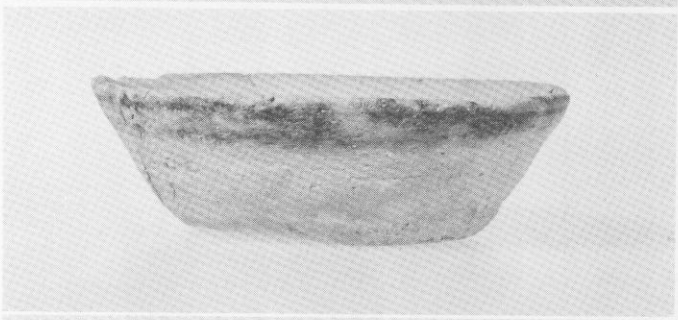
63

64

第65—2次調査　SE1558出土土器(3)（66～69$\frac{2}{5}$、63・64$\frac{1}{5}$）

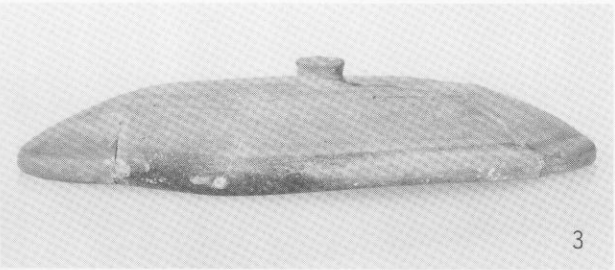


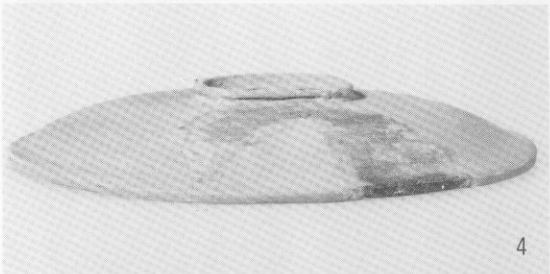
第65—2次調査　SK1567出土土器（1～3、6～14$\frac{1}{2}$、5$\frac{1}{3}$）、出土帯金具・石帯（実大）

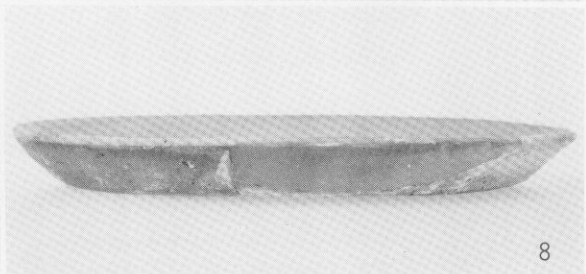


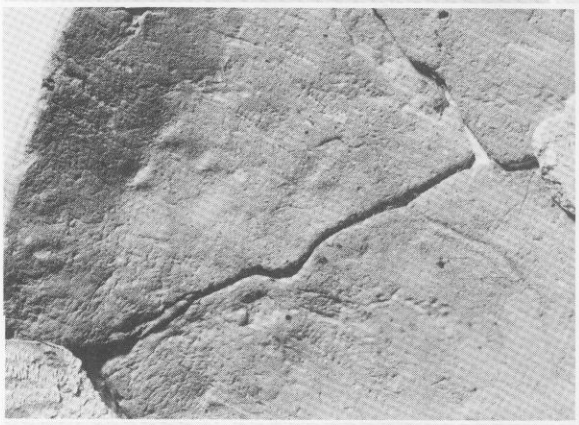
第65—2次調査　SK1574出土土器（1$\frac{1}{3}$、2・3$\frac{1}{2}$）

2


3


4


8

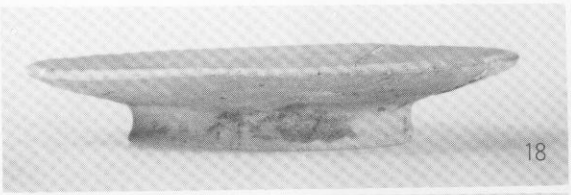


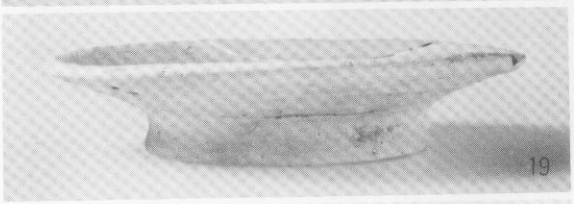
14

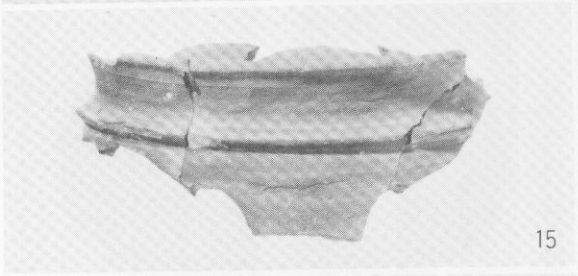
11

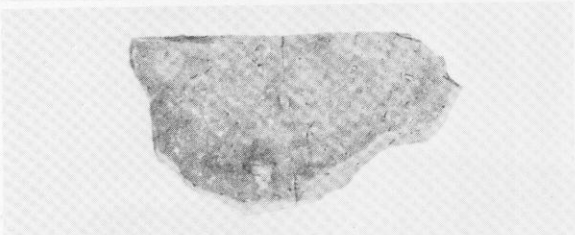
10

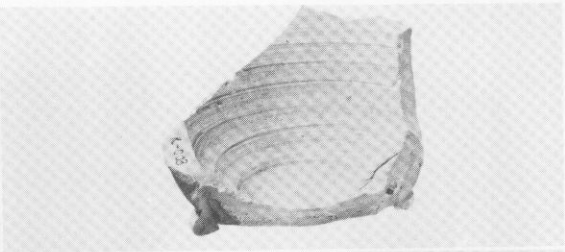
第65—2次調査　SX1561出土土器(1)（2～8$\frac{1}{2}$、11$\frac{1}{3}$）

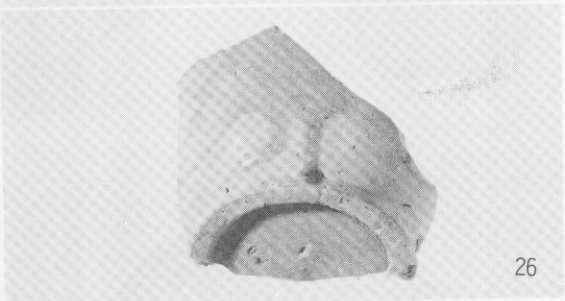


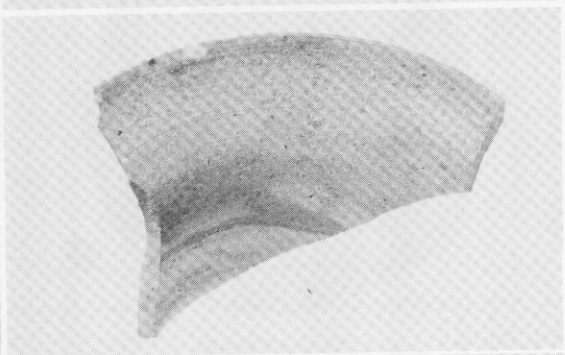


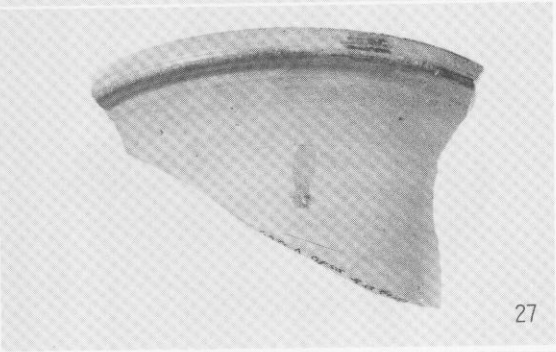


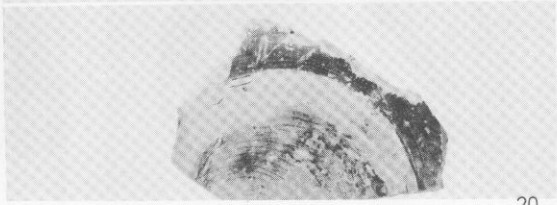






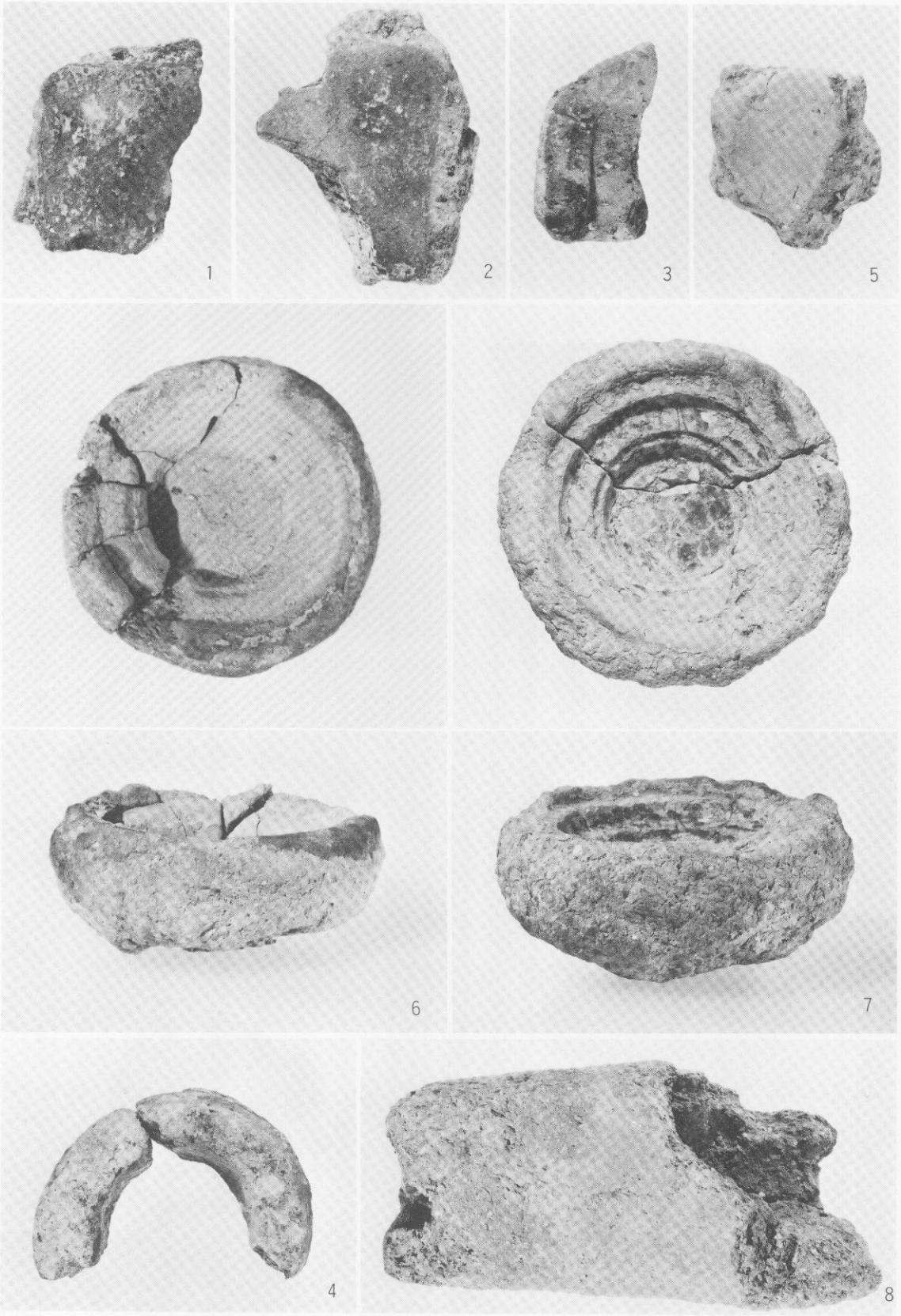




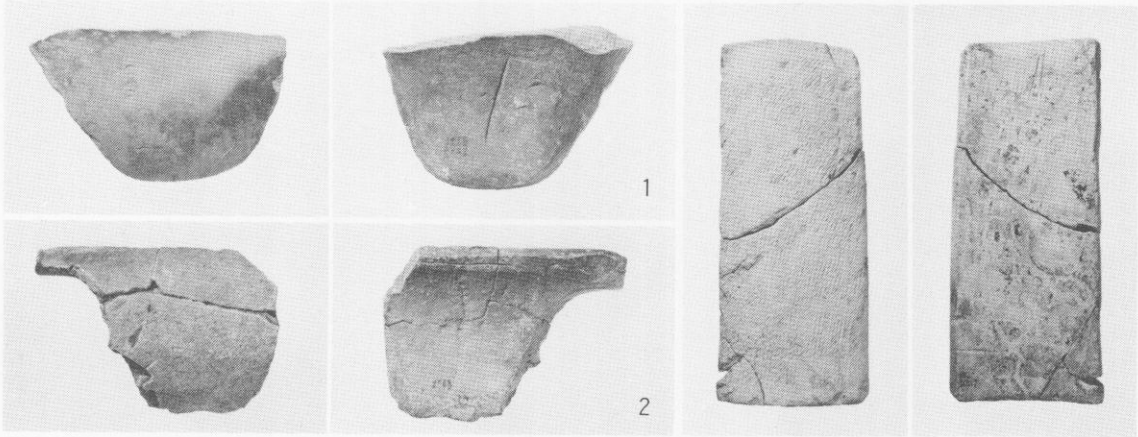


第65— 2 次調査　SX1561出土土器(2)（$\frac{1}{2}$）

図版42



第65—2次調査　鋳造関係出土遺物（$\frac{1}{2}$）



第60・64・65—1・65—2次調査　出土軒先瓦、道具瓦（1・2 $\frac{1}{3}$、他は $\frac{1}{4}$）

大　宰　府　史　跡

昭和54年度発掘調査概報

昭和５５年３月

発　行　　九州歴史資料館
筑紫郡太宰府町大字太宰府字太郎左近1025

印　刷　　正光印刷株式会社
福岡市中央区赤坂１丁目２番21号

龍泉窯系青磁

		1	2		3	4		5				6		7	備　考
			a	b		a	b	a	b	c	d	a	b		
椀	Ⅰ														5・dは内面見込みに文字をスタンプするもの
	Ⅱ														
	Ⅲ														1は内外無文のもの

龍泉窯系青磁

		1		2		3	4	備　考
		a	b	a	b			
小椀	Ⅰ							1・aは輪花のないもの
	Ⅱ							
	Ⅲ							1・aは輪花のないもの 2・aは内面見込みに文様がないもの

龍泉窯系青磁

		1		2	3	4		5	備　考
		a	b			a	b		
杯	Ⅰ								
	Ⅱ								
	Ⅲ								4・aは内面見込みに文様がないもの

同安窯系青磁

		1			2	備　考
		a	b	c		
椀	Ⅰ					
	Ⅱ					Ⅲ類の形態で内外無文のもの
	Ⅲ					1・aは内面無文のもの
	Ⅳ					
小椀						

同安窯系青磁

		1		2		備　考
		a	b	a	b	
皿	Ⅰ					2・aは内面見込みに文様がないもの
	Ⅱ					
	Ⅲ					

龍泉窯系青磁

		1		2			3		備　考
		a	b	a	b	c	a	b	
皿	Ⅰ								1・a、2・a、3・aは内面見込みに文様がないもの

越州窯系青磁

		1	2					3	備　考
			a	b	c	d	e		
椀	Ⅰ								
	Ⅱ								
杯									
皿									

別図　青磁分類図（1/3）（横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」『九州歴史資料館研究論集4』1978をもとにして作製したものである）